

ポケットモンスター レーヴの物語

景雲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一つの地方を旅し、旅を終えたら次の地方。様々な地方を旅してきた少年、レーヴ。幼い頃を過ごしたカロス地方の旅を終え、自宅のあるクチバシテイに帰宅したレーヴは久しぶりに母親と対面……。できなかつた。机の上に置かれた母からの置き手紙に導かれ、旅をしたいキツカケとなった人物、そして……。新たな思いと目的を胸に、レーヴはアローラ地方に旅立った。

※注意事項

・初めての投稿になります

・アドバース、リクエスト等を頂けたら嬉しいです

・文才は・・・無いです（頑張って書きます）

・原作ゲーム、アニポケ、ポケスペ要素等あります

上記の通り、原作ゲームやアニメ、ポケスペ等の要素を入れていきますので原作と展開が違ってくると思います。登場人物もオリジナルの手持ちをさせていただきます。

目次

登場人物&設定(ネタバレ注意)

1

登場人物&設定 2 (ネタバレ注意)

9

第1話 アローラ地方へ | 14

第2話 漂流少女は訳あり | 24

第3話 ほしぐもちゃん | 35

第4話 ロトム図鑑 | 50

第5話 ポケモンスクールにて | 62

第6話 最初の試練 | 74

第7話 アローラの友達 | 88

第8話 マラサダは程々に | 99

第9話 奉納試合決着 | 107

第10話 ゼンリヨクゼンカイ・鬼のハ

ラ | 121

第11話 影を落とす過去 | 137

第12話 アローラロン、その名は

146

第13話 目的 | 156

第14話 アーカラ島上陸!! | 169

第15話 カヒリ登場 | 182

第16話 グラジオ登場 | 195

第17話 スイレンの罠 | 209

第18話 ミズの試練突破!! | 220

第19話 ロイヤルマスク!? | 233

第20話 バトルロイヤル

—

第21話 カキの試練

—

254 244

登場人物&設定 (ネタバレ注意)

レーヴ

出身地：カロス地方

初登場：第1話 アローラ地方へ

年齢：13歳

一人称：僕

職業：ポケモントレーナー

生まれてから幼少期をカロス地方で過ごす。その後クチバシティに移り住み、近所のポケモン達と遊ぶ生活を送る。

ある日、いつもと同じようにポケモン達と遊んでいたところにクワイと出会い、数日間を共に遊んだりして貰った。その際に旅についての話を聞き、自分も旅に出たいと思う。別れ際にクワイよりアローラのポケモン、カリキリを受け取る。

10歳から多くの地方を旅し、生まれ故郷カロス地方の旅を終えて帰宅したところ、母親の置手紙を見てアローラ地方に自身も引越す。

クワイ博士の提案で島巡りに挑戦することになる。

アローラのプロゴルファーであるカヒリの大ファン
地面効果翼機を所有。アローラ地方まで飛行させたが故障し、メレメレ島乗船所に預ける

※レーヴの手持ちポケモン

・ラグラージ

出身地：ホウエン地方

初登場：第2話 漂流少女は訳あり

性別：♂

技構成：れいとうパンチ、じしん、ハイドロポンプ、ハイドロカノン

捕獲ボール：ネットボール

レーヴがホウエン地方を旅して捕まえたポケモン。ヒレはリーダーになっており、周囲の情報収集に役立つ。力は絶大であり、大型船も曳く力を持っている。泳ぐスピードは速く、その速度はジェットスキーに例えられる。

・ラランテス

出身地：アローラ地方

初登場：第3話 ほしぐもちゃん

性別：♀

技構成：ソーラーブレード、はなふぶき、にほんばれ、こうごうせい

捕獲ボール：スーパードボール

レーヴがククイとの別れの際にククイがアローラから取り寄せて譲ったカリキリが進化したポケモン。レーヴが初めて捕まえたポケモン以外では一番付き合いが長い。警戒心が強く、急に動いた者には襲い掛かろうとする事がある。

・クロバット

出身地：カントー地方

初登場：第5話 ポケモンスクールにて

性別：♂

技構成：はがねのつばさ、エアカッター、きゆうけつ

捕獲ボール：モンスターボール

レーヴが自分自身で最初に捕まえたズバットが進化したポケモン。ボールから出ている時はレーヴの頭の上に止まろうとするが、今の体重ではレーヴが支えられないので

その度に一緒に倒れる。音を一切立てずに飛行する事が可能であり、それを生かして相手に忍び寄ることができる。

・クレベース

出身地：カロス地方

初登場：第6話 最初の試練

性別：♂

技構成：ふぶき、こおりのキバ、あられ

捕獲ボール：ドリームボール

レーヴがカロス地方を旅して捕まえたポケモン。積極的に攻撃にいくのではなく、相手に攻撃させてそれを反撃する戦いを得意とする。レーヴ曰く、カチコールの時は体当たりが愛情表現だったが、今ではのしかかるらしい。

・ガブリアス

出身地：シンオウ地方

初登場：第10話 ゼンリョクゼンカイ・鬼のハラ

性別：♂

技構成：りゅうせいぐん、ドラゴンクロウ、アイアンテール、つるぎのまい

捕獲ボール：ダークボール

レーヴの手持ちのエースを務めるポケモン。

フカマル時に洞窟で他のポケモン達に襲われている際に出会った。母親と思われるガブリアスに守られていたが、レーヴがフカマルをポケモンセンターに運んだ隙に姿を消す。以来レーヴと旅を重ね、今では立派なガブリアスとなってエースを務める実力を得る。

・ランターン

出身地：ジョウト地方

初登場：第13話 目的

性別：♂

技構成：れいとうビーム、かみなり、なみのり、あやしいひかり

捕獲ボール：ルアーボール

ロトム図鑑

出身地：シンオウ地方（中のロトム）

初登場：第4話　ロトム図鑑

一人称：僕

正式名称はロトム・ポケデックスフォルムと言うらしいが、本人含めてそう名乗らず『ロトム図鑑』又は単に『ロトム』と呼ばれている。カロスの発明少年、シルフカンパニー、オーキド博士が共同開発した新世代のポケモン図鑑であり、図鑑がないアローラ地方でのポケモンの生態を記録するためにレーヴが譲り受ける。

よくレーヴと喧嘩はするが、基本的には仲良く昼寝したりしている。

データの収集のための撮影機能だけでなく録画機能があるらしいが、殆ど撮影機能しか使っていない。

リーリエ

出身地：？

初登場：第2話　漂流少女は訳あり

年齢：13歳

ワタケシ

一人称：私

職業：？

アローラ地方に入ったレーヴが海で救助した少女。

白い肌に長い金髪、白いノースリーブワンピースと何処かのお嬢様を思わせる格好でそれに不釣り合いな謎の白いスポーツバッグを提げている。

レーヴの名前から出身地を当ててみせて本人を驚かした。

自分の家に何かしらのトラウマを抱えているのか、その話題が出た途端、本人が正気でいられない位取り乱した。

ポケモンスクールにてタマゴが孵化し、そのポケモンであるロコンを初めてゲットした。

『ほしぐも』と呼ばれる謎のポケモンを連れている

※リーリエの手持ちポケモン

・ロコン (アローラの姿) NN:シロン

出身地:ジョウト地方 (孵化地はアローラ地方)

初登場:第6話 最初の試練

性別:♀

技構成:

捕獲ボール:モンスターボール

レーヴがアローラ地方に運んだタマゴから孵ったロコン。出身地の姿ではなくア

ローラの姿で生まれたのはポケモンの姿が出生地の環境に影響される事を示している
とナリヤ博士は考えている。タマゴが孵った際に一番近くに居たりリーエに懐き、レ
ヴの勧めでゲットされる。

彼女がゲットした一番最初のポケモンとなった。

登場人物&設定 2 (ネタバレ注意)

ハウ

出身地：アローラ地方

初登場：第7話 アローラの友達

年齢：13歳

一人称：俺

職業：ポケモントレーナー

リリィタウンで開かれたポケモンバトルの大会会場でレーヴと知り合ったトレーナー。島キングのハラを祖父に持っているが、暫く家族と共にジョウト地方で暮らしていた。最初は島巡りをするつもりであったが、自身の実力不足を感じて強くなるためにレーヴの島巡りに同行する。

父と祖父の確執について知っているかは不明。

マラサダが好物。その食べる量は半端な量ではない。

※ハウの手持ちポケモン

・モクロー

出身地：アローラ地方

初登場：第13話 目的

性別：♂

技構成：はっぱカッター、つつく

捕獲ボール：

ハウが小さい頃に祖父の元に居たポケモン。幼い頃からハウと仲が良く、一緒に森の中で遊んでいた。普段は寝ているが、バトルの時は高い飛行能力を生かして戦う。

アローラに帰ってきたハウの事を覚えており、そのままハウのポケモンとなる。ハウ曰く、最高のパートナー。

・ピカチュウ

出身地：ジョウト地方

初登場：第9話 奉納試合決着

性別：♂

技構成：でんこうせっか

捕獲ボール：

ハウがジョウト地方に居た頃に捕まえたポケモン。

・チコリータ

出身地：ジョウト地方

初登場：第9話 奉納試合決着

性別：♂

技構成：はっぱカッター、つるのムチ

捕獲ボール：

ハウがジョウト地方に居た頃に捕まえたポケモン。

・オンバット

出身地：アローラ地方

初登場：第13話 目的

性別：♂

技構成：

捕獲ボール：

ハウがアローラに帰って来て捕まえたポケモン。ハウ曰く、イタズラ好き

・イーブイ

出身地：？

初登場：第13話 目的

性別：♂

技構成：

捕獲ボール：

ククイ

出身地：アローラ地方

初登場：第1話 アローラ地方へ

年齢：？

一人称：僕

職業：ポケモン博士

アローラ地方にてポケモンの『技』に関する研究をするポケモン博士。

上半身裸の上に白衣、グレーの短パンにサングラス姿という温暖なアローラ地方らしい恰好をしている。

レーヴがまだポケモンを持ってない年齢の時に出会い、旅の良さを教えてアローラから取り寄せたカリキリを託す。成長し、トレーナーとして腕を磨いたレーヴとその母親をアローラに呼んだ張本人。

レーヴを島巡りに誘って、船の用意をするなど旅のサポートをする事になったが、果たしてその真意は？

※ククイの手持ちポケモン

・ルガルガン（まひるのすがた）

出身地：アローラ地方

初登場：第8話 マラサダは程々に

性別：♂

技構成：

捕獲ボール：

ククイ博士が飼っていたイワンコが進化した姿。

第1話 アローラ地方へ

少年はポケモンが好きだった。

この世界に生きる不思議な生物。ポケットモンスター、縮めてポケモン。

物心ついたときから家の近くに住み着くポケモン達と遊び、食事をし、一緒に寝ていた。時には外で一夜を明かし、翌日に母親に怒られても懲りずに繰り返したりした。

それぐらい、ポケモンが好きだった。今日も家の近くの森をポケモン達と探検していた。そんな時、一人の人間と出会った。

「ポケモンが好きなのか？」

見知らぬ人間だった。褐色肌の上に白い上着を着用し、グレーの短パンを履いている。

「おっと、失礼。僕はククイ。カントー地方のジム巡りをしている最中でね。クチバジムを目指している最中なんだ」

「僕はレーヴといいます」

ククイと名乗った人物は握手を求めていたのでそれに応えつつ少年も名乗る。

「あと、先ほどのポケモンが好きなのか?の質問ですが、答えは大好きです」

それを聞いたククイは腰に手を当てて

「ハツハツハ。大好きか。そうかそうか。だったら、大きくなったら旅をするの良い。色んな地方で色んなポケモンに出会えるぞ。そうすれば、もつとポケモンの事が好きになる」

笑いながらそう言った。少年・レーヴは顎に手を当てて考えるポーズをする。

「旅・・・ですか。まだ僕はポケモンを捕まえられる年齢では無いですが、捕まえられるようになったら旅をしたいですね」

「捕まえてない・・・。じゃあ、このポケモン達はご両親の?」

ククイはレーヴの周りのポケモン達を見渡しながら言う。

「この子たちは家の近所に住んでいるポケモン達です。よく一緒にこうして遊んだりしています」

周りを囲うポケモン達もそれに応えるよう鳴き声を挙げる。ククイはそれに頷いて見せる。

「なるほど。大分懐いている様に見える。君の事もとても信頼しているようだ」

「それよりもククイさん、旅について僕の家で詳しく教えてくれませんか?」

「え?別にそれは構わないけど」

「じゃあ、お願いします」

そう言うなり、レーヴはククイの腕を引っ張って家の方に向かって走り出す。

「おいおい、そんなに急がなくても」

そんな二人の後ろをポケモン達がついてきた。

家に着くなり、母親にククイの事を話す。最初、母親は驚いていたが、直ぐに分かってくれてお茶を出すと自分の部屋に戻っていった。

その後、ククイはレーヴに旅の事を話す。自分がアローラ地方という遠い地方出身で、そこでは島めぐりという伝統がある事。ククイはそれを制覇し最後の大大試練を終えた事。だが、自分はそこで頂点を決めるリーグを開催したいと思い、島巡りに似た文化を持つカントー地方を旅してジム巡りをしているのだという事。

レーヴはククイの話に目を輝かせて聞いた。ククイはその後、クチバジム挑戦までの間、レーヴに付き合っっては一緒に遊んだ。クチバジムのジムリーダー・マチスは船乗りとしての仕事をしているのでジムを空けていることがある。なので、挑戦できるまでククイはクチバシテイに滞在している。

ククイと一緒にという事で、家に帰らなくても怒られないのは良かった。一日中ポケモン達と駆け回り、疲れて一緒に寝る。そんな生活をしていた。

遂にクワイはジムリーダー・マチスに挑戦し、見事勝利してジムバッジを手に入れたので次の街を目指す事になった。僕は見送りに街外れまで一緒に歩いて行く。

「そんな顔するなって。僕の地方にはマナーロっていう古い言葉があつてな。意味は『貴方と私は共に生きていきます』って言葉だ。離れていても人と人は繋がってるんだよ」

歩きながらクワイは言う。僕が別れを悲しんでるのを察したのだろう。

「マナーロ・・・良い言葉です」

「そうだろ？。僕は好きな言葉さ。アローラを表してるって思えてな」

クワイは頭の後ろに手を組んで歩く。そろそろ別れる場所となる。

「そうだ。忘れるところだった。今日君にこれを渡そうと思つて、さっきアローラから転送して貰ったんだ」

そう言つてクワイは鞆から1つのスーパーボールを取り出し、それをレーヴに渡した。

「これ・・・って」

「アローラ地方に住むカリキリってポケモンなんだ。大事に育ててくれよ」

レーヴはスーパーボールを受け取る。スーパーボールの青い部分が若干透けて見え

るので、それで姿を確認する。

「貰って良いの？」

「ああ。それじゃあ、僕は行くよ。アファイホウ」

アローラの言葉で『また会いましょう』と言って手を振りながら歩いて行く。

僕も手を振りながら

「ポケモン、ありがとうございませす!!。大切に育てていきます。さようなら!!」

ククイが見えなくなるまで見送った。

—数年後—

レーヴは自宅に向かって歩いて歩いていた。10歳で正式にポケモンを捕まえられるようになってから旅を続けていた。

一つの地方を旅しては別の、また終えては別のと繰り返していた。

「カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ……」

手帳にはこれまで旅を終えた地方が記されていた。そこにペンを取り出し

「カロスもこれで制覇した」

カロスと書き加えた。生まれ故郷であるカロスも制覇した。

「次はどうしようか」

しかし、家で少しゆっくりするのもありかもしれない。そう思っていたら自宅に到着する。

僕はドアを開けながら

「ただいまー」

と言う。しかし、中からは返事もなく静かなままだ。それどころか、家具もあまり残っていない。僕は荷物を置くため、残された少ない家具のテーブルに近づくとそこには置き手紙と思しき便箋が置かれていた。

『レーヴへ。ククイ君を覚えてますか？彼の住むアローラ地方に引越すことにしました。貴方も旅を終えて帰宅したらいらっしやい。そうそう、ククイ君が連絡を欲しがっていたので連絡するように』

そう書かれていて、最後の方に連絡先らしき番号が書かれている。自分の連絡先は・・・一切かかれていない。僕は溜め息をつくが、とりあえず連絡をしない訳にもいかなないので壁に掛かっているテレビ電話の受話器を取り、便箋に書かれた番号を押す

『レーヴか・・・久しぶりだな』

画面にはククイが映し出される。

『知つてると思うが君のお母さんは既にこつちに引つ越しているんだが、君もこつちに来てほしいんだ』

「手紙を見ましたよ。ただ、母の連絡先が書かれていないんで連絡できてませんが。準備が出来たら向かうつもりです」

レーヴは再び手紙を見ながらククイに言う。

『そうか。なら、楽しみに待つてるぞ。お母さんにはこつちから伝えとこう。そうそう、僕は今は博士号を取得しているんだ。ポケモンの技に関するの研究を専門にね』

「それはおめでとうございます、ククイさん。いえ、ククイ博士」

通りで白衣姿の訳だ。相変わらず、上半身裸だけど

『ありがとよ。それじゃあ、楽しみにしてるから早く来いよ。っと、大事な要件を忘れるところだった。カントー地方にいらつしやるオーキド博士と君が面識があるとお母さんから聞いてな。大事な荷物を頼んでるんだが、そつちに連絡してタイミングが合えば持つて来て欲しいんだ』

「分かりました。それでは、ククイ博士」

そう言うのと電話を一旦切る。そして、オーキド博士の番号を押す

『おー、レーヴか少し待つてな』

オーキド博士が出るなり、画面から一旦博士の顔が外れる。どうやら車で移動しているようだった。

『今、クチバシティに向かつておる所じや。儂の教え子がクチバに研究所を開こうとしておつての。研究所に関して、儂の意見を聞きたいそうじやし、儂もクチバから荷物を送る用もあるからそっちに向かつておつての。お前さんは今はカロス地方じやろ?』

車を路肩に停車させるなり、顔を画面に合わせて話してくる。

「いえ、今はクチバの自宅にいます。それより博士、その荷物の送り先はアローラ地方のククイ博士ですか?」

『一つはそうじやが、もう一つは儂の従弟でアローラ地方でポケモンスクールを経営する傍らリージョンフォーム研究をしておるナリヤ博士じやよ』

「リージョンフォーム?」

聞きなれない言葉に僕は疑問を浮かべる。オーキド博士はそれを見て

『ポケモンが大きく形を変える事が進化というが、今学会で議論されておる中には各地方に適應した独自の姿をしたポケモンの事を真の進化と呼ぶに相應しい。つと数年前からされておる。その独自に適應した姿をリージョンフォームと言うのじや』

「なるほど」

オスメスの微妙な姿違いは前から確認されているし、色の違う個体も時々生まれる。

地方の環境に適應するよう独自進化するポケモンがいてもおかしくない。まだポケモンに謎な部分は多く残っているが、それを一つ一つ解明されて行ってもいる訳か。

「それで、ククイ博士から可能なら荷物を預かって僕がアローラに持ってくるよう言われているのですが、そのナリヤ博士の荷物もよければ持っていきますが」

そう言うとおーキド博士は笑顔になる。

『いやー実はすごく助かるんじゃ。何せ、その荷物はタマゴじゃからのう。船便では時間がかかってしまつて、移動途中に孵化してしまつたらどうしようかと思つていた所じゃ。僕も多忙で長期間研究所を空けていられないからのう』

「では博士、お待ちしています」

『うむ、ではこれから先ず君の自宅に向かうとしよう』

電話を切り、おーキド博士が来るまでの間に出発の準備をする。つと言つても、殆どする事なんてない。殆ど母親が引越す際に持つて行つてしまつている。

着替えをすませて家の前で待つているとおーキド博士の乗つた車が到着する。

「港まで送つていこう」

おーキド博士にそう言われ、僕は博士の車に乗り込んだ。

クチバ港には各地を結ぶ船会社の定期船の他、個人所有のボート等も船着き場には係

留されている。その中に僕のもあった。但し、僕のは他の地方に行くために速さを求め
ている。

その地面効果翼機乗り込んだ。

「じゃあ、頼んだぞ」

オーキド博士から荷物を受け取り、機内に積み込む。

「それじゃあ博士、行ってきます」

そう言ってハッチを閉じ、加速位置までゆっくりと水上を移動する。

(アローラ地方……。こいつ関連もあっていつかは行くつもりだったが)

上着のポケットから数字の書かれた紫のボールを取り出す。

(必ずこいつを元に戻す方法を見つける。友としての約束を果たす)

再び元のポケットに戻し、機外を見る。機体を加速位置まで移動させたらスロットル
を全開にして加速していく

(アローラ地方に向かって、出発)

全速力でアローラ地方に向かって移動を開始した。

第2話 漂流少女は訳あり

順調にアローラ地方に向けて飛行していたのだが、目的の島が見えた辺りでエンジンから黒煙が出始めた。

「ヤバイ!!」

エンジンから黒煙が出たと同時に高度が下がり始める。レーヴは安全に着水させるために何とか姿勢を安定させるが、推進力を失っているので速度も高度も下がっていくのは変えられない。

「何とか、着水した」

僕はハッチを開けてエンジンのの方を見た。幸い、エンジンから火災は起こっていないようなので安心して座り込んだ。

「さてと、もう少しだから曳いて貰おう」

上着からネットボールを取り出し、中のポケモンを機内に出す。

「ラージ!!」

出したのはラグラージである。ラグラージはボールから出るなり僕の方に寄って来

ては頬をすりすりする。いつもの愛情表現だ。

「痛いよ、ラグラージ。すまないけど、外に出てこの機を曳いて欲しいんだ」
「グラー」

ラグラージは頷くなり、ハッチから外に出て機体の前に回る。僕もハッチから主翼に上り、曳くためのロープを点検口ハッチから取り出してラグラージの方に投げた。

「頼むよ、ラグラージ」

ラグラージはそれを受け取ると島の方に向かって曳き始めた。

暫く曳いた頃、ラグラージが機体に近づいて窓をノックし始める。

「どうしたラグラージ？」

僕はその窓に寄って尋ねるとラグラージは身振り手振りで説明し始めた。どうやら、ラグラージのリーダーに何か反応があつたらしい。ラグラージのヒレはミスゴロウ・ヌマクロー時代から変わらずにリーダーとしての役目を持っている。

「分かった、行っておいで」

そう伝えると、ラグラージは猛スピードで反応があつたであろう方角へと泳いでいく。ラグラージの泳ぐ速度はジェットスキーに例えられる位に速い。遠くに見えたと思っても次の瞬間には近づいているのだ。

また暫くするとラグラージが戻ってきた。その背中には一人の少女を乗せていた。

「大変だ！」

少女をラグラージの背中から機内につ張り上げると床に寝かせる。ラグラージも機体をよじ登って機内に入ってくるなり、心配そうに少女を見る。

「グラ・・」

「心配しなくても大丈夫だ。気を失っているだけだ」

そう言って僕は少女を見る。白い肌に長い金髪、白いノースリーブワンピースを着ていて大きなスポーツバックを持っている。スポーツバックは兎も角、どこかのお嬢様と
言うような感じだった。

「ともかく、服を乾かさないとな」

機体後部からドライヤーを持って来て温風を出して服を乾かし始める。ラグラージはその様子を見た後、再びハッチから外に出て機体を曳き始める。

「ふう、ようやく乾いたか」

ドライヤーで少女の服を乾かし終えたのでドライヤーを片付けに戻ろうとしたところ、少女の臉がうつすらと開くのを見た。

「気が付いた？」

そう僕は少女に尋ねたところ

「ひいっ!？」

少女は驚くなり、目にもとまらぬ速さで壁際に行く。その驚き様にこつちも驚いてしまった。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ」

少女は明らかに震え、怯えている。目からは少し涙が出ている。

「弱ったなあ」

僕は頭を掻きながら考え込んでしまう。どうしたらよいものか・・・

「ここは、何処ですか？」

ようやくまだ怯え、警戒はしているが意思疎通を図ろうとしてくれたようだ。

「アローラ地方に入っているのは間違いないんだけど、何処って言われてもなあ。メレ島近くの海上としか言えないかな」

生憎、アローラ地方には今日来たばかりなので正確に何処って答えられない。

「では、ワタクシ 私は助かったのですね」

「え？ああ、海を漂流してたけどラグラージが見つけてくれたから助かったよ」

僕は機体を曳くラグラージを指さして言う。少女は指の先にいるラグラージを見る。

「そうですか」

そう言うなり、少女は立ち上がりワンピースの裾を掴まんで少し持ち上げつつ

「助けてくれてありがとうございます。私はリーリエと申します」

そう、お礼と自己紹介してきた。僕も立ち上がって

「僕はレーヴ。今日この地方に越してきてる最中だよ。宜しく」

その言葉にリーリエと名乗った少女はお辞儀をする

「こちらこそ、よろしくお願いします。……あの、レーヴさんはカロス出身の方ですか？」

顔を上げるなり、リーリエは聞いてくる。いきなり出身地を当てられて僕は驚く

「驚いた。出身地を当てられるとは思わなかったよ」

「名前が……カロス地方の古い言葉にありますので」

「うん、僕は最高の名前を名付けてくれたと思うよ」

リーリエは笑顔になるが、何かに気づいたように頭を触る。

「帽子！、私の帽子は知りませんか!?!」

慌てた様子でリーリエは僕に聞いてくるが、心当たりはない。

「いや、近くにあつたらラグラーズと一緒に持ってきたと思うけど、帽子を持っていなかったし、多分近くには無かつたんだと思う」

「そうですか……」

リーリエは再び座り込んでしまう。その様子を見て、よつぽど大切な帽子だったのだろうかと思つた。

ラグラージに曳かれ、メレメレ島のメレメレ乗船所のドックに到着した。船台に機体を載せて海から引き上げられる。メレメレ島をはじめ、アローラ各所にある乗船所は船のメンテナンス等も行えるようドックを保有しており、その内の一つに修理のため入渠したので。

「エンジンのタービンブレードが破損して、中の燃焼室などを傷つけてます。完全な金属疲労ですねえ。こりやあ、交換しできませんぜ」

作業員がエンジンをチェックすると直ぐに原因が分かったのか、下に居る僕やドックの親方の方を見て言う。

「だそうだ、ニイチャン。エンジンを交換しなきゃならない。序に、艇体をメンテするから凶面が欲しい。何処で作られたんだ？」

艇底には貝やフジツボが付着しており、機体の外板も凹へこんでいる。着水時に無理な負荷が掛かったのだろう。

「エンジンはデボンコーポレーション、胴体はクスノキ造船所です」

「そうか、分かった。まあ心配するな。ウチの職人は皆優秀だ。綺麗に直してやるからよ」

安心させるように親方は肩をバシバシ叩く。力仕事をしているために力強く、少しよろめきそうになる。

「よ、よろしくお願ひします」

それを聞いた親方は他の船大工たちに指示するために歩いて行く。僕はリーリエを探すと船台近くでラグラージにお礼をするようにお辞儀をしていた。

「ここまでご苦労様ラグラージ」

僕もお礼を言いにこちらへ歩く。ラグラージは照れたように片手で頭の後ろを掻いている。

「やつぱり、ラグラージさんも帽子は見えていないと言っています」

リーリエはこちらに向き直って言う。それにはラグラージも申し訳なさそうにしている。

「あー、いえ。ラグラージさんのせいではありません。私が確りとしていれば」

リーリエはラグラージの方を向き直って言う。僕もこれ以上気ままずくなるのも嫌なのでネットボールを取り出す。

「ラグラージ、ここまでご苦労様。ゆっくり休んでくれ」

ラグラージを戻すとリーリエは再びこちらを向く。

「すみません、私のせいで。助けて頂いたのにラグラージさんに嫌な思いをさせてしまったでしょうか？」

リーリエは申し訳なきように下を見ている。

「気にしなくて大丈夫だよ。でもリーリエさん、そんなに帽子は大事なものだっただすか？」

「あ、私の事はリーリエで構いません。帽子、というよりもあれに付いてたのはおにい：あ、いえいえ何でもありません」

最後の方は聞き取りにくくて分からなかった。しかし、本人が良いとはいえ女の子を呼び捨てにするのは……

「り、リーリエ……」

どうにも慣れない。

「はい、何ですかレーヴさん？」

……僕の事は呼び捨てにしてくれないようだ。

僕とリーリエは船大工達の仕事の邪魔しないよう、ドックの外に出て海岸線を歩いて行く。

「そうだ、これからどうする?」両親が心配していると思うし、一旦家に帰らないと」

その瞬間、リーリエの顔は一瞬で青ざめる。白い肌なのが本当に青くなったように、血の気が引いている。腕も痙攣しながら自身を守るように両肩に触れる。歯もガチガチと音を立てる。そして、その場に座り込んだ。

「ちよ、リーリエ! どうしたの!?!」

あまりの豹変ぶりに慌てて僕もしゃがんでリーリエの顔を見る。絶え間なく歯が音を鳴らしているが、その隙間から微かな声が漏れている。しかし、聞き取れない。目の焦点も合っていないようだった

「リーリエ!、リーリエ!!」

僕は肩を揺すって何とか正気に戻そうとする。雪のように白い肌は本当に雪のように冷たく感じる。

「……ごめん」

そう言つてレーヴはリーリエの頬を軽くビンタする。それで正気に戻ったのか目の焦点が合い、痙攣等も治まってくる。

「あ、私……は?」

先ほどの記憶が抜け落ちているのか、茫然としてリーリエは僕を見てきた。

「ごめん、リーリエ。あのままじゃあ極度のストレスで失神しそうだから強引に戻した。

その為に、頬を軽くとはいえピンタした」

リーリエは痛みに気付いたのか、ピンタした頬を撫ぜる。

「いえ、すみませんレーヴさん。家の方は大丈夫ですので……」

「え？……分かった。」

僕はそう言うのと立ち上がる。

（あの症状、普通じゃない。家に帰るのがそんなにトラウマなのか……？）

考え込んだが分からない。

「じゃあ、どうしようか？僕はこれから自宅に行くのだが……」

それを聞くなり、リーリエも立ち上がった。

「あの、私も一緒に連れて行って貰えませんか？」

いきなりの申し出に再び僕は驚いた。危うく変な声が出そうにもなった。

「ちよ、リーリエ。良いのかい？」

なるべく平静を装って聞くが、心臓は鳴りやまない

「はい。大丈夫です」

リーリエは笑顔で答える。先ほどの症状が嘘みたいだった。

「そ、そうか」

僕はそう言って歩くのを再開する。内心は……まだ心臓が鳴りやまない。ドキド

キしている。

「ん？あれ？・・・リーリエ？」

後ろを振り返るとリーリエが付いて来ていないことに気付く。先ほど足を止めた所から動かず、何やら提げているスポーツバックに話しかけているようだった。

「あのスポーツバック・・・」

前後にモンスターボールの装飾をあしらった白い大きなスポーツバック。彼女の服装とあまりに不釣り合いなそのスポーツバックが時々揺れている。彼女が動いていないにもかかわらずだ。

「あ、待つて下さい、レーヴさん」

リーリエはそう言うなりこちらに駆けてくる。色々とは彼女には事情がありそうだ。

第3話 ほしぐもちゃん

海岸線を歩き、ハウオリシテイの街外れにあるログハウス。これが、今回母が購入した家のようなだった。

「さて、緊張するなあ」

後ろにはリーリエがいる。いきなり見知らぬ少女と一緒に自宅に入って母親に何て説明すれば良いか凄く迷う。その思いが玄関のドアを開けようとする僕の手を止める。「開けないのですか？」

その後姿を見てリーリエは不思議そうに僕に尋ねる。

（うん、リーリエ。今の君なら自宅にも帰れるよ）

そんな風に悩んでいると不意に玄関が開いた。中からはニヤースが歩いて出てくる。

「ギニャア」

ニヤースは鳴くなり、家の中に戻っていく。

「ちよつとレーヴ、そんな所に突っ立ってないで。先ずは『ただいま』でしょ」

奥からは母親の音がする。久しぶりに帰ったら、自分の息子に黙って引越しをして、自分が玄関先で悩んだのが

「何なんだろう？この普通の対応」

馬鹿らしいと思えるくらいに普通の対応だった。まあ、これが母親の良い所でもあると言えそうだが。

「相変わらず、状況を軽く考えるというのか・・・あまり深刻に考えないんだね、母さん。・・・ただいま」

「一言余計よ。お帰り」

安心する。何処まで行っても、母親は母親だ。

「あの一・・・」

リーリエがドアの所に立って申し訳なさそうにしている。それを母親が一瞥し

「何？彼女？・・・。アンタ、ここに来ていきなりナンパしたの？。なら遅くなったのも許すけど」

「本当に状況を軽く考えますね、母さん」

「ごめん。今度は怒りが込み上げてきた。リーリエは戸惑ったようにアタフタしている。」

「そう。リーリエちゃんも大変ねえ」

「ここまでの状況を母親に説明し終えた所で母さんはリーリエの方を向いて言う。」

リーリエはとりあえず事故で漂流していた事にしておき、家に関しては一切触れないように説明しておいた。

とりあえず、自分の荷物を自分の部屋として使う所に運び込んだ。引越して少し時間が経っているので家の中は粗方片付いていた。あとは僕が到着して自分の荷物を整理するだけとなっていた。

「つと、こつち来て色々とおつたから忘れる所だった」

アローラに来る前にオーキド博士から預かった荷物。最初にククイ博士に渡そうと思っていた荷物が出てきた。

「母さん、ごめんだけど。今からククイ博士の所に行つてくるね」

母さんは台所で食事の準備をしており、リーリエもそれを手伝って野菜を切っていた。

「あ、待つて下さいレーヴさん」

リーリエが呼び止めようとしたが、レーヴはそのまま出ていく。

「もうー！」

リーリエは溜め息を付きながら言う。それを見ていた母親は

「行つてきなさい」

リーリエは驚いたように母親を見る。

「大丈夫よ、私一人でも。今夜はククイ博士とその奥さんも呼んでのバーベキューだけど、殆ど下ごしらえは終わってるのよね」

台所の下の扉を開けると既に幾つかの料理が準備できていた。

「それに、短い距離とはいえリーリエちゃんはその子と一緒に来た。今までそんな事無かったのよ、あの子。遊ぶのは常にポケモンと一緒にだけど、裏を返せばポケモンとしか一緒にいなかった」

母親はレーヴが出て行った扉の方を見ながら言う。

「そんな風に見えないかもしれないけど、あの子はあまり他人と関わらなかつたの。そりゃあ、何人かとは関わったわよ。ククイ博士もその一人ね。でも、年代代では私が知る限りリーリエちゃんが初めてね」

母親はリーリエの方に向き直ってから、

「だから、貴方には一緒に居て欲しいの。この先も。恐らく、あの子はまた旅に出るか」

そう伝えた。リーリエはそれを聞くなり、椅子の上に置いてあつたスポーツバッグを肩に提げると

「分かりました、お母さま。行ってまいります」

リーリエは急いでレーヴの後を追うように出ていく。母親はリーリエの切りかけの人参を掴んで持ち上げる

「それに、この腕じゃあ幾ら食材があっても足りなくなっちゃうし」
切ったつもりが切れていない、片側が繋がった人参が伸びていた。

「レーヴさん、待って下さい」

僕が浜の方にあるククイ博士の研究所に向かって駆けていると、家の方からリーリエの声がする。振り返るとリーリエが慌てた様子でこちらに向かって来ていた。

「リーリエ、どうしたの?」

リーリエが追いつくなり、僕は聞く。リーリエは息を整えると

「私も一緒にククイ博士の元に行きます」

そう宣言する。

「別に構わないけど、ただ荷物を渡しに行くだけの予定だけど」

僕は歩くのを再開して浜辺の研究所兼ククイ博士の自宅に到着する。

「ここですか?」

リーリエが横に来て聞いてくる。

「うん、聞いている場所はここのだだけだ」

僕は中に入るために段差を超えようとしたら、中から音と声が聞こえてくる。

『うおー、良い技の威力だ!!』

『ドゴン!!』つという何かが壁に叩きつけられるような音がしたかと思うと、中から男性の声が聞こえる

『よーし、もういっちょ来い!!』

再び、今度は『パリン!!』という何かが割れるような音が聞こえる。

『よし、最後に全員で来い!!』

その言葉と同時に『バキツ!!』という音と共に人影が天井を突き破って出てくる。その人影は重力に従い空中を暫く飛んだ後はリーリエの近くに落下した。

「ひゃあ!」

リーリエは驚いて尻もちをつく。僕はリーリエの所に駆けよって立つのを手伝いつつ

「まさか技の研究って、自らに打ち込んでやっているんじゃないですよね?」

先ほど宙を舞った人影。上半身裸の上に白衣、グレーの短パンにサングラス姿の男性を見る。

「オーキド博士から聞いたが、電光石火のように到着が早くて助かるよ。それと、ポケモンの技をその身に受けないと分かんこともあるんだよ」

男性は立ち上がりながら僕の方を見て言う。

「直接会うのは8年ぶりですかね、ククイ博士。お久しぶりです。それと、」

「アローラ。初めまして、ククイ博士。リーリエと申します」

僕が紹介しようとするリーリエは一步步み出てスカートの裾を摘まみ、少し持ち上げてから名乗る。

「アローラ。初めまして、リーリエ。僕はポケモンの技に関して研究しているククイだ」
ククイ博士はリーリエの挨拶に答えたのち、僕の方を見る。

「元氣そうで良かったよレーヴ。あの時と変わらず、ポケモンが好きなのはお母さんから聞いたよ」

僕は上着から一つのスーパーボールを取り出し、中のポケモンを出す。

「ララ〜」

中から出てきたラランテスは鎌を前方に構えて戦闘態勢になる。

「ラランテス、別にバトルの為に出したんじゃないよ」

「ラ?」

僕の言葉にラランテスは構えていた鎌を下ろす。ククイ博士はゆつくりとラランテ

スに近づく。

「ほお、非常に鮮やかな体色だ。ラランテスの鮮やかな体色を保っているって事は、かなり手入れをしている証拠だ。ポケモンが好きなのは本当に変わってないんだな」

ククイ博士は近づくなりラランテスを観察しながら言った。

「本当、綺麗なポケモンですね」

そう言つてリーリエもラランテスに近づこうとする。

「リーリエ、危ない!!。ラランテス、止まって!!」

急に近づこうとするリーリエに反応してラランテスが下ろした鎌を再び上げ、切り裂きにかかろうとしていた寸前で止まる。

「きゃあー!」

リーリエは驚いて後ずさった。

「ごめん、リーリエ。怪我はしてない?。ラランテスは急に動いた者を敵と見なすんだ」
「は、はい。大丈夫です。こちらこそ御免なさい。ラランテスさんにそんな習性があるなんて知らなかったです」

リーリエはラランテスの方にお辞儀をしながら謝る。ラランテスは落ち着いたのか、鎌を下ろした。

「このラランテスは警戒心が強いのか特にね。でも、もう仲間と認識したから大丈夫だ

よ」

「ララ」

ラランテスも謝るようにお辞儀する。

「そうだ、ククイ博士。オーキド博士から頼まれていた荷物です」

僕はバッグの中から段ボールを取り出し、ククイ博士に渡す。

「お、やっぱり頼んで正解だったな。船便だと十日くらい待たなきゃいかんからな」

ククイ博士はそれを受け取ると研究所の中に持ち込む。

「それじゃあお二人さん、今夜はレーヴのお母さんがバーベキューやるそうだからまた後でな」

僕とリーリエはククイ博士の研究所を離れ、家路についている。

「アローラか。こつちでの挨拶なの忘れてた」

「私も、最初は慣れませんでしたけど今では自然に言えるようになりました。レーヴさんでしたら直ぐに言えるようになりますよ」

その時、リーリエが提げているスポーツバッグが突然激しく揺れ始める。

「あ、駄目です。おとなしくして下さい!」

リーリエの言葉も空しく、スポーツバッグのジッパーが外れて中から何かなにかが空に向

かって飛び出したと思うとそのまま飛んでいってしまう。

「待つて、ほしぐもちゃん!!」

リーリエはそう言うなり、ほしぐもと呼ばれた何かを追っていく。

「待つて、リーリエ。野生のポケモンがいるかもしれないから」

ポケモンを持たない状態でもし野生のポケモンに遭遇したら危険に晒される。僕は急いでリーリエの後を追う。

ほしぐもと呼ばれた何かを追うリーリエ、それを追う僕がたどり着いたのは山道だった。

「マハロ山道。この先戦の遺跡。神聖にして犯すべからず」

僕は看板に書かれたことを読み上げる。この先にリーリエは入って行ったのだ。僕も急いで山道を駆け上って行く。

山道を上った先には滝があり、川の上を繋ぐ木製の吊り橋が掛かっている。その手前にリーリエがいた。

「リーリエ、大丈夫?」

「あ、レーヴさん。ほしぐもちゃんが、ほしぐもちゃんが」

リーリエの元に駆け寄ると、リーリエが涙目でこちらに訴えてくる。僕は吊り橋を見ると、ほしぐもと呼ばれた何かは三匹のオニズメに襲われていた。

「あれは、ポケモン……なのか？」

初めて見る存在だった。体色は紫っぽく、手と思われる部分は青い。輪郭はほしぐもと呼ばれるだけあって本当に星雲みたいでゆらゆらと揺れている。

「お願いしますレーヴさん。ほしぐもちゃんを助けて下さい!!。ほしぐもちゃんはとても弱い存在なんです。このままじゃあ」

リーリエは今にも泣きそうな顔でこちらを見てくる。

「分かった。行くよ」

僕は揺れる吊り橋に足を踏み入れる。ポケモンを使ってオニズメを追い払いたかったが、オニズメがほしぐもに近すぎるので、技の巻き添えになりかねない。また、下手に攻撃して吊り橋のケーブルや桁を破壊したら吊り橋が落ちる。それは避けたい。

「ほしぐも、今行く」

オニズメが吊り橋のケーブルに触れたり、強い風を受けて吊り橋が揺れる。そんな不安定な振り橋の上を慎重に歩いてほしぐもの許へと向かう。

「よし、大丈夫だ。もうちよつとの辛抱だぞ」

何とかほしぐもの許へとたどり着いた僕はほしぐもの上から覆いかぶさる形になっ

て守る。オニスズメは自分たちの獲物を横取りされたと思ったのか、今度は僕へと攻撃してくる。

「痛い、痛いよ」

鋭い鉤爪状の足とくちばしで攻撃されて軽く出血する。

「レーヴさん!!」

リーリエが叫ぶのが聞こえる。僕は安心させるため、そしてほしぐもを救うために抱えて立ち上がるうとした時に突然橋が破壊される。

「え?」

ケーブルが切れたのか、もしくは桁が破壊されたのか。何れにせよ、僕は下の川に向かって落下を始める。

「待っ!!」

その時、上空からもの凄い勢いで急降下してくる何か^かがいた。それはまだ吊り橋の周りを旋回していた三匹のオニスズメを吹き飛ばし、川に落ちる寸前だった僕とほしぐもをキャッチして急上昇する。

「コケ〜!!」

その何かはそう鳴き声を挙げ、リーリエの居る近くに僕とほしぐもを下ろす。

「コケ〜コ」

僕とリーリエがその何かを見る。黄色い外殻のような両腕を持ち、胴体と頭は黒く、頭にはトサカらしきものが確認できる。

「何だ、こいつは」

突然現れ、オニズズメを吹き飛ばして僕を助けてくれたが、味方なのか敵なのか判断できない。僕は念のためポケットの中にあるモンスターボールを掴もうとすると

「コケ〜!!」

再び鳴き声を挙げ、その何かは上空に飛び上がるなり、何処かへ去っていく。飛び立つ直前、電気みたいなものを発していつて。事実、その生物が居た土は焼け焦げ、砂がガラス状になっている。

「レーヴさん、ほしぐもちゃんを助けて頂いてありがとうございます」

リーリエはお辞儀をしてお礼を述べる。僕はそのほしぐもを放してあげる。ほしぐもはリーリエの許に移動していく。

「もう、ほしぐもちゃん。レーヴさんに迷惑かけて。．．．さあ、ここに戻って」

リーリエはスポーツバッグを開けてあげる。ほしぐもは素直にそこに入るなり、眠ったのか動かなくなる。

「リーリエ、そのポケモンは？」

「レーヴさん、この子の事はあまり他言しないようお願いします」

リーリエが念を押して言ってくる。その目は詮索しないでと言っているようだった
「わ、分かった」

僕は同意し、立ち上がる。

「それにしても、あれもポケモンなのか？飛び去る直前に電気みたいなのを発していた
が」

立ち上がるなり、ガラス状になった場所に近づく。あのポケモンがいた場所は砂がガラス状になっており、その周囲は焼け焦げている。そのガラス状の砂の上にガラスとは別の石を見つけた。

「これは？」

僕はそれを拾い上げて観察する。その石はキラキラと輝いており、中央が窪んでい
る。まるで何かを填め込むように

「二応、手掛かりになりそうだし持っていこう」

僕はあのポケモンの正体を知る手掛かりになるだろうと思ってバッグの中にそのか
がやくいしを入れる。

「リーリエ、陽も落ちそうだし帰ろう。今夜はククイ夫妻を招いてのバーベキューだ」
気持ちを切り替えてリーリエに言う。

「はい、レーヴさん」

リーリエもそれに同意し、一緒にマハ口山道を下って行った。

第4話　ロトム図鑑

自宅に着いた僕の姿を見た母親は心配した様子だったが、「気にしないで」という僕の言葉を信用したのか、それ以上は何もしなかった。

夜になり、ククイ博士とその奥さんであるバーネット博士が訪れた。

「アローラ、レーヴ。ククイ君から話は聞いてるよ。私はバーネット。アーカラ島にある空間研究所の所長をしているわ」

僕の許に来たバーネット博士は自己紹介をしてくる。僕はお辞儀をした後に

「アローラ、バーネット博士。レーヴです」

自己紹介をした。

「え？この島の守り神にあつたのか？」

バーベキュウの中盤辺りで僕はククイ博士と少し離れた場所に移動して、別れた後の顛末を説明し、石をククイ博士に渡して見せた。勿論、リーリエから言われていたほしぐもの件は話さずにだ。

「守り神？」

「ああ、アローラ地方四島全てにそれぞれ守り神とされるポケモンがいるんだ。このメレメレ島の守り神はカプ・コケコというんだ」

僕はククイ博士の説明を受ける。

「そんな大層なポケモンが僕を助けてくれたんですね」

「滅多に人前には現れないが、気分屋などころもあるらしくいきなり人前に出てはバトルを挑んだり、イタズラをする事があるらしんだが。．．．助けたって話は聞かないな」

ククイ博士は先ほど受け取った石を取り出して僕に見せてくる。

「案外、レーヴは気に入られたかもしれないぜ。この石を直接渡されたんだからな」

「その石は何なんですか？」

そう言うときククイ博士は白衣のポケットから腕輪のような物を取り出す。

「こいつはZリングと言つてな。トレーナーの思いをポケモンに重ねて互いの全力を解き放つことで炸裂する強力な技を引き出すための装置みたいなものだ。アローラ地方ではそれをZワザと呼んでいる。この石はそのZリングを作るための一番重要な物だ」
「そんな物をカプ・コケコは僕に」

「ククイ君、レーヴ君！。そろそろ締めに入るわよ」

そこにバーネット博士の声が聞こえた。どうやら、バーベキューは終盤に入ったらしい。見ると、リーリエは大分バーネット博士と打ち解けたのか、隣で食事をしていた。

「今行くよハニー」

ククイ博士はそう返事をし、僕に「戻ろうか」と言う。

「そうだレーヴ。明日付き合えよ」

「え？ククイ博士、僕はポケモンじゃないんですから、そんな頭突きを何発もできませんよ」

「そうだな。頭突きを何発もしたら頭痛くなるもんな……違う!!ちよつと一緒に行って欲しい所があるんだ」

ポケモンの技を研究していると聞いていて、研究所で自分の体に向かって技を放っていたので心配になったが、どうやら違うらしい。

「何処へですか？」

「僕はポケモンスクールの非常勤講師もしているんだ。明日は授業だから、君にも来てもらいたい。君も、校長には渡す物があるんだろ？」

「はい、オーキド博士からタマゴを預かってますから」

その後、バーベキュウの片づけを終えてククイ夫妻は自宅に戻る。リーリエはバーベキュウ博士と打ち解けたのでそちらにお邪魔することになった。

翌日に僕はククイ博士の自宅を訪れる。扉を開けるとリーリエが出迎えてくれた。

「アローラ、レーヴさん。ククイ博士が下で待っていますよ」

「アローラ、リーリエ。分かったよ」

僕は中に入り、リーリエに案内されて地下へと降りる。地下には色々なトレーニング器具が置かれている。その奥にパソコンの置かれたテーブルがあり、そこにククイ博士がいた。

「来たかレーヴ。こっちに来てくれ」

僕を手招きするククイ博士の元に行くと、机の上に昨日届けた段ボール箱が置かれている。

「今日こいつを起動しようと思ってな」

そう言つてククイ博士は段ボールを開け、中から入っている機械のような物を取り出した。

「こいつはポケモン図鑑なんだが、今度のは凄いで。ちよつと持っていてくれ」

ククイ博士は僕に図鑑を手渡し、パソコンの操作を始める。暫く操作しているとコン

セントがバチバチと青い光と音を発し始める。

「博士、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ。見てろ」

やがてコンセントから一匹のポケモンが現れる。

「ロト？ロト？」

そのポケモンは辺りをキョロキョロと見渡している。

「知っていると思うが、こいつはロトムって言うんだ。色んな家電に入り込んで生活のサポートをしてくれる時もある、イタズラする時もある。まあ、好奇心旺盛なポケモンだな」

ロトムはキョロキョロするのをやめ、ククイ博士のトレーニング器具を眺めたり、ロトムを不思議そうに見ていたリーリエの目の前にいきなり移動して彼女を驚かせたりしている。

「このアローラにもロトムは居るんですね」

「いや、このアローラには野生で生息していない。こいつはシンオウ地方から来たんだよ。電気の流れに乗って移動できるから、シンオウ地方からポケモン転送システムを経由してアローラに来て僕の家に呼んだんだよ」

「説明よりもククイ博士、そろそろ止めなくて大丈夫ですかね？」

ククイ博士が見るといつの間にかロトムが扇風機と融合してスピントムになっており、部屋にあるトレーニング器具などを倒したり観葉植物の葉などを飛ばしたりしている。それをリーリエが必死に止めようとしているのだが、イタズラ好きのロトムがそんなことでは止められる筈がない

「のわー!?!。レーヴ、止めるの手伝ってくれ!!」

三人がかりでようやくロトムを止めることができたが、部屋は台風が去った後みたいになってた。

掃除を終え、リビングで休憩を取っている僕とリーリエの元にククイ博士がお茶を容れて持ってくる。

「手伝ってくれてサンキュー。さっきみたいにロトムは様々な家電に入り込めるんだが、カロスのある少年が他にもロトムが入れる物があるのではないかって考えたらしいんだ。そこでオーキド博士やシルフカンパニーが協力して作られたのがこの凶鑑」

机の上に置いてある凶鑑を示してククイ博士は言う。

「ロトム関連のシステムはその少年が。筐体をシルフカンパニー。凶鑑の機能をオーキド博士が組み込んで作られたんだよ。それで、まだアローラ地方には凶鑑が無かったから、ナリヤ博士経由で僕の所に話が来たって訳さ」

ククイ博士が凶鑑を手にとってロフトに居るロトムの方に向ける。

「さあロトム、ちよつとこれに入ってみてくれないか？」

ロトムが凶鑑に興味を示したのか、ロフトから下に降りてくる。そして、凶鑑の前で一度止まって周りを回ります。

「ロトムさんは凶鑑に興味を示してくれたんですね」

「ああ、もう少しだ」

ロトムが再度凶鑑に近づき、中に入った。すると、凶鑑はブルブルと震えだして手足が生える。

『ピクガガ、起動中……起動中』

凶鑑が喋りだし、電源が入ったのか画面が明るくなる。

『起動完了……。アロウラロト。僕はロトム凶鑑ロト。宜しくロト』

凶鑑改め、ロトム凶鑑は空中に浮かぶなり挨拶をする。

「レーヴ、君がこの島で最初の凶鑑所有者だ。ロトムも、レーヴについて行ってくれ」

ククイ博士は僕の方を向いて言う。ロトム凶鑑もこちらに飛んできて画面が僕の顔を映し出す。

『了解ロト。今使用者登録するロト』

ロトム凶鑑がそう言うなり、カメラと思しき所の横のライトからフラッシュが焚かれ

る。予期せぬフラッシュに驚いて、画面では僕の驚いた顔が映し出される。

『使用者登録中。使用者登録中』

「待てロトム。撮り直してくれ」

僕が懇願するが、ロトム図鑑は無視するように登録作業を続ける。

『使用者レーヴ、顔写真と共に登録完了ロト。これから宜しくロト』

ロトム図鑑が握手を求める様に手を出す。

「・・・撮り直してくれるまで、握手はしない」

僕はそれを・・・きつと拗ねた顔で拒否したのだろう。リーリエはその二人のやり取りを見て笑っていた。

「これから向かうポケモンスクールは、ポケモンについて学ぶところだ。メレメレ島以外からも生徒が来ていて、そんな子たちには生活の為の寮が併設されている」

ククイ博士の車に乗って僕とリーリエとロトム図鑑は博士が非常勤を勤めるポケモンスクールに向かっていた。

「これが、ポケモンさんのタマゴですか」

後ろに乗るリーリエは同じく後ろに置かれたタマゴを見ながら言う。

「そうだよリーリエ。ただ、ポケモンがどうやってタマゴを生むかは未だに謎だけどね」

「ジョウト地方に居るウツギ博士が専門に研究しているんだが、人が見張っている時には何故かタマゴを生まないんだ」

僕とククイ博士が説明する。リーリエは顎に指を当てて考え込む仕草をし、

「きつと、オニドリルさんが運んでくるんですよ」

と答えた。その答えにククイ博士はハンドルに、僕はダツシユボードに頭をぶつけた。ロトム凶鑑は電源が落ちたように床に倒れた。

ポケモンスクールに到着するなり、僕はククイ博士の案内でタマゴを持って校長室に向かう。リーリエは校庭で子供たちやポケモンと触れ合っている。ロトム凶鑑はそのポケモン達の生態を記録するためにリーリエと共にいる。

「ここが校長室だ。ハイパーボイス並みの大きな声で挨拶して入ってくれ」

ククイ博士がそう言うのと先にドアを開けて入っていく。僕もそれに続いてドアから一歩入り

「失礼します、レーヴと申します！。カントー・オオキド博士から荷物を渡すよう言われて来ました!!」

礼をして自己紹介をする。中には先ほど入ったククイ博士ともう一人・・南国ゆえに日焼けしているが、それ以外はどう見てもオオキド博士にしか見えない人がいた。

「おー、待ったゾロア」

そう言つて日焼けしたオーキド博士はゾロアのみたいな目つきでこちらを見てくる。

「オーキド博士、アローラに来るんですしたら僕がタマゴを持つていかなくても良かったと思えますよ」

「いや、違うんだレーヴ。この人は……」

ククイ博士が何かを言おうとしているのを日焼けしたオーキド博士が止める。

「よいよい、ククイ君。学会でもよく、『ユキナリ博士、いつ日焼けなさったんですか?』と間違われる」

「レーヴ、この人はポケモンスクール校長で『リージョンフォーム』の研究者であるナリヤ博士だ。君の言うオーキド博士……ユキナリ博士とは別人だ」

「まあ、ワシもナリヤ・オーキドだから、オーキド博士と言うのは間違いではないんだが、それを言うとおつちの方が知名度があるからもう」

（オーキド博士、従弟と説明は受けたけどこんな似てるなんて聞いてないですよ）

僕は心の中でオーキド博士に抗議する。

「それで、それが荷物のポケモンのタマゴじやな?」

日焼けしたオーキド博士改め、ナリヤ博士が僕の持つているタマゴのケースを見ながら言う

「そうです」

僕はケースをナリヤ博士の前に置く。ナリヤ博士はそれを観察するように見て

「君はこれが何のタマゴか分かるかな？」

つと質問してくる。僕はヒントも何も無いので「分かりません」としか答えようがない。

「生まれてこなければハッキリしないが、これはアローラ地方でリージョンフォームが確認されている個体のタマゴじゃ。勿論、このタマゴはジョウトで発見されておる。どちらでも、アローラのリージョンフォームではない個体じゃ」

「それを、アローラに？」

「ポケモンの姿が何に影響されるかの実験じゃ。今まで、同一地方内、同一個体での孵化しか確認されておらん。今回ののは、このタマゴの個体はアローラではリージョンフォームが確認されておる。なら、所謂原種個体が定着していない地方で孵化したらどうなるか？・・・気にならんかね？」

「・・・すごく、気になります」

「ナリヤ博士、すみませんがそろそろ僕は授業に行きます」

今まで黙って聞いていたククイ博士は時間になったので授業に向かおうとする。

「おう、そうじゃククイ君。レーヴ君も今日の授業に参加させてはどうだろう？君の話

じゃあ、中々のトレーナーと聞いておる」

ナリヤ博士が僕を見ながら言ってくる。

「後で参加させるつもりで連れてきました」

ククイ博士も同意する。僕に「断る」の選択肢はないらしい。

第5話 ポケモンスクールにて

ククイ博士に連れられてグラウンドにあるバトルフィールドに移動する。そこには何人もの生徒が整列して待っていた。

「アローラ皆。今日は僕だけじゃなく、特別にトレーナーの方に来てもらった。これから皆にバトルを教えて貰うためだ」

「よろしくお願いします!!」

ククイ博士の言葉に生徒たちが一斉に挨拶する。僕も、

「アローラ、皆さん。レーヴです。今日は宜しく」

挨拶する。

「早速だが、彼に挑戦する者はいないか?」

ククイ博士が生徒たちを見渡すと

「はい、はい!俺が一番最初にやりたい!!」

元気良く手を挙げる生徒がいた。ククイ博士はその子の方を見て

「ゴロウか。じゃあ、最初の勝負は君だ」

「よっしゃー!!」

「ゴロウと呼ばれた生徒は飛び上がるなり、走ってフィールドの端へ移動する。」

「早く早く!!」

「ゴロウは待ち切れないとばかりに飛び跳ねながら急かしている。クイ博士は僕の方に来て」

「と言う訳だレーヴ。彼が最初に君に挑戦する」

と説明する。

「良いですけど、僕はこれまでの旅で鍛えたポケモン達しかいませんよ」

「今まで旅をしてきた関係で僕のポケモン達は相当鍛えられている。とても、まだ初心者のトレーナーが相手にできるレベルではない。」

「なくに。負ける悔しさを知るのも大切な事だ。遠慮しないで戦って構わないよ」

クイ博士は笑顔で言う。とても・・・残酷だ。

「泣いても知りませんよ」

「時には泣かすのも、教育には必要だよ」

「博士は教師じゃなく、教育者だと思えましたよ」

「こちらにいらしたんですね」

フィールドにリーリエとロトム図鑑がやってくる。

「丁度良いタイミングだ。リーリエ、これからレーヴがポケモンバトルするんだ。見学するかい？」

ククイ博士がリーリエに尋ねると

「はい。私、レーヴさんのポケモンバトルを見るのは初めてです」

『僕がレーヴをサポートするロト。ついでに、データを集めさせてほしいロト』

リーリエが承諾し、ロトム図鑑はサポートを申し出る。

「助かるよ、ロトム。正直、アローラのポケモンはまだ分からないからね」

『えっへんロト。感謝するロト』

「その態度がなければ感謝するよ」

ロトム図鑑は人間でいう腰に手を当てて得意げな顔をしていた。

「遅くなつてごめんな」

僕もフィールドの反対側に移動してゴロウに謝る。

「待ちくたびれたよ」

そう言つてゴロウはモンスターボールを構える。

「行け——、アゴジムシ」

「ジムシ！」

出てきたのはアゴジムシと呼ばれたポケモンだった。

『アゴジムシ、ようちゆうポケモン。大きなアゴを2本持ち、樹木を削って樹液をすする。普段は地面の中に住むポケモンロト』

ロトム凶鑑が解説をしてくれる。初めて見るポケモンだから解説はありがたい。

「行くぞ、クロバット」

「フルウ！」

モンスターボールから出るなり4枚の翼を広げて空中に滞空する。

「クロバット、はがねのつばさ」

僕は先制攻撃を仕掛けに行く。クロバットは低空に降り、地面スレスレを滑空しながら鋼と化した翼をアゴジムシに当てにかかる。

「え？」

しかし、当たる直前にアゴジムシの姿が消える。クロバットもいきなり消えたアゴジムシを探そうと上昇する。

「逃がすな、いとをはく」

ゴロウが指示をすると地面からアゴジムシが顔だけを出して口から糸を吐く。その糸は上空を旋回するクロバットの胴体を捉えた。

「へえ。地面に潜って攻撃を躲したのか。ポケモンの特徴を使った戦い方だな」

僕は感心した。まさか、そこまでポケモンの特徴を生かす戦いをするなんて。

「単純に力で押すだけじゃないって訳ね」

「アゴジムシ、そのまま手繰り寄せろ」

アゴジムシは捉えたクロバットを自身の元へ引つ張り始める。

「クロバット、羽ばたいて引つ張り上げろ」

クロバットはまだ自由な4枚の翼を全力で動かしてアゴジムシに対抗する。流石にクロバットの羽ばたく力の方が上だった。アゴジムシがやがて地面から離れて空中に浮かぶ。

「アゴジムシ、自身で糸を手繰り寄せろ」

アゴジムシは自分の元へクロバットを引き寄せるのを止め、自身が糸を手繰ってクロバットに近づく。

「そのままスパークだ！」

「え？」

スパークの直撃を喰らったクロバットはそのまま地面に叩きつけられた。

「電気技を使えるのか」

僕の言葉に隣にいるロトム図鑑が反応する。

『アゴジムシは進化すると虫・電気タイプの複合になるロト。だから電気技も覚えるこ

とができるロト』

ロトム凶鑑は得意げに説明した。

「ロ〜ト〜ム」

僕はロトム凶鑑を捕まえて振り回す。

「そういうのは先に言え!!」

『何するロト! ひどいロト!』

「レーヴさん、ロトム凶鑑さんと喧嘩していますよ」

リーリエが隣に立つククイ博士に言う。ククイ博士は頭を掻いた。

「レーヴの奴、流石に手を抜きすぎだ」

「え?」

リーリエが疑問の顔でレーヴを見た。

「クロバット、エアカッター」

クロバットが羽ばたいてできた風が鋭い刃物様になってアゴジムシを襲った。堪らずにアゴジムシは再び地中に潜る。そして地中からアゴジムシが飛び出した瞬間

「アゴジムシ、後ろだ!!」

ゴロウの指示も遅く、音も無く忍び寄ったクロバットはアゴジムシを口に啞える。
「そのまま、きゆうけつ。」

クロバットの鋭いキバがアゴジムシの外骨格を貫いて体力を吸い尽くす。

「アゴジムシ、スパーク」

体力勝負となったが、減った分をきゆうけつで補えるクロバットが体力勝ちするのは明白だった。アゴジムシはそのまま倒れ、戦闘不能となった。

「お疲れ、クロバット」

クロバットが此方に羽ばたきながら近づいてくる。僕とクロバットは一旦ククイ博士の所に行く。

「レーヴ、少し手を抜きすぎだぞ」

ククイ博士の所に行くなりククイ博士に頭をワシヤワシヤされながら言われる。流石に博士にはお見通しだった。

「皆、ちよつとペアを組んでバトルの練習をしててくれ」

ククイ博士がそう生徒達に言うのと、他の生徒は仲良しでペアを組んでバトルを始める。

「お疲れ様です、レーヴさん」

リーリエが濡れたタオルを差し出してくれる。僕はそれを受け取って顔などを拭く。

「ありがとう、リーリエ」

「どういたしまして。クロバットさんも回復させますね」

そう言ってリーリエはバッグのサイドポケットから薬を取り出してクロバットに吹き付ける。クロバットは嬉しそうに羽を羽ばたかせた。

「それでレーヴ、アローラでの初めてのポケモンバトルはどうだ？」

ククイ博士が近くまで来て聞く。

「驚いた。つてのが感想ですね。まさか、ここまでとは。場数の差が無かったら分かりませんでした」

「そうか。つと言つても、最近なんだぜ。ここまでのレベルになってきたのは」
ククイ博士が僕を見ながら言う。

「アローラはポケモンと共に生きてきた地方だ。多くの人はポケモンと助け合う事を第一とし、あまりポケモン同士を戦わせるというのは少なかつたんだ。だから、この子たちは正直言つて大部分の大人達より強いかもしれない」

「・・・何だかんだ言つて手を抜いたことは謝ります」

その時、いきなり僕の頭に重い物がのしかかる。

「あ、クロバットさん！いきなりレーヴさんの頭の上に乗ったら」

僕は後ろに倒れる。リーリエの言葉から理解するに、クロバットが頭の上に乗ったのだらう。

「大丈夫ですか、レーヴさん」

仰向けで倒れる僕にリーリエが覗き込んでくる。

「大丈夫。ズバットの頃からよく頭の上に乗ってたんだが、流石にゴルバットでも厳しかったのにクロバットを支えられるわけないよね」

空を眺めながら心配そうに見ているリーリエに応える。

「随分懐いてらっしやるんですね、このクロバットさん」

「自分で捕まえた初めてのポケモンだからね。カントー・オツキミ山でズバットの時に」

そう言っていると今度はククイ博士が視界に入る。

「ところでレーヴ、さつき手を抜いてたのを謝ってたよな？じゃあ、もう手を抜かないんだな？」

「そうしますが、何か？」

僕からそれを聞いたククイ博士の顔はとても……とても悪い笑顔になったように見えた。ククイ博士は生徒たちの方を見ると

「おーい！、レーヴが今から全力でバトルするから、皆で向かって来ていいってよ!!」

その言葉を聞いた瞬間に僕は飛び起きる

「ちよー、ま?!?ククイ博士!?!」

しかし、時すでに遅かった。それを聞いた生徒達はペアのバトルを切り上げて一斉に僕の方へと向かってくる。

「手を抜いた罰だ、レーヴ」

ククイ博士は満面の笑みで必死に応戦するレーヴを見て言う。

「ゼエ・・・ゼエ!」

僕は今、肩で息をしているだろう。

「うん、今度は手を抜かなかったみたいだな。きっちり生徒30人分のポケモンを倒してる!」

ククイ博士が何事もない感じでこちらに来る。

「当たり前ですよ!。あんな一度に襲い掛かってきたら手を抜く余裕なんてないですよ!!」

「最初から全力でやっていれば良かったんだよ」

リーリエが僕の手持ちを含め、ポケモン達を回復させて回っている。ロトム図鑑は乱

戦で個別にデータ収集している余裕がなかったので落ち着いた今、各ポケモンのデータ収集をしているようだった。

「レーヴ、もう一戦やる余裕あるよな?」

「あるわけないです!。今にも倒れそうです!」

「まあそう言うな。そろそろ時間だから来る頃だ」

ククイ博士が時計を見ていると、グラウンドに今まで見なかった少年が入ってくる。

「お、流石時間通りだな。イリマ」

「はい、イリマです。アローラ」

イリマと名乗った少年が入ってくるなり周りの生徒が騒めく。

「レーヴ、紹介するよ。この人はイリマ。ポケモンスクールの卒業生で、君が挑む最後の試練だ」

ククイ博士が紹介する。

「どうも、イリマと申します。ククイ博士から貴方の事は伺ってますよ、レーヴさん」

イリマは僕に挨拶をし、握手を求めてくる。

「初めまして、イリマさん。レーヴと申します」

僕も手を握って握手をしながら自己紹介する。

「ククイ博士から連絡を受けましてね。ポケモンスクールにて君とバトルするように、

と」

「さっき聞いて驚きましたが、一体どうしてですか？」

そう言うのとイリマは驚いた顔になる

「え？何も聞いてないんですか？」

イリマが不思議そうな顔でこちらに投げかけてくるが、ククイ博士が間に入る。

「おっと、その話はまた後だ。とにかくレーヴ、イリマとポケモンバトルをしてくれ」

僕は「あやしい」っていう目でククイ博士を見るがククイ博士は誤魔化す様に口笛を吹いている。

「バトルしたら訳を話してくださいよ」

そう言うって僕はフィールドの端に移動してリーリエが回復してくれた手持ちを用意する。イリマも反対側に立ってモンスターボールを構える。

「イーブイ、宜しくお願いします」

イリマが投げたモンスターボールからイーブイが飛び出す。

「ブイッ！」

イーブイは一回転すると地面に着地して戦闘態勢に入る。僕もポケットからドリムボールを取り出し、中にいるポケモンを出した。

第6話 最初の試練

ドリームボールから出されたポケモンは

「グオオオオオ!!」

クレベースだった。

「クレベース、あられ」

先手で天候をあられにする。氷の粒がフィールドに降り始めた。

「イーブイ、アイアンテール」

イーブイが動いた。イーブイは素早さを生かしてクレベースに近づき、アイアンテールを直撃させる。

「続いてスピードスター」

クレベースに肉薄してアイアンテールを直撃させたイーブイはそのまま距離を放しつつスピードスターを放つ。その技も素早く動けないクレベースは避けられずに命中する。

「クレベースは動きが遅いので、速さを生かせばダメージを与えられます」

イリマの言葉にイーブイは得意げに鳴き声を挙げる。スピードスターを喰らったク

レベースの周りには煙が発生していたが、それが収まつてきた。

「そんな」

イリマは驚きの声を挙げ、イーブイもそれにつられる。

「クレベース、流石にアイアンテールは効いたみたいだな」

クレベースは『何ともない』と言いたげに咆哮する。事実、アイアンテールとスピードスターを喰らってもクレベースは全くピクともしていかない。その場を動いてすらいなかった。

「クレベース、ふぶきだ」

クレベースの口からイーブイに向かってふぶきが放たれる。

「レーヴさんのあのポケモンって」

観戦しているリリーエは隣にいるククイ博士に聞く。

「ああ、あれは『待つロト!』」

ククイ博士が説明しようとしたところにロトム図鑑が割り込む。

『ここから先は僕が紹介するロト』

そう言つてロトム図鑑は液晶を起動させ、クレベースを表示させる。

『クレベース、ひょうざんポケモン。凍りついた体は鋼鉄のように硬く、背中には進化前のカチコールを載せて暮らしている。・・・流石にゲットされたポケモンだから載せてないロト。載せてる姿も記録したいロト』

ロトム凶鑑は最後は残念そうな口調で説明した。

『今度レーヴにゲットした所に連れて行って貰うロト!!』

「ここらロトム、そんなオーバーヒート並みに熱くならなくても」

ヒートアップするロトム凶鑑をククイ博士が窘める。

「イーブイ、アイアンテール」

イーブイが再び接近する。クレベースの近くで飛びつきにかかり、一回転して鋼となった尻尾をクレベースに当てる。

「逃がすな、こおりのキバ」

全く動じないクレベースが接近していたイーブイを氷となったキバで噛んだ。噛まれた後はどんどんキバの冷気を受け、イーブイは右後脚と尻尾が凍ってしまった。

「そのままぶぶき」

クレベースはイーブイを啜えたままぶぶきを放ち、イーブイを吹き飛ばす。

「イーブイ、大丈夫ですか？」

イリマは倒れたイーブイに問うと、イーブイはフラフラになりながらも立ち上がる。しかし、右後脚と尻尾が凍ってしまっている。先ほどのスピードは出せそうになかった。

「クレベース、そろそろ体力は回復したか？」

「グオオ」

クレベースは『当然』といった感じで鳴き声を挙げ、イーブイとの距離を近づけていく。あられのお陰でクレベースはダメージを受けても直ぐに回復できてしまう。

「イーブイ、クレベースの足元にスピードスター」

ゆっくりだがイーブイに近づき始めたクレベースにイーブイは指示通りクレベースの足元を狙ってスピードスターを撃ってくる。

「イーブイ、ふるいたてる」

イーブイはスピードスターをやめ、自らにオーラを纏う。体に熱を持ったのか、脚や尻尾の氷が解け始めている。

「イーブイ、とっておき」

イーブイは再びクレベースに向かって走る。クレベースは前進を止め、迎え撃つような体制になる。

「クレベース、こおりのきば」

イーブイが飛びついてきたのを狙って氷となったキバで噛みつくおうとする。

「イーブイ、そのままクレベースの上に載ってください」

しかし、イーブイは近づいたクレベースの頭を踏み台にしてクレベースの上に載る。

「そこで連続でとつておきです」

イーブイはクレベースの背中の上でとつておきを連発する。クレベースは何とか振り落とそうと体を揺すが、イーブイも必死にしがみ付いて落ちない。

「クレベース、あられだ」

背中にいるイーブイを唯一狙えるあられを使って攻撃する。イーブイの足などにあられが落ち、イーブイは痛みでクレベースの背中から落ちる。

「こおりのきば」

「負けましたね、イーブイ。でも、よく頑張りました」

「ブイイ」

こおりのきばを受けたイーブイはそのまま戦闘不能となる。イーブイは悔しそうに鳴いた。そんなイーブイをイリマは抱き抱えて僕の所にやってくる。

「良い試合でした。遠距離、近距離とそれぞれに技を持っているんですね」

「ありがとうございます、イリマさん。イーブイもありがとうございます」

イリマに抱き抱えられたイーブイは右前足を挙げて『ブイ!』と鳴く。

「イーブイも『どういたしまして』って言ってますよ」

イリマがイーブイの言葉を代弁するように言う。

「二人とも、中々の試合だった」

ククイ博士が僕たちの所に来て言う。

「ポケモンさんたちを回復させますね」

リーリエはバッグからキズぐすりを取り出してイーブイに吹き付ける。吹き付けられたイーブイは体力が回復したのか、イリマの腕の中から地面に飛び降りた。

「さあ、クレベースさんも」

クレベースにも近づいてキズぐすりを吹き付けている。

「アハハ、子供達に人気そうだゴルダック」

いつの間にかナリヤ博士がやって来ていた。ナリヤ博士はゴルダックの顔真似をしながら近くまで来る。タマゴのケースを確りと持って。リーリエが回復してくれたクレベースの周りには校長の言う通り生徒たちが集まって『デッカイなあ』や『カッコイイ』などと言っている。

「皆、水着に着替えてプールで遊んできなさい」

ククイ博士は生徒達に指示をしたので僕も

「クレベース、先にプールに行つててあげて」

クレベースを生徒達と遊ばせようと指示を出した。生徒達は嬉しそうに駆けて行くとうとするが、その最初の子が周りを見ずに振り返って駆けたものだから後ろに居たナリヤ博士にぶつかってしまう。

「ああ!!」

ぶつかつた衝撃でナリヤ博士はタマゴの入つたケースを投げ出してしまふ。近くに居たりリーエが

「ひゃあ!」

つと悲鳴を上げて急いでケースの方へ飛びつく。ケースは間一髪で地面に落ちるのを免れたのだが、異変が起こる。

「え?」

ケースの中のタマゴの上の部分にヒビが入り始める。そのヒビは次第にタマゴ全体に広がつていき、上の方が砕ける。

「コーン!」

中からはロコンが現れた。しかし、そのロコンは僕がよく知る赤い体色のロコンでは

なかつた。

「コン?」

それはまるで雪のような白い体色を持ち、初めから尾が6つに分かれたロコンだった。

「色違い?でもないな。これが・・・」

『リージョンフォーム、ロト』

僕の横にロトム図鑑が来て説明してくれる。

『ロコン、アローラの姿。マイナス五十度の冷気を吐き、暑い時には氷のつぶてを出して周りを冷やす、ロト』

「冷気って事は氷タイプか。普通のロコンとはやっぱり違うんだな」

ロトム図鑑の説明を聞き、僕は理解した。初めて見たリージョンフォームなだけに最初は色違いだと思っただが。

「あ、あのレーヴさん」

か細い声に気付いて声の方を見ると、リーリエがまだ倒れている。しかし、その頬にロコンが頬ずりしている。

「私、懐かれてしまったみたいなのですが」

リーリエの言葉通り、ロコンは嬉しそうにリーリエの頬にすりすり頬ずりさせてい

る。疑う余地もなく懐いているようだ。

「うん、リーリエ。君を親だと思つて懐いているね」

「・・・離して頂けませんか？これでは立てません」

「離してあげたいけど・・・ロトム、頼めるかい？」

僕がチラリとロトム図鑑の方を見る。ロトム図鑑は『分かったロト』と言つてリーリエの方に行き、ロコンを掴む。

『ロト〜！』

ロコンが嫌がったのか、口から冷気を吐く。冷気を浴びたロトム図鑑は一瞬で凍り付いた。

「やっぱり、下手に引き離そうとするとマイナス五十度の冷気を喰らう」

凍っているロトム図鑑から『酷いロト』つて声が聞こえてきた気がするが、凍っているから気のせいだろう。

「リーリエ、折角懐いてくれてるんだからこのボールで捕まえてみないか？」

僕はポケットから使われていないモンスターボールを取り出してリーリエに渡す。

「宜しいんですか？」

リーリエが僕の方を見て聞いてくるので、僕がナリヤ博士の方を見る。ナリヤ博士は笑顔で頷いて見せた。

「大丈夫みたいだよ、リーリエ」

ロコンも察したのか、リーリエの元を離れてボールが投げられるのを待つ。リーリエもロコンが離れたので立ち上がることができた。そして、モンスターボールを構える。

「え、えい！」

リーリエが投げたボールはロコンに向かって

行かなかった。氷漬けになっているロトム凶鑑に当たって転がり、止まった。

「あ、あれ？」

リーリエは呆けた顔になる。

「リーリエ、捕まえるのはロトムじゃなくてロコンだよ」

「分かっております。次はちゃんと」

僕のツツコミにリーリエは頷いてボールを取りに行こうとすると、ロコンがボールの元に移動していた。

「え？」

そして、ロコンは自らスイッチを押してモンスターボールに入る。モンスターボールは何回か赤い点滅をするが、直ぐに消える。

「ゲットしたって事だよ、リーリエ」

「私、ポケモンさんをゲットしたのですね」

ロコンの入ったモンスターボールを抱えてリーリエは喜ぶ。

「初めてです。私、初めてポケモンさんをゲットしました」

「良かったな、リーリエ」

「おめでとうございます、リーリエさん」

ククイ博士とイリマが近づいて祝福する。

「懐いてるようじゃし、これから確りと世話をしていくのじゃぞ」

ナリヤ博士も近づいて祝福する。

「しかし、仮説は正しかったようじゃな。アローラでは原種ロコンが産んだタマゴでも孵化したらアローラのロコンになる。やはり姿が出生地の環境に影響されるという事じゃな。こうしちやおれん、論文を直ぐに書かねば」

そう言つてナリヤ博士は慌てた様子で校舎の方に駆けていく。

「皆、まだ時間はあるから早く着替えてきなさい」

ククイ博士は生徒に再び指示をする。僕もクレベースに『先にプールに行つて』と指示を出す。

「さてレーヴ。君はイリマに勝利した」

ククイ博士が改めて僕に言う。僕はジト目でククイ博士を見ていただろう。

「そんな眼をするなよ、ちゃんと説明するから」

そう言つてククイ博士は一度咳払いをする。

「色んな地方のジムを制覇してきた君に、このアローラで島巡りをして貰いたい。その為にはイリマには来てもらつたんだ」

「突然連絡を貰つた時は驚きましたよ。前からレーヴさんをアローラ地方に呼ぶ話は聞いてましたが」

「どうやら前からククイ博士は計画していたようで、その為には今日イリマもスクールに来たようだった。」

「カロスから帰ってくるのを狙つて母さんをアローラに引っ越させて僕を来るように仕向けたんですね」

「まあ、島巡り以外にもやってほしい事があるのは事実なんだがな」

「でも、まずは試練突破おめでとうございます」

「そう言つて灰色のひし形の石をイリマは僕に渡す。」

「ノーマルのZクリスタルです」

僕は受け取るとその形に見覚えがあつた。

「これは・・・Zリングに填めるやつですか」

僕はポケットから『かがやくいし』を取り出し、窪みに填めてみるとピッタリと一致する。

「それをZリングに加工して頂ければZ技を使えます」

イリマは補足説明をして自身の腕時計を見る。

「それではククイ博士、すみませんが僕はこれで。この後用事がありますので」

「おう、忙しいのにすまなかったな」

「いえいえ。ククイ博士が推す人とバトルできるのは中々ありませんから」

そう言い残してイリマは校庭から去っていく。

「さて、レーヴ。すまんが授業が終わるまでリーリエと待っていてくれ」

「そうですね。その間に……」

氷漬けになっているロトム凶鑑の方を僕は見る。ククイ博士も釣られてそちらを見た。

「ハンマーを借りてきて氷を割っておきます」

「そうだな、そうしてくれ」

僕は用具室からハンマーを借りてきてリーリエと交代で氷を割っていく。授業が終わる直前に氷を割り終えたが、怒ったロトム凶鑑が僕の顔面にキックを入れてきたので

僕はロトム図鑑と喧嘩をする。それをリーリエが何とか止めた頃には僕とロトム図鑑はボロボロになっていた。

第7話 アローラの友達

プールに移動するとクレベースが何人かの生徒達を背中に載せて歩いている。

「おーい、授業は終わったから着替えに教室へ戻れ」

ククイ博士が生徒達に指示すると、ようやく生徒達もプールから上がって教室へと戻り始める。

「クレベースも戻ってこい」

生徒達がプールから上がったのを確認して僕はプールの中を歩いているクレベースに指示をする。クレベースもプールから上がり、僕の元へ来た。

「グオオ」

クレベースは久しぶりに水の中に入ったから嬉しそうに鳴く。その周りをロトム凶鑑が回って写真を撮っていた。

『うーん、子供達を載せるクレベースは撮れたけど、本当はカチコールを載せている所を撮りたいロト』

「ロトム、それはカロスのフロストケイブに行かないと見れないよ」

『アローラにはカチコールはいないロト。残念ロト』

「クレベースさんともそこで?」

「そうだよリーリエ。まだ当時はカチコールだったけどね。探検してたら偶然出会って、後を付けたらそのまま地底湖みたいな所に出ちゃってな。そこでクレベースやカチコール達が暮らしてた」

「このクレベースさんは最初に出会ったカチコールさんなんですな」

「暫くそこで遊んで、帰ろうとしたら付いて来てた」

「グオ」

クレベースが少しずつ僕の所に近づいてくる。

「あの、クレベースさんが段々と近づいて来てるんですが」

リーリエが心配そうに僕に言ってくる。

「ああ、カチコールの時は体当たりすることが多かったけど、今は、ふぎっ!!」

「れ、レーヴさん!!」

クレベースが僕の上ののしかかる。流石に脚で体重を支えているから全ての重さがかかっている訳ではないが。

「今はこうやってのしかかるのが、クレベースの愛情表・げ・ん」

「きゃああ!、レーヴさん!?!、レーヴさん!!」

僕は氣を失ったのだろう。リーリエが叫んでいるのが聞こえたが、それに答えられる

力はなかった。

「ハハハ、レーヴは本当に懐かれていますな」

車の後部座席に座る僕をククイ博士はミラー越しに見てくる。隣にはロトム凶鑑を挟んでリーリエも座っている。

「懐かないのはロトムぐらいじゃないかな？」

僕は隣に居るロトム凶鑑を見ながら言う。

『僕はリーリエにゲットされたロト。だからこれからはリーリエが親ロト』

僕はとりあえず掴んでぶん回しておいた。ロトム凶鑑は目を回して座席にダウンする。

「お、ちょうど良い方が居る」

ククイ博士は前にケンタロスに乗る老人を見つけて車を止める。

「アローラ、ハラさん」

「おお、ククイ君。アローラですぞ」

老人はケンタロスを止めるとそこから降りて運転席側に回る。

「今日は街にでも行つてたのですかな？」

「いえ、今日はスクールで講義でした。ハラさんはどうして？」

「ケンタロスが逃げ出したそうでした。何とか捕まえて今帰っている最中でしてな」
「ブモ〜オ」

ケンタロスが元気に鳴き声をあげる。僕は窓を開けてケンタロスの顔を触ってあげるとケンタロスは嬉しそうに再び鳴き声を挙げる。

「おや、初めて見る方たちですな。アローラ」

ハラと呼ばれている老人が僕やリーリエに気付いて

「アローラ、リーリエと申します」

「アローラ、レーヴです。宜しくお願ひします」

僕とリーリエは自己紹介をする。

「レーヴはカントーから引越して来たばかりなんです。こう見えて、バトルの腕は確かですよ」

「博士、『こう見えて』は余計です」

僕が博士にツッコんでいると

「ハツハツハ、なら明日にリリイタウンでちよつとしたポケモンバトルの大会があります。誰でも参加できますし、良ければ出てみますかな？」

ハラが笑いながら言う。

「良いんですか？」

「勿論ですぞ。トレーナーなら誰でも歓迎です」

「なら、出場します」

僕は出場を承諾する。

「では、明日にリリイタウンで。楽しみにしてますぞ」

「あ、ハラさん。レーヴがカプ・コケコから石を貰ってるんですが」

「何と!？」

ハラは驚いた声を挙げる。僕はバッグから件の石を取り出して手渡す。

「確かに、これはかがやくいし。フム、これを少し預からせて頂いて構いませんか？」

「大丈夫ですよ」

「では、改めて」

そう言つてハラはケンタロスに乗って駆けていく。

「それじゃあ、僕たちも出発しよう」

ククイ博士はそう言つて車を発進させた。

翌日、僕はククイ博士に案内されてリリイタウンを訪れる。と言つても、リーリエの許からほしぐもが飛び出した時に追う過程で通り過ぎた場所だった。あの時はそれどころではないから覚えていないが。

「リーリエは帽子を買ってから後で来るそうだ」

リーリエは先に街でブティックに行ってから来ることになっている。

「レーヴ、あれが今日戦う所である武舞台だ。昔からカップ・コケコに戦いを奉納するための場所だ」

ククイ博士は村の中央に一段高くなった木製の舞台を指差して言う。

「今日はポケモンバトルで戦いを奉納するんですね」

「その通りですぞ、レーヴ君」

僕がそう言うと、同意するようにハラがやって来る。

「戦の神でもあるカップ・コケコには戦いを奉納するのが一番ですからな。行事をしないときは私がアローラ相撲を奉納するのですぞ」

そう言うとはハラは一枚の紙を渡してくる。

「今日の対戦表ですぞ。三回勝てば優勝なので、頑張るのですぞ」

そう言うとはハラは別の場所に行ってしまう。僕は対戦表で一回戦の相手をチェックする。

「えっと・・・スカル団のしたっぱ・・・これ、登録名として良いの？」

名前としてはどうかと思うが、とりあえず一回戦の相手が分かった。でも、ククイ博士がその名前を聞いて少し苦い顔になったのが気になるが。

「さて、僕達は一番最初の試合だから準備しないとね。頼みますよ、ロトム」
バッグからロトム凶鑑を取り出す。

『僕はリーリエにゲットされたけど、仕方なく従ってやるロト』

「・・・そんな事言ってるよまたぶん回すよ」

「なあなあ、それってポケモン凶鑑?!」

と、僕とロトム凶鑑がやり取りしているとききなり同じ年位の少年に話しかけられる。その少年はロトム凶鑑を観察するように周りを回った後に僕を見てくる。

「じいちゃんとも親しそうに話していたし、やっぱり凶鑑を貰う人は凄いんだな」

黒いTシャツに花柄のある黄色いズボン、オレンジ色のサンダルを履いた少年は笑顔を浮かべたまま

「俺、ハウっていうんだ。じいちゃんはさつき君が話してた島キングのハラなんだ」

ハウと名乗った少年は言う。

「祖父が島キングなんて凄いな。僕はレーヴ、宜しく」

僕は手を差し出すと、ハウはそれを握り返してくれる。

「まあ、色々あるけどねえ。俺、父ちゃんや母ちゃんと一緒にジヨウトで暫く暮らしてたんだあ。でも、今回島巡りに挑戦するために帰って来たんだ」

「僕はカントーで暮らしてて、つい先日アローラに引っ越したばかりですよ。それに、

僕も島巡りをする事になりました」

「一緒じゃん。俺もこの前帰ってきたばかりだし、こっちに友達いないから友達になるよよ」

ハウは笑顔を崩さずに言う。僕は少し思案するが

「良いよ」

承諾する。

「レーヴもこの大会に出るのか」

早速親しくなったハウとベンチで腰かけて話す。ハウの言葉からハウもこの奉納試合に出るようだった。

「あ、ここにレーヴの名前ある。俺と戦うのは二回戦か」

対戦表を見るとハウとは隣のブロックで僕とハウが一回戦を勝てば二回戦で当たることになる。

「でも俺の相手はグズマさんだしなあ」

「知ってる人？」

「うん、昔ちよつとね」

その時、スピーカーからアナウンスが流れ始める。

『一回戦の対戦選手、テント前に集合してください』

それを聞き、僕は立ち上がってテント前へと向かった。

ハウオリシティ。メレメレ島だけでなくこのアローラ地方最大の街。そのショッピングセンターの一角にあるブティックにリーリエは居た。

「トリコーン、レーヴさんには似合いそうですが、私には似合いそうにありませんね」
三角帽子トリコーンを置いたリーリエは隣にある帽子を手に取り、頭に被る。

「キャプリーヌ、でもやつぱり私には」

その帽子も置き、ピクチャーハットを手に取った。

「お兄さまに付けて頂いたリボンはありませんが、私には」

ギユツと帽子のつばを折り曲げて目には涙を浮かべる

「お母さま・・・お兄さま・・・」

か細い声でそう言いながら帽子を取り、会計の方に向かった。

アローラ地方南西に位置する島、ポニ島。ここの道路を一台の白いセダンが走行している。

「代表、実験の結果ホールを短時間ですが人工的に開くことに成功したようです。しかし安定させる事ができず消滅しました」

白衣を着てソラマメの様な緑のサングラスをかけた男性が代表と呼ぶ人物に話しかける。

「そう。やはり安定させるにはあの子が必要なのね」

代表と呼ばれたワンピースを着た女性が答える。女性は足を組みながら男性の話を聞いている

「はい。しかし、代表のお坊ちやまもお嬢様も面倒な事をしてくれました。あれで研究が・・・」

「支部長」

支部長と呼ばれた男性は突然言われた肩書にビクツとなる。女性は足を組み替えて

「おかしな事を言うのね。私に息子も娘も居ないわ」

女性は凄みをきかせて男性を見る。

「はい、申し訳ありません。代表」

男性はたじたじになりながら謝罪する。

「もうじき車では入れない場所になります。ヘリモードに切り替えて目的地に向かいます」

前の運転席から白いつなぎを着た男性が二人に声をかける。車は止まり、スイッチにてへりに変形する。へりに変形したのちローターを回転させて飛び立った。

「それより確かなの支部長？、祭壇に新たなホールが兆候があるというのは」

「観測数値上、間違いありません。これまで開いたホールと同等の数値を示しています」

男性がファイルを開いて説明する。それを聞いた女性はどこか虚ろな、まるで精気の感じられない目になる。

「ああ、早く会いたいわ。私の愛を注げる存在、最も美しい存在、ウルトラビースト」

言葉の後半に行くに従って精気は宿り、寧ろ輝いて見えた。へりはローラー音を轟かせながら祭壇と呼ばれた場所を目指して飛行していった。

第8話 マラサダは程々に

テント前に着いた僕は先に来ていた一回戦の相手『スカル団のしたっぱ』を見る。

「ちっ、遅^{おそ}ーぞ」

長ズボンにタンクトップを着て、マスクやドクロをあしらった帽子を被っており、両手をポケットに入れている。

「揃いましたな」

テントから行司姿のハラが出てくる。その手には木製の箱を持っている。

「この中に使用するポケモンの数を記載した紙が入っております。どちらが引かれますかな？」

ハラは木箱を前に差し出し、二人を見た。

「俺が引く」

スカル団のしたっぱが前に歩み出て言う。ハラは僕の方を見て

「宜しいですか？ レーヴ君」

問いかけた。僕は頷いて。

「構いません」

と答える。したつぱが木箱に手を入れ、取り出された紙を広げてハラに見せた。

「使用ポケモンは一体!!。両者、武舞台へ!!」

ハラという言葉に僕は武舞台上がる。反対側にはしたつぱが着く。

ハラが武舞台の審判位置に着く。手には軍配団扇を持っており、それを前に構える。

「では、両者見合うて」

僕は上着からスーパーボールを取り出す。したつぱもモンスターボールを取り出した。

「残った!!」

それを合図に僕はボールを投げる。したつぱも同時に投げた。

「頼むぞ、ラランテス」

「ララ」

ラランテスはボールから出るなり、鎌を広げて相手を威嚇するポーズをとる。

「やっちまえ、ヤトウモリ」

「ヤトウ」

初めて見るポケモンだった。僕はチラッとロトム図鑑の方を見る。ロトム図鑑は『仕方ない口ト』と言った感じで近づいて来て

『ヤトウモリ、どくとカゲポケモン。体液を燃やして毒ガスを発生させる。毒ガスには何パターンもあり、中には甘い香りを放つ毒ガスもある』

「てことは、どく・ほのおタイプ。初めての組み合わせだな」

ロトム図鑑の説明を聞き、タイプを推測する。ほのおがあるからラランテスには不利だった。

「ラランテス、はなふぶき」

ラランテスから花卉が舞い、それが高速で相手に向かっていく。ヤトウモリは避けようとしたが広く面に広がって行くはなふぶきを避けることができなかった。

「よくもやったな。ヤトウモリ、ひのこ」

ヤトウモリが口からひのこを放ち、ラランテスに命中させる。

「ラランテス、にほんばれ」

ラランテスが鎌の間で火球を作ると、それを上空に上げて弾けさせる。

「へっ、ほのおタイプの技の威力を上げてくれてサンキユー」

したつばが挑発するように言う。事実それが弊害だが、ラランテスの本領が発揮されるのはにほんばれ下の戦い

「一気に決めるぞ、ラランテス。ソーラーブレード」

ラランテスが上に向かって鎌を構えた。

「チャンスだ、ヤトウモリ。はじけるほのお」

ヤトウモリが尻尾を薙ぎ払うように動かしたと思うと、そこから火球が放たれてラランテスの方に向かってくる。

「ソーラーブレードは溜がある。先にこっちの技が当たるぞ」

したつばが勝利を確信したように言う。

「ソーラーブレードに溜があるのは事実。だけど勉強不足だね」

ラランテスは上に向けていた鎌を腰に移し、そこから居合切りのように鎌を動かして飛んできた火球を両断する。

「なに!？」

したつばとヤトウモリが共に驚いた顔になる。ラランテスはそこに容赦なく突っ込み、ヤトウモリを攻撃する。

「クソ！」

ヤトウモリはその場に倒れ、目を回す。

「ヤトウモリ、戦闘不能。第一試合、レーヴ君の勝利」

ハラが軍配をこちらに向けて宣言する。

「ククク、にほんばれでの溜無しソーラーブレード。悪くない」

その時、武舞台に一人の男性が上がってくる。整えられていないボサボサの白髪にクマのある目、背中にドクロマークが描かれたパーカー付きの上下黒ジャージを着て、片方のレンズが半月型に変形したサングラスをかけている。

「グ、グズマさん」

したっぱが驚いたように背後に立ったグズマと呼ばれた男性を見る。その顔は明らかに怯えている。

「それに引き換え、お前は何をしている？。ヤトウモリが最後の抵抗でお前の指示無しでひっかくをしようとしていたのになあ」

グズマはしたっぱを見下すような目で見る。

「こんなガキに負けた事にも怒れるが、もっと怒れるのは先に戦意を失ったお前だ」
突然グズマの背後に現れたポケモンの鉤爪にしたっぱが持ち上げられる。

「グ、グズマさん……。勘弁して……。下さい」

したっぱが苦しうに藻掻くが、そのポケモンは全く動じない。

「グズマ、ここでは他の人への迷惑行為は厳禁ですぞ」

ハラが止めに入ろうとするが

「こいつは俺の身内だ。指図は受けないぜ」

一蹴する。ハラが自分のポケモンを出そうとするので

「ラランテス、ソーラーブレード」

先に僕がラランテスに指示する。ラランテスは直ぐにエネルギーを溜め、したつぱを持ち上げているポケモン目掛けて攻撃にかかる

「・・・シエルブレード」

そのポケモンはもう片方の鉤爪でラランテスのソードブレードを受ける。

「おいおい、お前とのバトルは後だけ。だが、今ここで破壊するのも悪くない」

「そこまでだ、グズマ」

ククイ博士も見ることがないポケモンを出してけん制している。ページユ色の体毛を生やし、首元にたてがみがある四足歩行のポケモン。

「ちっ、ククイまで来るのか・・・。もういい、グソクムシヤ」

グズマはグソクムシヤと呼んだポケモンを引っ込める。したつぱは思いっきり尻もちをついたように『ドスン』と音がして武舞台に落ちる。

「行くぞ」

したつぱに指示し、グズマは武舞台を降りていく。したつぱもそれに付き従うように降りて行った。

「何はともあれ、一回戦突破おめでとうレーヴ」

ククイは買ってきたマラサダと呼ばれるアローラの名物であるお菓子を渡される。

「マラサダ♡。やっぱアローラ帰ってきたらこれだよな」

僕とククイ博士の分を取り出すと、残りはハウがとても喜んで食べている。その笑顔を見るだけでこっちも幸せになる位の満面の笑顔。

「ところで博士、そのポケモンは？」

側に居る先ほどのポケモンを僕は見ながら聞く。

「ああ、こいつはルガルガンだ。僕のイワンコの進化形さ。こいつは『まひるのすがた』と言う姿でな。今まで『まひる』と『まよなか』の二種類しか居ないと思われてたんだが、最近もう二種類の進化が確認されてな」

「四系統の進化……。なかなか」

僕は感心する。そんなにも多岐にわたる進化を持っているポケモンはほぼいない。

「と言っても、その二種類のうちの一種類は一人のトレーナーの一匹しかまだ確認されていない進化条件が謎のポケモンなんだ」

「見てみたいですよ。その一匹しかないルガルガン」

「まあ、そのうち会えるだろ」

ククイ博士はそう言ってマラサダを食べるのを再開する。僕も同じくマラサダを食べ始める。隣ではハウが変わらずにマラサダを頬張っていた。

『二回戦の対戦選手はテント前に集合してください』

マラサダを食べているとスピーカーから呼び出しがかかる。ハウが出場するから食べきれない分を貰おうとハウの方を見ながら

「ハウ、マラサダの袋を」

「え？捨てといってくれるの？サンキュー」

まだ中身の入った袋を貰おうとしたら、空の袋を渡される。裏返しても砂糖が落ちるだけで中身は無い。おかしい、渡したとき6個は入っていた筈。

「それじゃあ行ってくるねえ」

ハウは無邪気な笑顔で手を振りながらテントの方へ駆けていく。僕はククイ博士と目を合わせた後にもう一度マラサダが入っていた袋を見る。

「ククイ博士、今度ハウにマラサダあげるときは小分けにしましょう」

「そうだなレーヴ」

二人は誓い合った。

第9話 奉納試合決着

試合が始まり、ハウとグズマはそれぞれのポケモンを出す。

「ハウはピカチュウかあ」

ハウがピカチュウを出したが、グズマのポケモンが見当たらず、僕はグズマのポケモンを探す。

「グズマ選手、ポケモンを早く出しなさい」

審判であるハラがグズマの方を見て言う。

「ククク、見つけられねえわなあ。でも、俺のポケモンは既にピカチュウに取り付いているぜ」

「何ですと?」

グズマの言葉にピカチュウが段々フラフラしてきて、仕舞には倒れてしまう。

「ピカチュウ!」

ハウが驚きの声を挙げてピカチュウを見る。すると、小さい影がピカチュウの傍からグズマの方にゆっくり移動していく。

「あれは?…バチユルか」

現在確認されているポケモンの中で最小のポケモンであるバチユル。それがピカチュウに取り付いて電気を吸い取ったのだ。

「やっぱ、虫ポケモンに関してにはグズマさんには敵わないや」

ハウは手を頭の後ろで組んで感心したような声を出す。

「でも、でんき技じゃあ無ければ良いよね。でんこうせっか!」

腕を組むのを止めると、直ぐにピカチュウに指示を出す。ピカチュウはまだ多少フラついているが、それでも加速し続けてバチユルに『でんこうせっか』を当てる。

「いとをはく」

飛びざまにバチユルはピカチュウに向かって糸を吐き、顔の部分を巻かれてしまう。

「ピカチュウ!」

視界を完全に奪われたピカチュウはどうすることもできない。

「れんぞくぎり」

グズマの指示でバチユルはピカチュウに接近し、連続で切り付ける。何度も切り付けられたピカチュウは遂に力尽きて倒れてしまう。

「どうした? 島キングの孫。そんな実力じゃあ、島キングに何てなれないぜ。お前の父親の様に島巡りから脱落してアローラから逃げ出したのと同じだ。最も、俺様はそんな伝統をぶっ壊してやりたいがな」

グズマはハウや審判をしているハラに対して言い放つ。ハウは黙ってピカチュウをボールに戻した。

「確かに、俺は弱いのかもしれぬ。でも、俺は強くなるって決めたんだグズマさん。爺ちゃんにも勝って、父ちゃんが果たせなかつた島巡りを突破してやる」

ハウは次のモンスターボールを取り出し、中のポケモンを出す。

(ハウ……)

審判をしているハラは自分の孫であるハウを見ていた。そして、昔を回想していた。

「全く。弟子の多くは島巡りを達成したというのに」

ハラは目の前で落ち込んで座っている息子・ハオに向かって言う。

「自分の息子に示すために遅まきながら島巡りをしたいと言うから行かせたが、途中で試練を突破できずに脱落するとは」

ハオは俯いたまま顔を上げることができないでいる。

「島キングの息子として恥ずかしい。もうお前は儂の子供ではない」

その言葉にハオは顔を上げる。

「父さん、それは」

「もう儂はお前の父親ではない。出て行きなさい」

ハラは静かに告げ、扉の方を指差す。ハオはそれを見て号泣しながら走って出て行く。

「チコリータ、はっぱカッター」

ハウが出した二体目のポケモン、チコリータのはっぱカッターがバチュルを襲う。

「戻れ、バチュル」

グズマが戦闘不能直前だったバチュルを戻す。続いて二体目のボールを手を取った。

「ぶっ壊せ、アイアント」

グズマが出した二体目はアイアントだった。

「アイアント、こうそくいどう」

アイアントが猛スピードでチコリータの懐に入る

「シザークロス」

アイアントのシザークロスが決まり、チコリータはとばされる。

「チコリータ、つるのムチ」

空中でチコリータはつるのムチを放ち、アイアントに叩きつける。

「落ちて来た所をぶっ壊せ。ハサミギロチン」

アイアントが落ちてくるチコリータに狙いを定め、ハサミギロチンを喰らわせた。チコリータは戦闘不能を示す様に倒れる。

「チコリータ、戦闘不能。第二試合、グズマ選手の勝利」

ハラが軍配をグズマの方に向けて宣言する。

「残念、やっぱりグズマさんには勝てなかったよ」

武舞台から降りて来たハウは僕の所に来て言う。

「お疲れ、ハウ」

僕は屋台で買っておいした飲み物をハウに渡す。

「アヴァかあ。懐かしいなあ」

ハウはその飲み物を知っているようで一気に飲む。僕も真似をして一気に飲むだ・・・うん、独特の苦みの後に舌が痺れるような感覚だった。

「ハウ、よくこれ一気に飲めるね」

戻しそうになりながら僕はハウに言う。

「まだエネココアで混ぜた方が飲みやすいよ。貸して」

ハウはグラスを受け取ると僕が買った同じ店に行きアヴァから抽出した汁を買って

来た。そのグラスにハウは鞆から水筒を出して中身を注ぐ

「アヴァを水などで揉みだして作った汁にエネココアを容れると苦みが和らぐよ」

そう言つて差し出されたアヴァを僕は飲む。・・・うん、先ほどより確かに苦みがない。変わらず舌が痺れるような感覚はあるけど。

「舌の痺れる感覚はどうにかならない？」

「そう？俺は痺れないけど」

そう言つてハウはもう一度アヴァを飲んだ。どうやら、痺れるのは個人差があるようだ。

第三試合はスカル団のオヒア、第四試合をグラジオという人物がそれぞれ勝つて二回戦に進出してきた。僕の次の相手はハウに勝利したグズマである。

「先ほどの因縁があるでしょうが、両者試合は正々堂々ですぞ」

ハラがそう言つて木箱を差し出す。僕がグズマの方を見ると『お前が引け』と言いたげな目で見てくる。

「では、僕が」

そう言つて木箱の中に手を入れ、掴んだ紙を取り出す。紙には『1』と記されていた。

「では、使用ポケモンは一体。両者、武舞台へ」

ハラがそう指示し、お互いが武舞台へ上がった。

「ハラはああ言っていたが、俺はお前をぶっ潰すのが楽しみだった」

グズマと武舞台で対面するなり、グズマはそう言ってくる。

「潰される気はありませんが、僕は貴方との戦いは楽しみでもあった」

「ほう」

グズマは睨むように僕を見てくるが、僕は構わず続ける。

「貴方は不良みたいな事をしているが、ポケモンには確かな愛情を注いでいる。僕の第一試合の時もヤトウモリの最後の反撃にトレーナーよりも気付いていたし、負けたポケモンを責めはしなかった」

グズマが不意を喰らったような顔になった。

「ちっ、調子の狂う奴だ」

そう言ってモンスターボールを取り出す。

「さて、ぶっ壊してもぶっ壊しても手を緩めなくて嫌われるグズマ様が相手だ」

そう言ってボールを投げる。中からはグソクムシヤが現れる。僕もスーパーボールを投げた。

「ララ」

ラランテスが鎌を威嚇する様に構える。

「・・・一戦目と同じかよ」

「エースはまだ出したくないのでね」

グズマの言葉に僕が答える。

「ラランテス、にほんばれ」

「であいがしら」

ラランテスが火球を作ろうとした時に近づいたグソクムシヤが巨大なツメでラランテスの腹部を突き刺した。ラランテスはよろける様に後ずさる。

「大丈夫か、ラランテス？」

ラランテスは咳き込むような動作をするが、直ぐに体制を立て直して火球を放つ。辺り一面を日差しがより強く差し込む。

「またソーラーブレードか」

一回戦と同じ状況を作り出したことに当然ながらグズマは察する。

「分かっつて防げるかな？ソーラーブレード」

ラランテスが光を吸収し、鎌を腰の部分で構える。そして、一気に相手との間合いを詰めて切りにかかった。

「シエルブレード」

グソクムシヤはその巨大なツメを使ってソーラーブレードを受け止める。だが、ラランテスは光の刃を伸ばしてグソクムシヤに到達させた。グソクムシヤはダメージを受けたので抑えている力が弱まる。

「どくづき」

しかし、グソクムシヤについていた内側の四本の小さなツメがラランテスに突き刺さり、ラランテスにもダメージが入る。

「あのツメ、攻撃に使えるのか」

僕は驚いていると隣にロトム凶鑑がやって来る。

『グソクムシヤは六本の腕で戦うロト。あの巨大なツメに目が行きがちだけど、小さな四本の腕も攻撃に使えるロト』

「ロトトトム」

『おおっと、いつも同じ手は喰わないロト』

そう言ってロトム凶鑑は僕が手を届かないところまで上昇する。

『グソクムシヤは見た目に反して臆病ロト。そこを狙うロト』

最後にアドバイスらしきものをくれる。

「臆病……なるほど」

僕はロトム凶鑑が言った事を理解し、実行に移す。

「ラランテス、こうこうせい」

先ずは失った体力を回復させることにする。そして、

「はなふぶき」

はなふぶきをグソクムシャに向かって放つ。暫く受けているとグソクムシャは自らボールに戻ったのだ。

「グソクムシャ、戦意喪失。二回戦第一試合、レーヴ君の勝利」

ハラが軍配団扇をこちらに向けて宣言する。

「グズマア!!なにやってるんだ」

そう叫んだグズマは仰け反ったかと思うとおもいつきり武舞台に頭を打ち付けた。

「グズマさん、止めてください」

スカル団のしたっぱが慌てて武舞台に上がってグズマを止める。

「ボス、大丈夫ですか?」

スカル団の二人、オヒアとレファも上がってきた。グズマは額から血を流している。

「オヒア、お前はまだ試合があるんだろ。残れ」

オヒアと言われたスカル団の人間は「分かりました」と言い会場に残る。グズマはしたっぱとレファを伴って帰ろうとする。

「待つのですぞ、グズマ。まだ大会は終わっていませんぞ。最後まで応援していきなさい」

ハラがグズマを引き留めようとするが、グズマは

「俺に命令できるのは、あの人だけだ。このアローラの事を憂うあの人だけだ。それに、アンタには昔こういった筈だぜ。俺はアンタの失敗作じゃない、っと」

そう言つてグズマは立ち止まらずにリリイタウンを去つていく。

「凄いでレーヴ。あのグズマのグソクムシヤを引つ込ますなんて」

試合を見ていたククイが武舞台を降りた僕の所に来る。

「ありがとうございます、ククイ博士。それよりもロトムは？」

僕が辺りを探すと

『僕はここロト』

上からロトム凶鑑が現れる。

『僕のお陰で勝てたロト。泣いて感謝するロト』

「ちよつと待つてて」

僕は屋台に走つて飲み物を買に行き、帰りに睡で涙を演出して

「あ、りが、と、う。こ、れ、は、お、れ、い、で、す」

っとロトム凶鑑に飲み物を渡す。

『感謝を受け入れるロト』

そう言つてロトム凶鑑は僕が差し出した飲み物を飲み、『ボンッ!』という爆発したような音と共にロトム凶鑑が暫く動かなくなつた。

「ふむふむ、ポケモンもアヴァには弱いと」

残つていたオヒアであるが、対戦相手のグラジオに負けてグズマ達同様リリイタウンを去つて行つた。

「遅いですなあ」

決勝前にテント前に来ていた僕だが、相手のグラジオが現れない。

「もう時間も過ぎてますし、己むを得ませんな」

そう言つてハラは武舞台に上がった。

「決勝戦で対戦予定だったグラジオ君が指定時刻になつても現れませんでした。よつて、本日の奉納試合はレーヴ君の優勝とします」

その瞬間、会場は歓声に包まれる。ハウも僕の所にやつて来て『おめでとう』とハイタッチする。ロトム凶鑑も『おめでとうロト』と言いなながらこちらに向かつてくるので、

僕も手を出して待ち構える

「ん？ロトム、何でそんな勢いよく来るの？」

ロトム凶鑑は猛スピードで僕の顔面に突っ込んだ。凶鑑の上の部分にあるアンテナであろう尖がった部分がそれはもう思いつきり突っ込んできた。

ハウは笑っていたが、この時の喧嘩は多分出会ってから今までの中で一番激しかったと思う。

「やはり、人工的に開いているから不安定になっている」

テンカラットヒルと呼ばれる小高い丘の所に人間がいた。黒い長袖のシャツに黒い長ズボン着ている少年、服の所々にフラスナーを付けて補修されている。

「実験が思ったより進んでいるようだ」

少年が金髪を掻き上げるようなポーズをしたのち、手で顔を隠すような仕草をする。

「ヌル、お前の出番が早まっているかもしれない」

ヌルと呼ばれた生物はその少年の横に来る。鳥類を思わせるような鋭い鉤爪状の脚、鱗のような模様がある後ろ足の四足歩行、魚のような尻尾や鳥のようなトサカを持つっているが、異様なのはその頭部。完全に頭部を覆っている仮面を持つ生物だった。

「それまでもっと強くならないと」

少年はヌルと呼ばれた生物の背に跨り、移動を開始した。

「代表、先ほどメレメレ島のテンカラットヒルにてウルトラホールの反応が短時間ですがありました」

海上を飛んでいるヘリの機内で男性は代表と呼ばれた女性に話しかける。

「そう」

女性は興味なさげに報告を聞き流す。

「支部長、この確保したポケモンを使って安定したウルトラホールを形成できないの？」

代表は黒い鎖で繋がった檻を支部長に見せる。

「は、現在装置の調整中です。近いうちにそのポケモン。コスモッグを使って安定したホールを形成できるよう努力します」

支部長はそう代表に伝える。

「……期待しているわ。本部に急いで」

支部長に言葉とは裏腹に全く期待している様に聞こえない声で言い、操縦手には本部に戻るよう指示を出した。

第10話 ゼンリョクゼンカイ・鬼のハラ

まだ優勝の興奮冷めやらぬ会場で僕は島キング・ハラの元を訪れた。

「何ですか？レーヴ君」

ハラは僕を見つけるなり聞いてくる。最も、目は言われるか分かっている様だった。

「僕に大試練を行って頂けませんか？」

案の定、といった顔でハラは僕を見てくる。

「そうですねあ。ククイ君の話しではイリマ君を倒しているらしいので……」

ハラは腕を組んで考え込むような仕草をする。

「宜しいですぞ。儂も、優勝者の君と戦えるのは楽しいですしな」

ハラは立ち上がり、マイクを手取る。

『只今、奉納試合の優勝者であるレーヴ君より儂に、大試練、の要請がありました』

再び会場は沸き上がる。

『よってこれより、レーヴ君の大試練を行います。皆さま、再び武舞台の周りにお集まりください』

ハラはそう言っってマイクを置き、僕の方を見る。

「やるからには、全力ですぞ」

「勿論です」

僕も応えた。

武舞台周りには既に人が集まっており、武舞台へ上がる階段に向かう僕を皆歓声で迎える。

「レーヴさん」

僕の後ろをリーリエが駆けてくる。

「レーヴさん、ククイ博士から聞きました。優勝おめでとうございます」

「ありがとう、リーリエ。これから、島キングに挑んでくるよ」

リーリエは帽子を被っている。ピクチャーハット。リーリエに非常に似合う白のピクチャーハット

「その帽子、似合っているよ」

「はい、あの・・・レーヴさんにも後で帽子を渡しますね」

「ありがとう。それじゃあ、また後で」

リーリエに見送られて僕は武舞台の階段を上がる。既に武舞台にはハラが待ち構えている。

「ここで戦う以上、この戦いもカブ・コケコに捧げる試合」

ハラは黄色い上着を脱ぎ四股を踏む。そして、片膝について弟子と思しき人から柄杓を貰い一口水を含んだ。次いで渡された力紙で口元を隠しながら弟子が用意した鹽タライに吐く。力紙で口周りや顔を拭き、それを鹽に捨てる。

「気にしなくてよいですぞ。これは農のアローラ相撲としての作法ですので、レーヴ君はそのまま」

ハラはこちらに気を使って言ってくる。僕は完全に所作に見惚れていたが。

「では、位置に」

ハラはそう言い、自らの立ち位置に入る。僕も対面の立ち位置に移動して、お互いが最初のポケモンの入ったボールを掴んだ。

「では、ゼンリョクゼンカイ。鬼のハラで参りますぞ」

それを合図に審判位置に居る弟子が

「それでは使用ポケモン三体。ポケモンの交代は自由。では、両者見合うて」

お互いボールを投げる構えをする。

「残った!!」

それを合図に僕はネットボールを投げる。

「ラージ!!」

ラグラージが腕を広げて相手を威嚇するような動作をする。

「ほう、ラグラージですか。珍しいポケモンですな」

「ホウエンで捕まえたポケモンです」

相手はピンクと黒の胴体に黒い手足の顔が可愛らしいポケモンであった。オマケにこちらに両手を振っている。

「ハラさん、何だかこちらのポケモンは手を振ってますが」

ラグラージも返す様に手を振り始める。

「キーン!!」

だが突然そのポケモンは奇声を上げるとラグラージに一気に間合いを詰めた。

「その行動はキテルグマの威嚇の動作ですぞ。アームハンマー!」

上に挙げた手を勢いよく振り下ろしてラグラージに一撃を加える。ラグラージはよろけて後ずさる。

「大丈夫か? ラグラージ」

ラグラージを頭を振って正気に戻る。

「接近するのは危険か。ハイドロポンプ!」

ラグラージが口から勢いよく水流を放つ。キテルグマは腕をクロスしてガードの体

勢で受ける。

「キテルグマ、接近して組み付きなさい」

キテルグマが再び奇声を上げて近づいてくる。

「もう一度ハイドロポンプ」

ラグラージは近づくキテルグマを止めるために再びハイドロポンプを放つが、先程同様に手でガードしながら突進してくる。そして、お互いが組み付く。

「ほう、キテルグマの力は一トンにもなる達するのだが、それを互角とは」

ラグラージがキテルグマと組み合いに耐えていることにハラは驚く。

「こいつも、大型船を曳く力を持つているので」

僕の言葉にハラは感心する様に顎に手をやる。

「なるほど、単純なパワー勝負では決着が着きそうにありませんな。では、単純じゃない力でいきましょう」

キテルグマが組み付きを解き、体勢を低くしてラグラージの右手と胸の部分を持つ。

「ばかぢから」

そのまま一本背負いの要領で投げられ、ラグラージは武舞台に背中を叩きつけられ、武舞台全体に煙が立ち込めた

「決まりましたかな?」

ハラが勝利を確信する様に言い、煙が晴れるのを待つ。晴れてきた武舞台では「な、なんですと!?!」

キテルグマが氷漬けになっていた。ラグラーズが起き上がると、両手から冷気が出ているのか白い煙が見える。

「組み付いた時にれいとうパンチを出していたんですな。やられましたぞ、レーヴ君」
「バレないか心配しました」

僕はそう返す。審判が軍配をこちらに向け

「キテルグマ戦闘不能」

そう宣言する。ハラはボールにキテルグマを戻した。

先に白星を付けたのはレーヴ君ですな。では、次の番です」

そう言つてハラは次のボールを取り出す。

「いきなさい、ハリテヤマ」

「ハリ〜テ」

ハリテヤマがハラの二体目であった。

「ハリテヤマ、はらだいこ」

ハリテヤマが両手でお腹の部分を打ち鳴らす。

「れいとうパンチ」

冷気を纏った状態でラグラージが接近する。

「はたきおとす」

ラグラージは殴ろうと飛び掛かった所をハリテヤマの巨大な手で叩き落とされる。

「続いてつっぱり」

ラグラージが起き上がった所をハリテヤマが何度もつっぱりをする。

「ラグラージ、まだいけるか?」

倒れたラグラージはよろけながらも立ち上がって咆哮で応える。しかし、既に体力の限界なのは目に見えて分かる。

(すまない、ラグラージ)

瀕死寸前のラグラージにこの技を撃たせるのは気乗りしないが、

「ラグラージ、ハイドロカノン」

ラグラージの切り札の技を僕は指示する。その指示を聞き、口に水球を作り始める。

「ハリテヤマ、つっぱり」

ハラが一気に間合いを詰めにくる。ハリテヤマが全力でラグラージに向かって来る。

「発射!!」

溜まっている水球を勢いよくハリテヤマに向かって撃ちだす。しかし、ハリテヤマはその水球を両手で防ぎ更に突進した。

「ラグラージ」

撃つた後はしばらく動けない。向かって来たハリテヤマはつつぱりをしてラグラージを倒した。

「ラグラージ、戦闘不能」

審判が相手の方に軍配を向けて宣言する。僕はボールを取り出して

「ありがとう、ラグラージ。少し休んでくれ」

と言って戻した。そして次のボールを取り出し

「いけ、クロバット」

そう言ってモンスターボールを投げる。

「二体目はクロバットですな」

「卑怯とは言わないでくださいよ」

「なんの。有利なタイプを使うのも戦略ですな。構いませんよ」

ハリテヤマがクロバットとの間合いを図るように動く。

「クロバット、はがねのつばき」

クロバットが地面を擦る位の低空を鋼と化した翼を持って飛ぶ。そして、ハリテヤマの胴体に直撃する。

「はたきおとす」

しかし、離れようとした所を捉えられ、地面に叩きつけられた。その衝撃で再び煙が舞い上がる。

「二度も同じような状況にはならんのですな。ハリテヤマ、クロバットから離れなさい」
ハラの指示にハリテヤマは煙が立ち込めるクロバットの近くに残らず、直ぐに距離を取った。

「クロバットは」

煙が晴れてくる所に僕が言う。

「その四枚の羽根を巧みに使って」

「なんですか？」

ハラが疑問の声を上げる。

「音を立てずに相手に近づく」

その瞬間、クロバットがハリテヤマの背後に現れる。

「何ですと!？」

「クロバット、きゆうけつ」

クロバットがハリテヤマに噛み付き、体力を吸う。体力を吸いつくされたハリテヤマ

は倒れた。

「ハリテヤマ、戦闘不能」

審判がこちらに軍配を向けて宣言する。ハラはボールに戻し、次のボールを取り出した。

「レーヴ君、次が僕の最後のポケモンですな」

「島キングの力、見せて下さい」

「結構。最後は全力全開、本気の力で行きましょう」

そう言ってハラはボールを投げる。中からはグローブの様な形状をしたハサミを持つカニ型のポケモンを出す。

「ロトム、すまないが教えてくれ」

先程のキテルグマの様に不意を突いた攻撃を喰らいたくないのロトム凶鑑を呼ぶ。ロトム凶鑑は渋々ながらも隣に来て画面に相手のポケモンを映し出す

『マケンカニ、けんとうポケモン。ハサミで弱点をガードしつつ隙を伺いパンチを放つ。天辺を取りたがる性格で、仲間同士でも良く喧嘩をする』

「分かりましたかな？マケンカニが僕の最後のポケモンですぞ」

ハラが言うと同時にマケンカニは構える様にハサミを前に出す。

「けんとうポケモン．．．拳闘．．．なるほど、ボクシングか」

「いきまずぞ、マケンカニ。ふるいたてる」

マケンカニが両手を開いて雄叫びを上げる。

「続いてグロウパンチ」

と思つたら猛スピードでダッシュしてクロバットに左のハサミで殴りにかかる。

「エアカッターで迎え撃て」

クロバットが羽ばたいて空気の刃を飛ばすが、マケンカニはそれを打ち払つて近づき、クロバットに左のハサミで殴りつける。

「連続でグロウパンチ」

右左右左、その後左右のハサミで連続で殴りつけられる。最初は威力が低いが、どんどん威力の増すグロウパンチを何発も浴びてしまった。

「では、止めと行きましょうな」

ハラが左腕を構える。

「レーヴ君は見るのが初めてですか？。アローラ地方に伝わる^{ゼット}Zリングと^{ゼット}Zクリスタルを使った全力全開の技、^{ゼット}Zワザですぞ」

そう言つてハラは何発もパンチを入れる様に両手を動かし、最後に思いつき右手を振る。

「全力無双、激烈拳!!」

その瞬間マケンカニがオーラを纏ったようになり、何発もパンチを繰り出す。ついでに何かが何個も宙を舞った。

「クロバット、避けて」

クロバットが上昇しようとするが

「無駄ですぞ」

宙を舞う何かがクロバットに当たって落とされ、そこにマケンカニのパンチを何発も浴びてしまう。

「な、何て技だ」

クロバットが倒れ、目を回す。審判が軍配を向こうに向けて

「クロバット、戦闘不能」

宣言した。ボールを向けてクロバットを戻す。

「それにしても、クロバットを撃ち落としたのは一体？」

宙を舞ってクロバットを撃ち落とした物体を見ると、青いグローブだった。

「……はあ!?!」

どう見てもマケンカニの手である。それが何個も落ちている。でも、今もマケンカニの手は健在だった。

「あの、ハラさん。マケンカニの手が沢山落ちていますが……」

「あく、心配いりませんぞレーヴ君。マケンカニはパンチの打ち過ぎで良く腕が取れませんが、直ぐに生えますので。それに、中々それを美味ですので、後で食べましょうぞ」
（・・・サメハダーの歯みたいなものか）

僕は納得して次のボールを掴もうとすると

「そういうえぼレーヴ君はまだエースを出していないそうすな」
話しかけられた。

「最後のポケモンはそのエースと戦いたいですな」

考えていたボールを掴むのを止め、希望通りのポケモンが入ったボールを掴む。

「・・・強いですよ、このポケモン」

「楽しみですぞ」

僕がそのボール、ダークボールを構える。

「いけ、ガブリアス」

「ガアア!!」

ボールから出たガブリアスが咆哮して威嚇する。マケンカニも両手も構える。

「ガブリアスですか。確かに強敵ですな」

ハラもマケンカニ同様に構えて言う。

「ガブリアス、つるぎのまい」

「グロウパンチ」

マケンカニが拳で殴ろうと接近する。

「アイアンテールで迎え撃て」

ガブリアスが身を翻して鋼の化した尻尾でマケンカニの拳を止める。

「そのままドラゴンクロー」

両腕の皮膜を伸ばして切り付ける様に振り下ろし、マケンカニを吹き飛ばす。

「マケンカニ、もう一度ふるいたてる」

「こっちもつるぎのまい」

お互いが咆哮して威嚇しあう。

「グロウパンチ」

「アイアンテール」

お互いが一撃目と同じ状況になる。マケンカニが殴りに行ったのをガブリアスが鋼と化した尻尾で受け止める。

「流石ドラゴンタイプ。何度もグロウパンチやふるいたてるで能力を上げていますのに、それを耐えるだけの能力が高いですな」

「ドラゴンタイプは育てるのが難しいですが、確りと育てれば心強いポケモンです」

ハラの言葉に僕が応える。ハラが再び構えのポーズをとる

「ですが、これはどうですか？ ばくれつパンチ!!」

今まで連打以外では打って来なかった右手でマケンカニが正確に頭部を狙って殴りに来る。ガブリアスは頭を動かして直撃は免れるが、突起に掠っただけで吹っ飛ばされてしまう。

「そこまで攻撃が上がっているのか」

吹っ飛ばされたガブリアスを見ると、ガブリアスが何とか立ち上がっている所だった。

「ガブリアス、空を飛べ」

ガブリアスが上半身を折り畳み、助走をつけて空へと飛び立った。

「逃がしませんぞ。バブルこうせん」

マケンカニが左手からガブリアスを狙って泡を発射する。

「掠っただけですから混乱している様子は見られませんな」

ハラはガブリアスが正確にバブルこうせんを避けているのを見て言う。

「落下の勢いを利用しろ。ドラゴンクロー」

ガブリアスが向きを変えてマケンカニに向かって急降下する。両手の皮膜を鋭い刃に変えてマケンカニを捉える。

「これで決めますぞ、ばくれつパンチ」

ハラが拳を突き出すようなポーズをして言う。マケンカニも右手を少し引いてガブリアスがリーチ内に入るのを待つ。

「ガブリアス、回転して交錯」

ガブリアスが指示通り体を回転させてマケンカニに向かって降下していく。そして、お互いが交錯した。

お互いが体を反転させて見合う。

「駄目だったか」

僕は再びガブリアスに指示をしようとした時

「いや、儂の負けですな」

そのハラという言葉通り、マケンカニは倒れた。

「勝負あり！。マケンカニ、戦闘不能。よってこの勝負、レーヴの勝ち！」
審判が軍配をこちらに向けて宣言した。その瞬間、会場が再び沸いた。

第11話 影を落とす過去

「ハハハ、負けましたな」

武舞台の上で僕はハラと握手を交わす。

「では、Zクリスタルを渡しますぞ」

そう言つてハラはポケットからオレンジ色の中央に拳が描かれたクリスタルを取り出す。

「これがあれば、儂が試合中に使つた全力無双激烈拳を使えますぞ」

僕にクリスタルを渡しながら言う。

「そうだ、これも完成していたのですぞ。レーヴ君が持っていたかがやくいしを加工して作つたZリング」

そう言つてハラは黒いZリングを渡してくる。

「これで君もZワザを出せる様になりましたな」

僕が左腕に填めたのを見てハラは言う。

「他にも各タイプに対応したZクリスタルがありますので、探してみると良いですぞ。遅くなりましたが、大試練達成おめでとう」

「ありがとうございます、ハラさん」

「これから君の島巡りが本格的に始まるのですな。頑張つて行くのですぞ」

そう言つてハラはステージを降りてテントの中に戻る。僕もステージを降りたところにハウがやつてきた。

「すげー、じいちゃんに勝つなんて」

「次はハウの番」

そう言うとうハウは頭の後ろに手を組んだ。

「いやー、流石に今の実力じゃあじいちゃんに勝てそうもないし、今回は見送るよ。でも、いつかはじいちゃんに挑戦して島巡りを達成する」

ハウはそう言つて笑顔を作る。

「それもまた、一つの手だから良いと思う」

「でもレーヴ。俺、レーヴと一緒にアローラを周りたい。昔住んでいたけど、俺はメレメレ島しか知らないんだ。だから俺もレーヴの島巡りに付いて色んな島を巡りたいし、そこで自分を強くしたいんだ」

「僕も久しぶりに共に旅できる人が居て嬉しいよ」

「久しぶり?・・・レーヴは前は他の人と旅してたんだな」

僕は上着のポケットに手を入れて顔を俯ける。

「うん、旅で出会った大事な友達がね」

そこに入っているボールを触りながら言った。

「レーヴさん、勝利おめでとうございます」

その後、レーヴさんがやって来て言う。

「ありがとう、リーリエ」

僕が応えようとリーリエは提げている紙袋の中から箱を取り出す。

「これ、レーヴさんに似合うと思って買ってきました。被ってみてください」
僕は渡された箱を開けると三角帽子が入っていた。

「トリコーンとは、中々」

僕はそれを被る。

「似合います、レーヴさん」

「カッコいいぞ、レーヴ」

リーリエとハウが褒めてくれた。そこにクワイ博士がやってくる

「お、レーヴは中々渋いのを被っているじゃないか」

そう言っただけでクワイ博士はレーヴの頭を撫ぜる。

「大試練突破おめでとう。どうする？。もう明日には出発するの？」

「そうしたいですが、効果機が修理中ですので」

アローラに來た時に無理をさせすぎて故障した効果機が直らなくては海を渡れない。

「島巡りを誘ったのは僕だから、付き合うよ。船も僕が持っているしな」

「博士、その船にハウも乗せていいですか？」

「勿論だ。旅は賑やかな方がいい」

「やったー、ありがとうレーヴ。博士」

「ククイだ。宜しくな」

「私はリーリエです。ハウさん、よろしくおねがいします」

二人が軽く自己紹介をハウにした。

色々あつたが、無事に奉納試合を終えて僕達は明日の出発の為の準備をする為に自宅に戻る。

そうそう、マケンカニの腕は確かに美味だった。

「荷物はこれでよし」

明日に備えて荷物をバッグの中に詰めていると母さんから『ごはんよお』という声が聞こえる。僕は自室から出て机に座り食事をとり始めた。

「何を考えているの?」

食事をしていると対面に座る母さんが聞いてくる。

「明日、アローラ地方を巡る旅に出発する」

「家にはじつとしていないのね。10歳になつていきなり旅を始めて今まで家に長く居ないのね」

母さんも食事をしながら言う。

「ごめん」

「まあ良いわ。可愛い子には旅をさせよ。つと言うしね。リーリエちゃんも一緒?」

机に肘を付いて言ってくる。僕は思いつきり咽る

「ちよつと、大丈夫?」

「なんでリーリエの名前が出てくるの?」

僕は咽るのが静まってから聞く。

「だってあの子可愛いじゃない。レーヴがアローラに来るなりいきなり連れて来た女の子ですもの」

「母さん、前に事情を話したと思うけど」

母さんがいきなり鋭い目になって僕を見る

「それにあの子、何かを抱えているわね。・・・ちゃんとあの子を守ってあげるのよ」

「・・・分かってるよ」

テレビが付けっ放しで色々なニュースなどをやっていたが、CMに入ったのを見る
『エゝテル、エゝテル、エゝテルぎゅいだぐん』

テレビには海上に浮かぶ巨大な建物が映っている。そして場面がポケモンが治療さ
れている様子や保護区域と思われる場所を走るポケモン達に切り替わる

『エーテル財団はアローラ地方を中心に各地で傷ついたポケモンの保護・治療・育成に取
り組んでいます』

先程より少し引いた場面であるが再び建物の映像に切り替わりテロップが表示され
ながら

『ポケモンとの暮らしでお困りでしたら遠慮なく連絡なさってください。また、傷つい
たポケモンを発見された場合もご連絡いただければ直ぐに職員が保護に向かいます』

再びテロップが切り替わった

『貴方とポケモンの愛ある暮らしを応援しております。エーテル財団』

続いてエーテル財団の代表とされる女性がインタビューに答えている様子が映し出
されている

「アローラは気候が温暖で住民も皆優しい。それに充実したポケモンの保護施設がある
から、引越しをするって伝えたご近所さんは羨ましがっていたわ」

母さんがテレビを見ながら言う。僕は食事を終えて自室に戻った。

「友との約束……かあ」

置かれている6つのボールとは少し離れた所に置かれたアルファベットと数字が書かれた紫のボールを手に取る。

「お前も早く通常に戻りたいよな」

レーヴはベッドに寝転んで昔を回想する。

「頼む、レーヴ。共に事件解決に貢献してくれた君に最後のお願いだ」

ベッドに衰弱しきった様子で呼吸器や心電図を取っていると思しき電極を付けて寝転ぶ少年の傍らに僕が居た。反対側には白衣を着た女性と小さな女の子がいる。

「この子は人によって奪われた。なら、同じく人によって取り戻す事が可能な筈だ」

アルファベットと数字が書かれたボールを取り出してその少年は言う。

「俺の両親は奪われたポケモンに関わりすぎて体を蝕まれて亡くなった。俺も、関わりすぎた」

少年は少し呼吸器をずらした。

「でも、もう奪われるポケモンはいない。組織も俺とレーヴで壊滅させた。あとは取り

戻していないのはこの子だけ」

少年はボールを僕の近くに置く。

「頼むレーヴ。この子のを取り戻してくれ。人のエゴで生み出されたこの子があまりにも可哀そうだ」

その瞬間、少年は思いつきり咳き込んでそれが止まらない。

「お兄ちゃん!!」

反対側に居た女の子がベッドに寝転ぶ少年に抱き着く。白衣を着た女性は『先生を呼んでくる』と言って出て行く。

「ゴボツ、ゴボツ。ハー、血の繋がりはないが、兄のように慕ってくれる妹や本当の両親のように育ててくれた父さんと母さんがいるんだ。最後まで幸せだ。こういう幸せな気持ちをお子にも知って貰いたい」

僕はそれを聞き、託されたボールを持って病室を出る。入れ違いで先ほど出て行った女性に連れられて医者や看護師が中に入っていく。僕は病室の扉を閉めた。その横にある入院患者のネームタグには『RYUTO』と記されていた。

「それから暫くして妹から友の死を知らせる手紙が届いた」

ベッドから起き上がってボールを元の所に置く。

「各地を旅しながら出会った人たちの話を聞くと、アローラにそういう事ができる施設があることを教えてくれた」

机の中からアローラ地方を特集した旅雑誌を取り出す。

「エーテル財団。島巡りをしていたら、行くこともできるだろう」

僕は明かりを消し、布団に入って眠りについた。

第12話 アローラロコン、その名は

朝起きて着替えを済ませた頃に玄関の呼び鈴が鳴る音がする。暫くすると母さんが僕の部屋に入ってきた。

「レーヴ、お客さんよ」

そう言われて僕は部屋を出ると、玄関の所に

「アローラ、レーヴ」

ハウが居た。

「リーリエに家を聞いて来たんだ。リーリエとクワイ博士は先に船の用意をするってハウオリシテイに行ったよ」

「アローラ。もう少しで準備が整うから少し待ってて」

僕はそう言っただけでハウに待って貰い、再び自室に戻る。

「帽子はリーリエから貰ったのでよし、バッグとボールもよし、っと」

リーリエから貰った三角帽を被り、バッグを背負う。ボールは全て上着のポケットに仕舞って自室を出る。

「お待たせ。ハウ。．．．何してるの？」

部屋から出てみると、ハウが仰向けに倒れ、お腹にニヤースが乗っている。

「いや、毛繕いしてたから猫じやらしで戯れようとしたら、飛び掛られた」
見るとハウの手に猫じやらしが握られている。

「こらニヤース。毛繕いの邪魔されたからって怒ってはいけません」

僕がニヤースを抱えて床に下ろすと、少し離れた所で再び毛繕いを始める。

『ニヤースは毛繕いを邪魔されると怒る。データ収集完了ロト』

何処からか現れたロトム凶鑑がニヤースのデータを取得したと言う。

「ハウも、あまりウチのニヤースをから押か揶わない方がよいよ。カントーじやあヤミカラス
と何度もバトルして勝っているから」

ハウはそれを聞いて『うへ、凄いや』つと言う。

「そうだ、ロトム。ちよつとここに試してくれないか?」

僕がバッグを下ろして側面に上下で取り付けた金具を指差す。ロトム凶鑑が『何だロト?』と言いながら近づく。

「ロトムを運べるようにバッグに金具を取り付けたんだ。少し大きさを微調整するから
収まってよ」

ロトム凶鑑が言われたように下部の金具に座るように収まる。それを見てレーヴが
少し金具の間隔を広げて調整し、上部の金具を下ろして閉じる様にロトム凶鑑を挟む。

「これなら落ちないし、出たければ自分で金具を広げて出れる。戻りたいならこうやって金具を閉じれば大丈夫」

『凄い口ト。楽ちん口ト。それじゃあ、休眠モードに入る口ト』

そう言つて口トム凶鑑は目を閉じてしまう。

「それじゃあ、準備できたし港に向かうとしよう」

僕がハウに向き直つて言う。すると母親がペランダから部屋に戻つてきた。

「出発するのね、レーヴ？」

「・・・行つてきます」

「ぎこちないわね。まあ良いわ。あなたが同年代と旅するのは初めてだろうし、色々とそれで学べることもあるでしょう」

ああ、母さんは知らないんだ。僕はそう思い、母親に向き直る。

「旅は楽しいつて、学んでくるよ」

「それはいつも思つてるでしょ。ハウ君・・・つて言つたわよね？レーヴの事お願いね」

「まっかせてよ、ママさん。レーヴはアローラでできた初めての友達だしね」

「前はククイ博士の車で来たからそんな距離を感じなかったけど、意外と歩くと距離あるんだね」

自宅を出てハウオリシティの方に歩いて行くと、以前来たポケモンスクールの前まで来た。

「ハウオリシティにはもう少しだね、レーヴ」

地図を見ているハウが言ってくる。

「ハウ、地図もいいけども景色を見るのも大事だぞ」

僕は道から見える海を見ながら言う。見渡す限り海が広がる光景だった。

「アローラは本当に景色が良いよ。特に夕焼けに染まる海を見ながらビーチに寝そべるのとか最高だよ」

「それはどうかくん。俺も小さい頃は時間を忘れて浜辺で寝てて、夜に帰って父ちゃんに怒られたっけ」

ハウがそんな昔話を口にしてしているとハウオリシティの入り口にやってきた。

「お、そこの方々。折角だし、辻馬車に乗って行かないかい？ 目的地まで楽々移動できるよ」

そう呼び止められて見ると、ケンタロスに繋がれたカブリオレタイプが止まっております、その脇に御者と思しきトレーナーが居る。

「どうするっ？」

僕はハウの方を見ると、ハウも『乗って行こう』という顔で見るので

「お願いします」

「それじゃあ乗って乗って。あ、荷物は後部に積めるよ」

通常のカブリオレタイプの馬車は御者が後部に乗って操るのだが、この馬車はそこが荷物置きになっている。

「あの、トレーナーさんは何処に乗るんですか?」

この馬車は二人乗りみたいだから、僕とハウが座ればトレーナーが乗ることができないので聞いてみる。

「ん?お客さん、アローラは初めてかい?」

「まあ、引越してきて日が浅いです」

「それでしたら、御存知ないのも仕方ないです」

そう言つてトレーナーはケンタロスに跨つて見せる。

「自分はここに乗るので、ご心配なく」

「レーヴ、これはアローラ地方伝統のライドポケモンを利用した文化だよ。アローラはポケモンの力を利用して発展してきた面がある。それを今でも受け継いでいるんだよ」

『レーヴは何も知らないロトねえ』

今まで休眠していたロトム図鑑が目を開けて僕を馬鹿にするように言う。

「仕方ないだろ。他所にはそういう文化がないんだから」

僕は金具を外してロトム図鑑ごとビーチの方に放り投げた。『ロト〜!!』という声が聞こえたし、ハウやトレーナーが苦笑いしているも気にしない。

ケンタロスに曳かれた馬車に乗ってハウオリシティの中央街道にある市場を通る。ここはハウオリシティで一番の大通りで両脇の歩道には多くの商店が野菜や果物などを売りに出しており、それだけでなく一般の人が自分の育てた野菜や使わなくなったなどを空いたスペースにマットを広げて売っている。

「フリーマーケットか。ちよつと見て行こう」

トレーナーに言つてケンタロスを止めて貰い、僕は馬車から降りる。

「お、丁度いいカメラが売ってる」

並べられている品を見ているとカメラが置かれている。

「お客さん、良いのに目を付けたね。そいつはまだ今年出たばかりのシルフカンパニー製の最新型さ。ちよつと構えてみな」

僕は言われた通りカメラを構える。すると店主が何やら指をさす。

「あそこに何か見えないか?」

僕は言われた方をカメラ越しに見ると、

「ゲ〜ン!!」

いきなり画面一杯に大きな口と舌が映り、僕は驚いて後ろに転ぶ。暫くするとそこに実体化したゲンガーが現れて笑っている。

「驚かせてすまない。そのカメラのレンズはシルフスコープを兼ねていてな。今みたいな透明化しているポケモンとかも映し出せるんだ」

「確かに驚きましたが、凄いい機能ですね。値段は？」

「驚かせちゃったしな。今買うってんならこの値段でどうだい？」

僕は提示された値段を見て財布からお金を出して支払った。

「毎度」

店主にそう言われ、僕は馬車に戻る。

中央街道を抜けた先に役場などがあり、僕たちはそこで馬車を降りる

「またのご利用を。良い旅を」

トレーナーと別れ、僕とハウは役場を通り過ぎるとき、柵の所で見覚えのあるトレーナーを見つける。

「あれ？イリマじゃん。アローラー！」

ハウが見つけるなり、イリマの元へ駆けていくので僕も後を追う。

「はい、イリマです。アローラー」

イリマが振り返って挨拶をする。

「こんな所で何してたの？」

ハウが屈託のない笑顔で聞く。

「はい、ここの柵のペンキが落ちて来たので色を塗り直してます」

見ると反対側からダブルが丁寧に柵のペンキを塗り直しているのが見える。

「キャプテンも大変なんですね」

僕がねぎらいの言葉をかけた。

「キャプテンは、街の美観向上も仕事ですので」

イリマは何でもないと言った感じで応えた。

あまり邪魔をするのも悪いので先に進むと、何やらハウの目が輝き始めた。

「この匂いは!？」

そう言うなり、ハウは突然の全力疾走。僕は慌てて追う。

「やつぱり、マラサダシヨップ!!」

そう言うなり、店内に入っていく。僕はそのままスライディングの要領で店の前を滑った。ハウは相変わらず、マラサダが好きなのだ。

「ハウ、先に船着き場に行ってるからな」

僕は店の外で力なくハウに向かって言うしかなかった。最も、マラサダに夢中になるハウに言葉が届いたかは不明だが。

船着き場に着くと、遠くからでも見分けられる人物が居る。白い帽子にワンピースを着る金髪の少女、リーリエが船着き場で傍にアローラロコンを連れて待っていた。

「アローラ、リーリエ」

僕が声をかけると、リーリエが気付いたように振り返る

「アローラ、レーヴさん。帽子、被っていたいただいてありがとうございます」

僕がリーリエの買ってきた帽子を被っているのを見て笑顔を見せる。すると、周囲を見渡す仕草をし

「あら？ハウさんは？」

僕に聞いてくる。傍のアローラロコンも困ったような表情をした。

「あく、ハウならマラサダショップに入って行ったよ
するとリーリエが笑う。

「そういえばククイ博士から聞きました。リリイタウンでマラサダを数分で六個も食べたって話し」

アローラロコンも『コーン』と鳴く。

「シロン、あんまり食べ過ぎてはいけませんよ」

『コン?』

「シロン?」

「はい。白いロコンなのでシロンです」

アローラロコン改め、シロンは誇らしげに鳴く。

「良い名前だと思う。大切に育てれば、必ずポケモンは応えてくれる」

「ありがとうございます。私もレーヴさんの様に大切にシロンを育てます」

そう言われて僕は少し照れくさくなった。

「さて、ククイ博士はもう少しかかるそうなのでこちらで待つように言われています」

「ハウも来るまで少しかかると思うし、丁度いいと思う」

そう言って僕とリーリエは船着き場のベンチに腰掛けた。

第13話 目的

暫く僕とリーリエがベンチに腰掛けて待っていると大きな紙袋を持ったハウがやって来る。

「お待たせ」

気の抜けた顔で挨拶するハウ

「ハウさん、その量は」

リーリエはハウが持つマラサダの量に驚いた声を上げる。紙袋には入りきらないマラサダが顔を覗かせている位たくさん入っている。

「好きにも程があると思うよ、ハウ」

僕はその量に特に驚きもせず言う。

「ん？これは皆の分も入れてだよ。はい、レーヴとリーリエに」

そう言つてハウは僕とリーリエに取るよう、マラサダの入った紙袋を差し出した。

「え？あ、ありがとう」

「ありがとうございます。頂きます」

僕は意表を突かれたように貰い、リーリエも受け取る。ハウは視線をリーリエの足元

に居るシロンに移し

「そのロコンにも」

ハウがしゃがんでシロンの元にマラサダを差し出す。それを見てシロンは匂いを嗅ぐような仕草をし、恐る恐る一口食べると、気に入ったのか鳴き声を挙げて食べ始める。

「ありがたいございませう、ハウさん。シロン、良かったですね」

リーリエの言葉にシロンが『コーン！』と応える。

「へへ、シロンって名付けたんだ」

「はい！。白いロコンなのでシロンです」

「良い名前だと思うよ」

ハウがそう言った後、僕の方を見てくる。

「レーヴもポケモンを出しなよ。その為の皆の分なんだから」

ハウはそう言って自分もポケモンを出す。

「ハウ、それはありがたいんだが、絶対にポケモン入れてもその量は多いぞ」

僕もポケモンを出しながら言う。

「へえ、ガブリアスやラランテス、クロバットは見たけど。残りはクレベースやラグラーヂ、もう一体は？」

僕が海面を指差すと、一匹のポケモンが顔を出す。

「ラ〜！」

「へえ、ランタンかあ。中々可愛いポケモンを持つてるじゃん」

僕もハウのポケモン達を見る。ピカチュウやチコリータは見ていたが、オンバットやイーブイと

「このポケモンは？」

僕は寝ているポケモンを持ち上げる。もふもふした肌触りで目と脚の周りは白でそれ以外は茶色。蝶ネクタイみたいな葉っぱを付けたポケモンだった。

「そいつはモクローだよ。俺がアローラに居た頃に一緒に遊んだりしたポケモン」

モクローと呼ばれたポケモンは目を覚ますと飛び立ち、今度は僕の頭の上で寝始める。

「レーヴの頭の上が気に入ったみたいだな」

そこで再び眠りにつこうとするので持ち上げて地面に下ろす。

「気に入ってくれるのは嬉しいが、それはハウにやってくれ」

ハウがポケモン達にマラサダを配っている。ポケモン達は食べているが、何匹かは表情がイマイチだった。

「そんな好きな味じゃなかったのか。ごめんなあ」

ハウが謝るように配ったポケモン達に周る。どうやら、マラサダはポロックやポフイ

ンと同じくポケモンにも好みがあるようだ。

「さて、レーヴ。ポケモン達もお腹一杯になったみたいだし、食後の運動を兼ねてポケモンバトルをしよう」

ハウがこちらに向き直って言う。

「いいよ。けど、ククイ博士の準備完了までだからそんなに長引かせるわけにもいかない。一対一にしよう」

「よし！。レーヴと初のバトルだ」

そう言つてハウは少し離れた所でこちらに相對する。

「俺はモクローで行くぞ！」

そう言うともクローが目を覚まし、翼を広げて威嚇する様に鳴く。

「さっきの寝姿とはえらい違いですね」

僕は誰を使うか迷う。飛行能力を持っているのでクロバットで挑むことも考えたが

「ここは、ランターンで」

水上に顔を出しているランターンの方を向いて宣言する。

「ら〜」

ランターンはそう鳴き声を出し、挑発するよう舌を出す。

『待つロト〜』

っと、突然ロトム凶鑑が僕の前に現れた。

『酷いロト、レーヴ。僕を置いて行くなんて』

ロトム凶鑑は怒ったように僕に言う。

「ごめんごめん、ロトム。よく帰ってこれたね」

『街の人に聞きながら探したロト。苦労したロト』

「レーヴ、そろそろ攻撃していいか？」

ハウは気を使って待っていてくれたようだが、最終的にロトム凶鑑と殴り合いを始めたので話しかけてくる。

「ごめんよ、ハウ。ロトム、今からバトルするからデータ収集で許してくれ」

ロトム凶鑑も腕を組んで、『仕方ないロト』と言って僕の横に付く。

「それじゃあハウ、お詫びに先攻を譲るよ」

「それじゃあモクロー、はっぱカッター！」

モクローが飛び立つと、ランターンに向かって鋭い葉っぱを飛ばす。

「れいとうビームで撃ち落とせ」

ランターンが口から冷気を放ち、向かって来る葉っぱを凍らせてしまう。

「ランターン、水中に潜れ」

ランターンが頭を引っ込め、水中に潜る。それをモクローが探す様に上空を旋回し始めた。

「連続ではっぱカッター」

ハウの指示に従い、モクローが連続で水面にはっぱカッターを放つ。しかし、幾ら鋭いはっぱを高速で飛ばすとはいえ、水中では直ぐに減速して海面に浮かんできてもう。

「ランターン、れいとうビーム」

ランターンがれいとうビームを放とうと浮上し始める。

「そこだモクロー、はっぱカッター！」

モクローはハウが指差した部分に正確にはっぱカッターを放つ。すると、その場所にランターンの顔が現れる。

「ら〜！」

はっぱカッターが直撃し、ランターンが再び水中に逃げる。

「よし！」

「驚いた。正確に顔を出すところを狙うなんて」

ハウがガッツポーズを取り、僕は驚愕の表情でハウを見る。

「何故？」

僕は海面を見ると、先程連続で放たれたはっぱカッターの葉っぱが浮かんでいる。ただ、先程ランターンが顔を出した場所の周りには葉っぱが無かった

「そういう事か」

ランターンが海面に顔を出すために浮上するが、その浮上する際に水を押し上げてしまふ。その力で水面が盛り上がってしまうのだ。目では判別できないが、ハウは葉っぱがその場所から移動する事で見分けたのだ。

「ランターン、なみのり」

波が発生し、海面に浮かぶ葉っぱを流してしまう。

「ああー!」

「ランターン、もう一度れいとうビーム」

ハウが残念そうな声を出し、僕はランターンに指示を飛ばす。

「モクロー、上昇しろ」

モクローが上昇を始めた所でランターンが顔を出し、冷気を放つ。

「モクロー、反転して急降下」

モクローの後ろを追う冷気を避け、反転させて急降下に移る。

「そのままつつく」

急降下で冷気を避けながらランターンに接近する。

「ランターン、あやしいひかり」

ランターンの提灯部分が青紫の光を放った。それを見たモクローはそのままの勢いで海面に突っ込んだ。

「モクロー！」

モクローが海面で藻掻くように暴れる。翼が水を吸って飛べなくなったのだ。

「ランターン、もういいからモクローを助ける」

「ら〜」

ランターンが一旦水中に潜り、モクローの真下から浮上して背中に載せる。モクローは安心したように座る。

「ありがとうランターン」

「よくやった、ランターン」

ハウが船着き場で背中に載るモクローを抱き上げ、僕はランターンに労いの言葉をかける。

「やっぱり、レーヴはじいちゃんに勝つだけはある。俺の策を直ぐに見抜くんだから」
「いや、ハウのバトルセンスは中々だと思っよう」

お互い褒め合っていると、他のポケモンを連れてリーリエが合流する。

「ポケモンさんを元気にしますね」

そう言つてリーリエは大きなスポーツバッグを開けると

「ピュイツ！」

いきなり中から『ほしぐも』が現れる。

「あ、いけません！。ほしぐもちゃん」

「びゅい？」

ほしぐもは無邪気な笑顔でリーリエを見る。

「おわー、何だこれ？ポケモンなのか？」

ハウは驚いた声をあげる。そして、

「初めて見るポケモンだな」

『データには無いポケモンロト』

歩いて来たククイ博士とロトム凶鑑も興味津々で見る。

「ほしぐもちゃん・・・」

この後、僕とリーリエが二人に事の顛末を話す。

「なるほど」

一通り話し、聞き終えたククイ博士は言う。

「つまり、リーリエは『ほしぐも』を故郷に帰りたいと」

「はい・・・でも、何処が故郷なのか分からなくて」

弱気に言うリーリエだが、ハウは笑顔になって

「良かったじゃないかリーリエ。旅の目的が出来て」

「え？」

リーリエは驚いた顔でハウを見る。

「レーヴは島巡り。俺は強くなる。リーリエはほしぐもを故郷に帰す。三人の目的が出

来たじゃん」

ハウは屈託のない笑顔で言った。

「きっかけはレーヴの島巡りだけど、皆それぞれ目的がある。最高の旅になるよ」

「そうだよ、リーリエ。この島巡りでほしぐもの故郷に関する情報を集めれば良いんだ

よ」

ハウや僕がリーリエに言う。

「そうだと、リーリエ。目的のある旅は充実した旅になる。皆目的は違ってもな」

ククイ博士も言う。

「皆さん・・・」

「困ったら、周りを頼ればいい。皆大切な、旅の仲間だ」

ククイ博士はそう言い、手を出す。僕やハウもそれに合わせた。

「皆目的は別々だが、楽しい旅をスタートさせる仲間だ。この旅を、充実したものにしよう」

リーリエも手を合わせ、四人で宣言する。

『良いシーンロト。写真を撮るロト』

ロトム凶鑑が周りを飛んで写真を撮っている。僕はそんなロトム凶鑑を捕まえ

「ロトム、君も目的があるだろ。ポケモンのデータ収集と言う」

『そ、そうロト。僕にも目的があるロト』

「それじゃあ、皆で撮ろうか」

僕はカメラを取り出し、固定する。

「はい、もつとポケモン達も寄って寄って」

僕は手でポケモン達に指示をしながら丁度いい感じに収まるようカメラを調節する。

「よし、行くよ」

タイマーをセットし、僕は皆の中に入ってカメラに顔を向ける。その瞬間、シャッターが切れる音がした。

「釣り橋は壊れていた筈だぜ」

メレメレ島、戦の遺跡内部にてグラジオはグズマと対峙していた。

「空でも飛んできたのか？」

グズマは挑発する様にグラジオに向かって言う。

「関係ないことだ」

グラジオは素っ気ない態度で言う。すると、奥に居たスカル団のオヒアとレファが来る。

「ボスに向かって、何て口の聞き方だ」

「私達に勝ったからって生意気言ってるんじゃないよ」

グズマの前に出て二人がグラジオを睨みながら言う。

「黙れオヒア、レファ」

グズマがそう言つて二人の間を割つて前に出る。

「ここに何しに来たかは知らねえが、俺はお前を探してたんだぜ」

「探してた？」

グラジオがグズマを睨む。

「そんな眼をするなよ。同じ奉納試合に出た者同士じゃねえか。……正直な事を言う
と、お前をスカル団の用心棒として雇いたい」

「何だと!？」

グズマの真意が分からず、グラジオは声を荒げて言う。

「ここに居るオヒアやレファ、あともう一人居るんだが、こいつ等以外はバトルの実力が低いだらしねえ奴等だな。ここいらで、ちよいと実力者を雇って組織を締めたいんだ」

「・・・良いだろう」

グズマの真意を聞き、グラジオは答える。

「お、やけに話が早いじゃないか」

「俺からも聞きたい事がある。その奉納試合で去り際に言った命令できる『あの人』とは誰だ?」

次にグラジオはグズマにそう質問をぶつける。しかし、帰ってきた答えは

「さてな、そんな事言ったか? 忘れちゃったよ」

惚けだった。

第14話 アーカラ島上陸!!

ククイ博士のヨットに乗って海に出た僕達は東に向かって大海原を進んでいた。

「海風が気持ちいい!」

「うん、最高」

双胴船であるため船首が二つあり、それぞれに僕とハウが手すりに掴まって身を乗り出している。

「あんまり身を乗り出すと、落ちてしまいますよ。レーヴさん、ハウさん」

「大丈夫大丈夫。落ちてでもレーヴのランターンが助けてくれるから」

リーリエの警告にハウが応える。

「ら〜」

ランターンが呼ばれたと思ったのか、海面に顔を出して近づいてくる。

「潜ってて大丈夫だよ」

僕が手で合図を送ると、ランターンは再び海中に潜って姿を消す。

「ランターンさん、船の周りを周回しているのですか?」

リーリエがこちらに恐る恐る歩いてくる。時々吹く強い海風に備えて片手で帽子を

抑え、もう片手でシロンを抱き抱えながらゆつくりとやって来た。

「そだよ。久しぶりに広い海に出たんだから、ランターンも泳ぎたいんだと思ってボールから出して」

僕は水平線を見ながら答える。時々水面が発光しているが、これはランターンが自身の居場所を教えるために発光させている。

「ハウさんも、モクローさんをボールから出して肩に乗せていらつしやいますね」

リーリエはハウの方を見て言う。リーリエの言う通り、ハウはモクローを肩に乗せてはしや燥いでいる。相変わらずモクローはマイペースに寝たままだが……。

「コロン」

リーリエに抱かれたシロンが鳴く。リーリエはそれに気づいて

「分かってますよシロン。少し降りて下さいね」

リーリエは姿勢を低くしてシロンを離し、バッグから容器を取り出して蓋にポケモンフーズを出す。

「はい、シロン」

リーリエはそれをシロンの前に置く。すると、シロンは嬉しそうにポケモンフーズを食べ始めた。

「ポケモンフーズを用意してたのか」

「シロン用に調合したポケモンフーズですので、レーヴさんのポケモン用のフーズもいつかは……」

「よろしく頼むよ」

視線をシロンに向けると、いつの間にかシロンの横にモクローが居て僕は驚いた。

「ははは、ごめんごめん。モクローもお腹空いたみたいだな」

ハウがやって来て言う。モクローはシロンの横からポケモンフーズを一つ^{ついは}啄んでは食べ、また一つを……と繰り返している。シロンは特に気にする様子もなく食べ続けている。

「モクローさんもこの味が気に入ったんですね。今度からは多めに作るようにします」

「ありがとうリーリエ」

ハウは頭の後ろに手を組んで言う。

「ハウとモクローって仲良いんだね。肩に止まったまま寝てたし」

僕がそう言うのとハウが笑顔になって

「うん、まだ俺がアローラに居た頃からモクローはじいちゃんの所に居て、一緒に森に行っては遊んでたんだ。アローラを離れた時には別れていたけど、帰って来た時にモクローは覚えてたみたいだね。そのまま手持ちに加わってくれた」

ハウが視線をモクローにやると、モクローの首がクルツとこちら側を向く。

「最高のパートナーだよ」

首を元の方向に戻すと翼を広げて飛び立ち、ハウが差し出した腕に止まる。

「それにしてもアーカラ島にはまだ着かないのか?」

ハウはそう言うのとリーリエは苦笑いを浮かべる。

「博士のヨットはその・・・古いヨットですのよ」

「聞こえているよ」

声の方を見ると、ククイ博士がこちらに歩いてくる。

「でも、少しずつ見えて来たぞ。あれが、アーカラ島だ」

指差した方角を見ると、島が見え始めた。ひと際大きく目立つ噴煙を上げる火山が特

徴的な島だった。

「アーカラ島にあるヴェラ火山は一番体積の大きな山として有名だ。自然豊かな島だ

よ」

「噴火は大丈夫なんですか?」

僕はククイ博士に聞くと

「近年マグマ溜まり形成されていると聞くし、膨張現象も確認されているらしい。近い

未来、噴火するかもな」

サラッと怖い事を言われて僕はヴェラ火山を再び見る。

「どうか、噴火しませんように」

手を合わせて祈っておいた。

「それじゃあ、上陸するぞ」

ククイ博士のヨットは外洋では風を受けて進むが、港などでは取り回しを重視する為に小型エンジンを搭載した機帆船である。故に港に近づいたところで帆を畳み、エンジンを始動して船着き場に近づいた。

「よつと」

係留場所に近づいた所で僕はヨットを降りる。そしてククイ博士が投げて渡したワイヤーロープを引っ張って係船柱ボラードに括り付けた。

「よし、アーカラ島、とうちやーく!!」

僕は振り返って街の方を向き、両手を万歳する様に上に開いて大声を出した。

「ら〜」

海面から顔を出したランターンも鳴く。僕はボールを取り出して

「久しぶりの海は楽しかったろ。ゆつくり休んでくれ」

ランターンを戻した。ククイ博士とリーリエも船から降りて来る。残るハウは

「あらよつとー!」

ヨットからジャンプしてアーカラ島に上陸した。モクローは羽ばたきながらハウの頭の上に止まり、翼を広げた。

「アハハ、モクローも新しい島に上陸して喜んでる」

ハウはモクローを持ち上げて肩に載せてあげる。

「あらよつとー、と言いなながらヨットから降りたのはもしかしてギャグでしょうか？」

リーリエが笑顔を浮かべて言う。

「なるほど、あらよつと、ね」

僕が納得すると

「えー、レーヴはこういう時どういう反応するの!？」

「大丈夫だ、ハウ」

そう言つて僕はリュックの横に付いているロトム図鑑を持ち

(ロトム、僕が反応しなかったから微妙な空気になってしまった。もう一度、今度はロトムがやってくれ。ちゃんと反応するから)

(しようがないロト。ハウにはマラサダの恩もあるロト)

そう小声で会話し、ロトムがヨットの甲板の上に移動した。

『あらよつと、ロト』

そして、ジャンプする様に浮遊して着地した。それを僕は冷めた目で見て

「ハウ、これが僕の反応だ」

『酷いロト！レーヴがやれ、と言ったロト!!』

ロトム凶鑑が抗議する様に蹴りを入れて来たので、僕とロトム凶鑑とで喧嘩が始まった。

「博士ー」

涙声でハウがククイ博士に助け船を頼むように見ると

「バスでふつとばす・・・とかね」

ククイ博士が助け船を出す様に腰に手を当て、笑顔で言う。ハウとククイ博士は笑い合っており、僕とロトム凶鑑は喧嘩している。・・・リーリエは苦笑いを浮かべて、抱き抱えられているシロンは困った顔をしているが、持っているスポーツバックは揺れている。・・・ほしぐもには面白かったのだろう。

「ここはアーカラ島の玄関口、カンタイシティだ」

ククイ博士が説明しながら船着き場から道に出ると、街並みが見える。何処かレーヴにとって見慣れた街並みだった。

「アーカラ島はカントーやジョウト地方からの移民が多く居て、レーヴにとって懐かしい街並みだろ？」

「確かに、懐かしい街並みですね」

そう言っていると、前から二人の人物が歩いて来た。

「へえ、懐かしさを感じるって事はアンタはこの地方出身じゃないのね」

黒い肌をした、文句なしの抜群のプロポーションを持つへそ出しスタイルの女性が話しかけてくる。

「え？」

いきなり話しかけられて僕は驚いたようにその女性を見る。

「ククイ博士と一緒にいるって事は、アンタが島巡りの挑戦者ね」

「そうです。レーヴと申します」

僕は名乗ると、女性は考えるようなポーズをとる

「レーヴ・・・なるほど、確かにアローラの人間の名前ではないわね」

「出身はカロス地方です」

「なるほどね。あたしはライチ。このアーカラ島で島クイーンを務めているわ。こっちは」

ライチと名乗った女性が後ろに居る褐色の少女を見る。短パンタイプのオーバーオールを着た少女が一步前に出て

「はいー、まいどどーも」

と、元気のいい声を上げた。

「あたしはマオ。このアーカラ島でキャプテンをしてまーす」

マオと名乗った少女は笑顔で言う。

「アンタ達がアーカラ島に向かったと言うんで見に来たら、丁度そこで出前に来てた彼女に会ってね。一緒に見に来たって訳」

ライチがそう言うのと、マオが一步前に入る。

「はい!。あたしの家は食堂をしているので、そのホテルに食事を卸しに来て、その帰りにライチさんに会いました」

そう言うのと、更にこちらに近づいてきて、僕の前で止まる。

「あたしの試練は素材の良さを光らせる試練でね・・・」

僕を真っ直ぐに見るマオの視線に、僕は少し気圧されそうになる。

「特にレーヴとレーヴのポケモン、とても良い素材を持つてる」

そう言うってマオは戻って行った。僕は緊張の糸が切れたように安堵する。

「あたしはアーカラ島最後の試練だからね。レーヴがあたしの試練を受けに来るの、楽しみにしてる」

そう、笑顔で僕の方を見て言う。

「最後?」

「そう。アーカラ島のキャプテンはマオ以外にあと二人居るんだけどね。途中で脱落するんじゃないよ」

僕の疑問にライチが応える。どうやら、メレメレ島と違ってキャプテンが複数人いるようだ。

「それじゃあ挑戦者の顔も見れたし、あたしの大試練まで来れることを楽しみにして待つてるわ」

そう言うのと二人は去って行く。

「それじゃあ、僕はハニーに呼ばれてるし空間研究所に向かうよ。皆も、それぞれの目的地に向かってくれ」

そう言うってククイ博士は街の中心部に向かって歩いて行く。

「僕は島巡りだから」

ククイ博士に先ほど渡された紙を広げる。そこには『4番道路を越えてオハナタウンを目指す』と最初に書かれている

「オハナタウンって所を最初に目指すみたいだ」

「俺はマラサダシヨップに行くー！それからレーヴに付いてくー」

ハウは相変わらずだった。

「私は遺跡を目指したいと思います。ほしくもちゃんの手掛かりを探して」

『僕はレーヴに付いて、アーカラ島のポケモンのデータを集めるロト』

「それじゃあ、行こうか」

それぞれがそれぞれの目的の為に歩き始めた。

アローラ地方南東部の島、ウラウラ島。その島の北西部にあるポータウンにグラジオが居た。

「ここが俺たちのアジトになっている街、ポータウンだ」

オヒアに案内されてポータウンを訪れたグラジオは街道を進んでいくと、大きな屋敷があった。

「ここにボスがいらっしやる。グズマさんに会うには合言葉がいるんだが、俺のような幹部には不要だ」

中に入ったオヒアとグラジオは階段を上って下っ端が警備するドアを潜った。

「ボス、用心棒グラジオをお連れしました」

頭を下げて一段高くなっている部分に備えられた椅子に座るグズマに対して言う。

「おう、ご苦労だ」

そう言つてグズマは立ち上がる。

「どうだ？この街は？」

グズマはグラジオオを見て言う。

「何も。薄暗い、汚い街だ」

グラジオオは街の壁や建物内が荒らされ放題の落書きされ放題を見ながらここまで来て
ている。

「そう言うなよ。ここに居る連中は皆日陰者だ。アローラの・・・な」

横のテーブルの上に置いてあるコーヒーマーカーでエネココアをカップに淹れながら自嘲気味に言う。

「クソみてえな風習に縛られて、外を見ない頭の固い連中からはみ出ちまった出来損ないかもしれないが、それでも俺にとってはな・・・」

エネココアを容れ終えてグラジオオに差し出す。

「飲めよ」

「要らない」

グズマの容れたエネココアを拒絶して、そのやり取りを見ていたオヒアは冷汗をかいた。

「フン」

しかし、グズマはそう言って自分で飲み、椅子に座り直す。

「さて、辛気臭え話しはここまでだ。仕事の話をしよう。レーヴとか言うガキは覚えて
いるか?」

「ああ。試合に出てた」

「お前が決勝で戦う筈だった相手だ。そいつがアーカラ島に上陸したとの連絡を受けて
な。ちよつと仕事の邪魔になりかねない」

グズマは椅子に深く座り直してグラジオを見る。

「決勝で戦えなかったようだし、そいつをぶつ潰してこい。これが、用心棒としての仕事
だ」

「・・・別に試合をしたかった訳じゃないが。雇われた以上、仕事をしてくるよ」

中二病前回のポーズをした後、出て行く。

「ボス・・・」

オヒアがグズマを見る。

「あいつ、あれがカツコイイと思ってるのか?」

グズマは歩いて行くグラジオの背中を見ながら言った。

第15話 カヒリ登場

カンタイシテイを歩くと、目の前にリーリエが何やらモデルコーデイネートされたマネキン人形を眺めながら立っている。足元にはシロンと・・・ほしぐもがいる。

「リーリエ、こんな所でどうしたの？」

僕が話しかけるとリーリエはこちらに気付いたのか笑顔になる。

「あ、レーヴさん。ちょっと、この服を見てまして」

見ると、緑のチェック柄のワンピースがマネキンに着せられている。

「リーリエは今の服の方がきれいだと思うよ」

「・・・嘘です」

リーリエが突然暗い表情になるので僕は

「え？いや、本当に」

「お願いです。やめて下さい」

フオローしようとするが、完全に拒絶された。

「・・・ごめん」

僕は謝罪すると、リーリエの足元に居たシロンがリーリエの顔を困り顔で見上げる。

「あ、ごめんなさい。シロン。なんでもありません」

元の明るいリーリエに戻り、僕は安堵して会話を進めようとする。

「きゅい？」

すると、スポーツバックから鳴き声が聞こえる。

「あ、ほしぐもちゃん。起きたのですね」

スポーツバックの中からほしぐもが顔を出す。

「でも、あまり見られても困るのでバッグの中で大人しくしていて下さい」

「ぴえん」

ほしぐもは鳴きながら顔をバッグの中に戻す。リーリエはこちらに向き直り

「レーヴさんは試練に挑まれますので、ホテルしおさい手前にある道が四番道路ですの
で、そちらを進んでいけば目的のオハナタウンに着きますよ」

「ありがとうリーリエ。ハウもマラサダショップに行ったら来ると思うから合流して進
むよ」

そう僕が言うと、リーリエは思い出したような顔をする。

「ハウさんでしたら」

そう言つてリーリエは

「リーリエ、ここにマラサダショップがない！街の人に聞いたらロイヤルアベニューつ

て所にあるって話だから先に行くね!、レーヴにも宜しく行つといて」

ハウの言い方を真似て言う。

「と言つて、先に四番道路を走つて行かれました」

リーリエの言い方は可愛かったが、ハウの件にはよろけくだりそうになる。

「ハウさん、マラサダの事には見境ありませんね」

僕は同意すると、リーリエは振り返つて歩き始める。

「私は方向音痴ではありませんが、流石に見えているホテルには迷わず向かえます。そこでバーネット博士と合流することになっておりますので。レーヴさんにハウさんの事は伝えましたから、ホテルしおさいに向かいます」

そう言うのとシロンを伴つて角を曲がって行つた。

「あ、それと・・・」

曲がって行つたと思うと、その角からリーリエが僕を見る。

「皆さんは気付いていませんでしたが、レーヴさんもヨットを降りる時、『よつと』と仰いましたか、あれもギャグですか?」

僕は何気なく言つたので指摘されるまで気付いておらず、顔を赤らめ、三角帽を目深まぶかに被つて誤魔化した。

『レーヴさんもヨットを降りる時、『よっと』と仰いましたが、あれもギャグですか？』

「ロトム！」

『レーヴさんもヨットを降りる時、『よっと』と仰いましたが、あれもギャグですか？』

「ロトム!!」

四番道路を進みながら、バッグの側面に金具に挟まれて固定されているロトム凶鑑がリーリエの声で悪ふざけの様に言ってくることに僕は声を大きくしながら言う。

『レーヴにやられた仕返しロト』

港での事を根に持っているのかロトム凶鑑は腕を組んで言う。

「悪かったってロトム。機嫌を直してくれ」

『じゃあ、今度マラサダを所望するロト』

「・・・ハウみたいな事言い始めたね。気に入ったの？」

『美味しかったことは認めるロト』

ロトム凶鑑は腰に手を当てて言う。

「僕も美味しかったと思うし、分かったよ。ロイヤルアベニューにあるっていうマラサダシヨップを見つけたら買う事にするよ。」

暫く歩くと、きのみが落ちている。丁度良いので拾い上げようとすると

「ケーー!」「ケーラー!」

何かが帽子に止まったり僕の周りを飛んだりして襲って来る。

「何?!痛い痛い!」

『痛いロト!何するロト!!』

尖がった物に連打されて僕とロトム凶鑑が痛がる。僕は痛みに耐えて手で振り払いつつその場を一旦引いた。

「な、なんだこのポケモンは?」

全身が黒色で、顔から首までと翼の内側が白色、くちばしから頭に掛けて赤色の鳥ポケモンが羽ばたきながらこちらを威嚇する様に三匹が見ている。

『ツツケラというポケモンロト』

「ツツケラ?」

『ツツケラ。きつつきポケモン。秒間16連打で木を突き穴を空ける。木の実を餌とし、その空けた穴に仕舞いこむ習性を持つ』

「木の実が餌。なら、この木の実は彼等が狙ってた物なのか」

ロトム凶鑑の説明に僕は納得する。

「君たちの木の実を横取りするつもりはないよ。取ろうとしてごめん」

僕は手を振りながら近づく。ツツケラはお互いに顔を見合わせ、警戒を解いたのか地面に降り立って一匹が僕の方に跳ねながら近づく。

「ほら、お詫びに僕が持つてる木の実もあげるよ」

僕はカバンから木の実を取り出して差し出す。ツツケラは首を傾げた後、差し出した木の実を啄む。すると、気に入ったのか翼を広げて鳴き、他の二匹のツツケラを呼び寄せて共に啄み始める。

「時々掌に嘴が当たって痛いけど、どうやら警戒は解いてくれたようだ」

僕がそう言うのと、ロトム図鑑が自分で金具を広げて出てくる。

『では、データを記録するロト』

そう言うって木の実を啄むツツケラの周りを飛んで撮影を始める。

「その子たちを手懐けるなんて、凄いじゃない」

いきなり上から声がして、驚いた僕は立ち上がって上を見上げた。

「この場所に主は居ないけど、彼ら一家は主みたいなものよ」

見上げると、上空に鋼の様に黒光りする大きな体と翼を持つ大型の鳥ポケモンが自動車の様なゴンドラを持たせて羽ばたいている。

「な、デカイ鳥ポケモン!!」

僕は驚いて後ろに倒れる。

「ごめんなさい、驚かせるつもりはなかったのだけど。．．．こつちの人間にはこれは異様に映るわよね。アーマーガア、降りて貰って良いかしら?」

「ガア」

アーマーガアと呼ばれたポケモンは鳴き声を上げて降下してくる。ゴンドラを着地させると、そのポケモンは翼を畳んで休み始める。

『何度検索してもデータなし、データなしロト。新種のポケモンロト!!』

ロトム図鑑が興奮する様にそのポケモンの周りを飛び始める。鬱陶しいと感じたのか、そのポケモンは羽で周りを飛ぶロトム図鑑を払いのける。

「残念ね。このポケモンは確かにアローラにはいないけど、新種と言う訳ではないわ」

ゴンドラのドアが開き、中から水色のゴルフウェアを着た女性が降りて来る。

「この子はアーマーガア。去年全ガラル女子オープンに参加したときのガラル滞在中に捕まえたポケモンなの」

「ア……ア……アナ……タハ」

僕は緊張のあまり震えながら言う。

「私はカヒリ。プロゴルフファーをしているの。偶々移動中に貴方がツツケラに襲われていたから助けようと思ったのだけど、必要なかったみたいね」

ツツケラは先程の敵意など忘れたかのように僕の帽子の上に止まるなどしている。

「とりあえず、立てるかしら?」

カヒリと名乗った女性は手を差し出す。僕は差し出された手を掴んで立ち上がると

「カヒリさん、レーヴと申します！。早速で申し訳ないのですが、サインください」

目にも止まらぬ速さでカバンから色紙とサインペンを取り出し、お辞儀をしながら頼み込んだ。

「え、ええ、良いわよ」

カヒリは一瞬間を喰らったようになったが、我に返って僕から色紙とサインペンを受け取る。

「クチバ出身のフミカ選手との全イッシュオープン戦での激戦を見て以来ファンでした！。お会いできて光栄です！」

「ありがとう。はい、これ。宛名はレーヴくんで良かったかしら？」

「はい、ありがとうございます」

僕はお礼を言つて色紙とサインペンを受け取る。

「それじゃあ、大丈夫そうだし私は行くわね。そうそう、さっきも言っただけそのツツケラ達ドデカバシ一家はここの辺を根城に木の実を集めているから、無暗に地面に落ちてくるからって手を出さない方が良いわよ」

そう言つてカヒリはゴンドラに乗り込んだ。アーマーガアがゴンドラを持ち上げて上昇していき、飛び去って行く。

『レーヴ？レーヴ？』

ロトム凶鑑が僕の周りを飛んでいる。

『どうしたロト? レーヴ?』

「ロトム……」

『?』

「僕は今日……死んでもいい」

『何を言ってるロト!? 疲れたロトか!?』

ロトム凶鑑が僕のカバンに潜りこんで、中にしまつてある木の実を取り出して僕の子の上に置く。すると、ツツケラが帽子の上に移動して木の実を突き始めた。僕の頭などお構いなしに

「ガー」

アーマーガアに吊られたゴンドラに乗るカヒリは海の上を飛行している。

「ハラさんの話し通りの子ね。私のファンなのは驚いたけど」

『貴方も有名人だもの。本当は貴方がアーカラ島の島クイーンに成って欲しかったのよね』

カヒリの持つタブレット端末にはライチが映し出されていた。

「私はゴルフツアーでアローラに居ない事の方が長いので辞退しました。それに、実力

じゃあライチさんの方が上です」

『謙遜しちゃって』

カヒリは溜め息交じりに言ったのを、ライチは『謙遜』と返す。

『もうじきワールドゴルフチャンピオンシップスが開かれるのでしよう?』

「そうね、名だたる強豪が参加しているので私も燃えているわ」

『そうは見えないけど』

「プロとして感情を見せないようにしているだけよ」

『そう、それじゃあ先に言っておくわ。頑張つてね』

「ありがとう、ライチさん」

カヒリは通信を切って、窓から見える水平線を眺める。

「アローラは外から見たら平穏そのもの……。それ故に……。ね」

カヒリは椅子に深く座り直し、ゴルフキャップを取る。

「案外彼の言う事も間違っていないのかもね。こんな事言うとは島キングや島クイーン達に怒られそうだけど」

正面の窓にはメレメレ島の輪郭が映り始めていた。

「何で!?!何で通せんぼしてるの!?!」

全力でロイヤルアベニューを目指していたハウの目の前にはウソツキーが横一列に並んで立ちほだかつていた。

「これじゃあマラサダシヨップに行けないじゃないかー!!」

ハウは頭を抱えてその場に蹲る。

「こうなったら、上から行けないか行ってみよう」

しかし、直ぐにハウは気持ちを切り替えて来た道の反対側へと全力で駆けて行った。

「はあ」

僕は溜め息を付く。

『目的のオハナタウンに着いたのに溜め息口トか?』

「危うく、リーリエから貰った帽子を台無しにする所だった」

『レーヴが呆けてたから口ト』

ロトム凶鑑は腕を組んで言う。

「まあ、それは良い。いや、良くは無いかど置いておく。問題は二つ・・・」

僕はその場にしゃがみ込んで頭を抱える。

「一つ、ハウに追いつけない・・・」

『街の人に聞いたたら、『マラサダー!!』って叫びながら走って行く少年』を見ているロト。追いついてはいるロト』

「ハウはマラサダに関してなら体力は無尽蔵なのか・・・どこ行っても休まずに走るマラサダと叫ぶ少年の話ししか聞かない」

『この先の牧場を抜けた先に五番と六番道路ロト。でも、街の人の話だと六番道路方向にはウソツキーが封鎖していて五番道路方向しか行けないロト』

「いつかは追いつくと思うけど・・・二つ目というか、最優先したい事」

僕は立ち上がって歩き始めながら、後ろから跳ねながら追って来るポケモン達を見る。

「先ずはこいつらを何とかしたい!!」

僕は全力で走った。すると、跳ねて追ってきたポケモン達は翼を広げて飛びながら追いかけて来る。

『ツツケラが更に増えて、それに何匹かケララツパも加わったロト。ケララツパはツツケラの進化形ロト』

ロトム図鑑が説明してくれる。

「説明は良いから、ロトムも自分で飛んで逃げてくれよ。意外と君は重いんだぞ」

『失敬なロト。僕はこれでも種族の中では軽い方ロト』

「筐体が重いし、種族内の重さ何て誤差だ!!」

僕は走りながらロトム凶鑑にツツコミを入れる。

「こっとなつたら」

カバンの中に手を入れ、瓶を取り出す。

「ミツハニーのハニーシロップだ」

立ち止まってツツケラとケララツパの群れに向かって投擲する。群れは瓶を突き始めたので、今のうちに僕は五番道路に入った。

第16話 グラジオ登場

五番道路に入った僕は肩で息をしながら木陰に移動し、その場に座った。

「ロトム・・・」

『何ロト?』

僕の問いにロトム凶鑑が金具を外して出てくる。

「撒けた?」

ロトム凶鑑がその言葉に僕が走って来た方の道を確認する。

『ケララツパ及びツツケラの姿は確認できないロト。撒けたと思われるロト』

それを聞いて僕は仰向けになって寝転んだ。

「ロトム、少し休みたい」

『何を言ってるロト!?! ハウを追わなきゃ追いつけなくなるロト』

「それもそれで、困るな」

僕は寝転ぶのをやめて起き上がった。丁度息も整ったところである。

『さあ、行くロト』

ロトム凶鑑がそう言った時に丁度爆発音が辺りに響いた。

『な、何ごとロト!?』

「行ってみよう」

ロトム凶鑑が驚いて周囲を見渡し、僕は音のする方に駆けていく。ロトム凶鑑もそれを見て追いかけて来た。

「あははー、流石に準優勝者は強いや」

僕とロトム凶鑑が目的の場所に着くと、ハウが何やら言っている。辺りはまだ煙が立ち込めていて相手の姿は見えないが、ハウの前で目を回しているオンバットを見るに、バトルをしてやられたようだった。

「ハウ、大丈夫?」

僕はハウの近くに行つて声をかける。ハウも僕達と気付いたのか、こちらを見て来る。

「あ、レーヴ。気を付けて、あいつはレーヴを探しているみたい」

ハウがそう言ったのと同時に煙が少しずつ晴れ始め、相手の姿が見える。

「レーヴ?」

同じ年くらいの少年が顎に手を当てたままこちらを睨んでいる。

「そうだ、僕がレーヴだ。僕を探しているみたいだが・・・」

僕がそう言うと、少年は顎に当てていた手を腰に回した。

「フツ、用心も何もないんだな。ポケモンでも、危険予知をするのに」
「君は、何処かで見覚えがある」

僕がそう言うと少年はキョトンとした顔になった。

「まあ、お前とは戦っていないからなあ」

そう言つて少年はボールを三つ取り出し、その場にポケモンを三体出す。

「俺はグラジオ。スカル団の用心棒をしていて、今はお前を倒すよう言われて来ている」
グラジオと名乗つた少年の元に居るポケモン・ブラッキーが勢いよく僕の元に駆けてきて飛び掛かる。

「あぶ!？」

僕は咄嗟に掴んだ物でブラッキーの爪を受け止めた。

『盾に使うなんて酷いロト!!』

その物とは、僕の近くに居たロトム図鑑だった。受け止められてもブラッキーはもう片方の脚で攻撃してくる。

「ちよつと、落ち着いてよブラッキー!!」

またしてもロトム図鑑で攻撃を防ぎ、僕は後退する。

『また僕を盾にしたロト!!』

ロトム凶鑑が抗議の声を上げるが、僕は上着からボールを取り出そうとしていたので半ば無視する形になる。

「ごめんよロトム。でも、仕掛けてきたのは向こうだよ」

僕はラグラージをその場に出してブラツキーと相對する。

「ラグラージ、れいとうパンチ」

ラグラージの拳を冷気が纏い、ブラツキーに殴りかかる。

「イカサマ」

しかしそのパンチを飛び跳ねて避け、勢いに乗っていたためにバランスを崩しかけた所を降りて来たブラツキーが背中に乗り、ラグラージを俯せに倒す。

「ハイドロポンプ」

ブラツキーが背中から降りる為に飛び跳ねた瞬間を狙ってラグラージが体の向きを変えて水流を放つ。背中側であったため見えていないと思ひ込んでいたブラツキーは咄嗟に対応できず直撃した。

「どうだ!?!」

レーダーの役目を持つヒレのお陰で死角の無いラグラージにとって背中側に居たかからと言って油断したのが間違いであった。ブラツキーは上手く着地をしたが、ダメージは与えた。

「……までだな」

グラジオがそう言うと、ブラッキーが紫の光に包まれて別の形となって現れる。

「ゾロア!？」

変化の解けたゾロアは小馬鹿にしたように笑うが、ハイドロポンプが予想以上のダメージを与えたのかその場に目を回して倒れる。

「戻れゾロア」

グラジオがボールにゾロアを戻す。

「ご苦労様、ゆっくり休んでくれ」

グラジオは労いの言葉をかけ、ボールをしまう。

「リオル、俺たちの戦いをよく見ておくんのだ」

グラジオはボールから出している残り二匹のうちの一匹、リオルに告げる。リオルは両腕を体の前で構えて『リオツ!』と鳴く。

「いけ、ヌル」

後ろに控えていたポケモンが姿を現す。僕が今まで見たことがないポケモンなので、これもアローラのポケモンと思ってロトム凶鑑の方を見たが

『データなし、データなし……。あのポケモンもデータが見つからないロト!!』

「なら、アーマーガアと同じもつと別の地方のポケモンか」

僕はそう思い、ヌルと呼ばれたポケモンを観察する。鋭い鉤爪を有する前脚と鱗の様な模様がある後脚の四足歩行であり、魚の様な尻尾と鳥のようなトサカを持ち、頭部全体を覆う巨大な仮面を被ったポケモン。

「そのポケモンは継ぎ接ぎの様な異質な容姿に見える。まるで、人が手を加えた人工ポケモンみたいだ」

僕の言葉にグラジオは無言で腕を組んでいる。

「ラグラージ、じしんだ」

ラグラージが両手を地面に打ち付けるとそこから衝撃波が発生してヌルにダメージを負わせる。

「そのポケモンが異質なのは分かる。油断するなよ、ラグラージ」

僕の言葉にラグラージが構えを取って答える。

「トライアタック！」

グラジオの指示にヌルのトサカが赤青黄色の三色に発光し、続いてそこから同色の光線が放たれた。一直線に向かってきた光線はラグラージに直撃して怯ませた。

「シザークロス」

再びグラジオの指示にヌルはラグラージに向かって走り始める。

「見た目ほどスピードはないのか」

ヌルは頭部を覆う仮面が重いのか、見た目の印象程速く動けないようだった。それでもある程度近づいた所で飛び上がり、前脚をクロスさせて切り裂こうと飛び掛かってくる。

「受け止めろ、ラグラージ」

ラグラージは両手を前に出して切り裂かれる前に前脚を掴んだ。ヌルは攻撃を止め、着地した後ろ脚を使って離れようとするが、ラグラージは掴んだ前脚を離そうとしな

い。「大きな岩を持ち上げたり引つ張り・・・時には大型船を曳くほどの力を持つラグラージに力で勝つのは難しいよ。そのままハイドロポンプ！」

ラグラージの口から勢いよく水流を放ち、身動きできないヌルに直撃した。ヌルは後方へと飛ばされるが、体を翻して見事に着地する。

「パワー勝負では分が悪いか・・・。ヌル、次で最後だ」

グラジオがそう言うと、

「ブレイククロー!!」

手を鉤爪状にしてヌルに指示を出す。

「グオオオオオ！」

ヌルが咆哮をあげてラグラージ向かって走り出す。

「こつちも終わらせよう。れいとうパンチで迎え撃つ」

ラグラージは腕に冷気を纏わせてヌルを待ち構える。

「今だ!!」

ヌルが前脚を突き出してラグラージに飛び掛かると同時に僕が指示を出す。ラグラージはそれに従ってれいとうパンチをヌルの頭部目掛けて放った。攻撃はお互いが相打ちの形で吹っ飛ぶ。ラグラージもヌルも木に叩きつけられ、地面に倒れた。

「ラグラージ!」

「ヌル!」

僕とラジオオはお互いが自分のポケモンの元に駆けていく。ラグラージとヌル。両者とも立ち上がろうとするがダメージが大きく再び地面に倒れる。

「無理するな、ヌル。よくやった」

「ご苦労様ラグラージ。ポケモンセンターまで休んでくれ」

僕はネットボールを取り出してラグラージを戻す。続いてラジオオの方に向き直って次のボールを出そうとすると

「待て、もう十分だ」

ラジオオは制止する様に手を突き出した。見ると、ヌルの頭部の仮面にヒビが入っている。

「どうして?。そのヌルはもう戦えないにしても、そこにいるリオルやゾロアが化けていたって事は少なくともブラッキーは持っている筈」

ゾロアは自分の持つ手持ちの何かに化けて出てくる。フィールドに出るまで、トレーナーはゾロアが何に化けているのか分からないのだ。

「このリオルはまだゲットしたばかりで調整中だ。ブラッキーはリオルとの戦いで疲れている」

「こちらがその事情を考慮する理由があるとも?」

僕がそう言うくとグラジオは驚いた顔になったが、直ぐに元に戻り

「好戦的に見せかけているが、バトルの意思の無いポケモンをお前は傷つけることができない性格なのは分かっている。俺は今戦う意思はない」

グラジオがそう言うくと、立ち上がったヌルと近づいて来たりオルと共に背中を向ける。

「ちよつと待った!!」

グラジオが立ち去ろうとしているとその先から二人のスカル団の格好をした男女が現れる。

「ボスが高く評価しているから任せてみたけど、それでも負けるなんてね」

女性の方が言い、男性の方が一步前に入る

「でも、そいつ：レージュだっけか？そいつのポケモンは今弱ってる。やるなら今がチャンスだ」

そう言つてボールを取り出そうとするが、

「オヒア、レファ。やめておけ」

グラジオが二人を制止する。

「お兄ちゃん、用心棒が何か言ってるよ」

お兄ちゃんと呼ばれた男性、オヒアがグラジオの方を見つつ、ボールを取り出す。

「妹よ、先にこの用心棒を叩き潰すか？」

妹、レファもオヒアに倣つてボールを取り出した。

「俺に勝てた事もないのに、ポケモンを無駄に傷つけるのか？」

グラジオは凄みをきかせて二人を睨む。

「傷つけるだ!?!。スカル団に用心棒としてお前の口からそんな言葉を聞くとはなあ」

オヒアは笑いながら言う。すると、ポケギアのメール受信があり、レファがそれを確認した。

「お兄ちゃん、その用心棒を伴って来いって姉御が」

レファの言葉にオヒアは僕の方を見る。

「運のいい奴だ。でも、今後もしカル団の邪魔をするならいつか相手になるぜ」
そう言つて二人は引き返していく。

「俺としたことが、バトルの心構えができていなかった」

グラジオはこちらに向き直り、腰に手を当てて言う。

「強いやつを相手にするのに、連続でバトルするべきではなかったという事だ」

グラジオはハウの方を見て言う。

「俺が強いやつ？」

「お前は弱くない。ポケモンを鍛えればお前の祖父の様な立派なトレーナーになれる」
グラジオは再び反対側を向き、オヒアとレファの歩いて行つた方を見る。

「このヌルにまともにダメージを与えたのは、ハウと言つたな？。お前が初めてだ」
そう言つて歩き始める。

「レーヴ。今日のバトルは俺の負けで良い。だが、いつか本気のバトルをすることになるだろう。あと忠告だ。スカル団には関わらな」

グラジオの左側をリオルが。右側をヌルがそれぞれ歩きながら遠ざかつて行く。

「関わるなって言っても。悪事を見て見ぬふりはできないよなあ」

ハウが頭の後ろに手を組んで言う。

「あのグラジオ、悪人なのかなあ？」

ハウの言葉に僕はロトム図鑑を呼び寄せてリオルの説明文を出してハウに見せる。

「リオルは心を読むことができるポケモンだ。そんなポケモンがグラジオを信賴して付いて行つた。グラジオは、悪人じゃないよ」

「そっかあ。良かった」

ハウは無邪気な笑顔を浮かべる。

「待つていましたぞ、カヒリ殿」

リリイタウンにあるメレメレ島の島キング・ハラの自宅を訪れたカヒリをハラは迎え入れた。

「まずは座つて下さい」

ハラはカヒリをソファに案内し、テーブルを挟んで向かい合つて座る。テーブルには弟子がお茶を淹れたグラスを置く。

「アローラ代表として前のオープン・ド・カロスでも優秀な成績で終えたと聞きましたぞ。次のワールドゴルフチャンピオンシップスにもアローラ代表として参加するとラ

イチ殿から聞きましてな」

ハラはそう言いつつ、お茶を飲む。

「他の地方からも多くの強豪が参加しますので、毎回良い結果を残せるとは限りませんが、応援してくれるアローラの人達の為にも全力を尽くします」

「いつもは遠征前に丁度奉納試合を見学に来られますが、今回はお見えになられなかったので心配しましたぞ」

カヒリは飲んでいたお茶を一旦テーブルの上に置く。

「ごめんなさい。練習場で最後の調整をいたしましたので」

「そうですね。まあ、その奉納試合で面白い少年が優勝しましてな。その少年は今島巡りでアーカラ島に挑戦中との事ですぞ」

「レーヴ君ですね」

「なんと!?!。御存知でしたな」

ハラは驚いたように言う。

「偶然ここに向かう際に会いました。彼、私のファンと言っていました」

ハラは自宅で話し込んだ後、カヒリはゴンドラに乗り込んでアーマーガアが飛び立つ。

（ハラさんの息子は脱落から立ち直れず別の地方暮らし。でも、孫がアローラに帰って来て島巡りをするための実力を身に着けるために修行中。・・・彼は達成したのにグレたのよね）

カヒリの乗るゴンドラは再びメレメレ島とアーカラ島の中間の海上を飛び続ける。

（貴方はいつまでこんな事を続けるつもりなの）

第17話 スイレンの罠

少し先にあるポケモンセンターでラグラージやハウのポケモン達を回復させて外に出た。

「いや、グラジオのポケモンは強かったけど、それを退けるレーヴはやっぱり強いな」

ハウが頭の後ろに腕を組み、僕の方を見て言う。

「ヌルに関してはハウがダメージを与えていたってのもあるけどね」

「いや、でも、そのヌルってポケモンは初めて見た。レーヴも見た事無いんだよね？」

「うん。ロトムが最初分らないと言うから他の地方のポケモンだとも思うんだが、あの姿が気になる」

僕は考え込むように顎に手を当てる。

「あの継ぎ接ぎ姿……あの場でも言ったけど、人の手で作られた人工ポケモンなんじゃないかと思う」

今までも何匹かの人工ポケモンは確認されている。特に有名なのがポリゴンだった。

「何でそんなのを持つてるんだろ？」

「分からない」

僕は考えるのを止めて進もうと思っっている方を見る。

「ここから先が、『せせらぎの丘』……。ククイ博士が言う最初の試練の地」

「港で会ったレーヴ君、無事にアンタの試練まで来れるのかな？」

コニコシテイにある食堂にアーカラ島の島クイーン・ライチが居た。

「どうでしょうね？。あたしの見立てでは実力上は来れると思っっていますけど」

ライチの座るテーブルに食事を運んできたマオが食器を並べながら言う。

「うくん、やっぱりマオの作る乙定食スペシャルは最高ね。アローラの特産品をふんだん使っつて、家庭的で心にしみこむような味よ」

「ありがとうございます。料理人として、これ以上ない褒め言葉です」

マオはお辞儀をして言う。ライチは出された定食を数分で平らげてしまった。

「でも、最初の試練から一癖も二癖もある相手ですから。苦労するかもしれませんね」

マオが平らげられた食器を一つずつお盆に載せて厨房に運びながら言う。ライチはそんな彼女の後姿を見ながら

「レーヴ君は島巡りを脱落すると思う？」

「いえ、間違いなくあたしの所まで来ると思っていますよ。スイレンの試練には、苦勞するでしょうけど……」

「私、スイレンと申します」

せせらぎの丘に入った僕とハウの前に浮き橋に立つスイレンと名乗る少女と対面した。ノースリーブのセーラー服に波柄ズボン、恐らく滑り止め加工の施されたサンダルを履いた少女は僕とハウを交互に見てから

「こちらのせせらぎの丘にてキャプテンを務めさせて頂いています。腕の立つトレナーさん、宜しければ助けて頂けませんか？」

キャプテンを名乗ったかと思えば、いきなり助けを求められたことに僕は困惑するが、

「レーヴです、宜しくお願いします。助けと言うのは？」

相手が名乗った以上、こちらにも名乗っておいた方がよさそうだ。その後、スイレンの言う助ける内容を聞こうとする。

「レーヴさんですね。こちらへどうぞ。私に付いて来て下さい」

そう言うなりスイレンは振り返り、揺れる不安定な筈の浮き橋の上を何の苦も無く歩いて行く。僕とハウもそれに付いて行こうとするが、浮き橋に乗った途端揺れに襲われ

て二人で恐る恐る橋を渡った。

「ほら、あそこです。あれが分かりますか？」

浮き橋を渡ってしばらく行つたところにある別の湖の畔に立つスイレンは僕とハウが来るなり指を指して見せる。僕とハウもそちらを見やると、湖の一か所に勢いよく出る水しぶきが見えた。

「あの水しぶきが？」

「凄い勢いだね〜」

僕とハウがそう言うと、スイレンはこちらを向き

「ダイナミックな水しぶきでしょ？あの水しぶきに驚いてポケモンが隠れてしまい、ポケモンが釣れないと釣り人から苦情が出ていますよ」

僕とハウがスイレンのを見ると、スイレンは泣き顔になっていた。

「私、キャプテンを務めているんですけど、手持ちのポケモンがそんなに強くなくて……あの水しぶきにも対処できなくて……」

「お、落ち着いてスイレンさん。あの水しぶきを何とかすればいいんだよね？」

僕はスイレンを宥める様に言う。

「はい……。勿論泳いでとは言いません。この子をお貸しします」

そう言うなり、スイレンは腰につけているネットボールの一つを外して中のポケモン

を出す。

「クウ〜」

中から現れたのはラプラスだった。

「この子をお貸ししますので、水しぶきを調べて下さい。宜しくお願いします」

ラプラスが地面を滑るように移動して湖に入ると、僕に乗るように促してくる。

「ラプラスは人やポケモンを乗せて泳ぐのが好きと言うし・・・失礼して」

僕はラプラスの背中に乗る。するとラプラスはゆつくりとだが、水しぶきの方に向かい始めた。

「止まってくれ、ラプラス」

僕がそう言うのとラプラスは水しぶきの直前で停止する。僕はゆつくりと湖面に顔を近づけると、何やら巨大な影が見えたが、見えたと思いきや直ぐに見えなくなる。

「今のは何だったんだ？」

水しぶきは嘘のように治まっていった。すると、今度は崖下から再び水しぶきが上がるような音がする。

「レーヴさん!!。今度は下の方で水しぶきが発生したみたいですよ!!。一度戻ってください!!」

スイレンが大きな声で呼んでくる。ラプラスはスイレンとハウが待つ所まで泳いで

いった。

「レーヴ、どうだった？こつちからはレーヴが近づいた途端水しぶきが治まったように見えたけど」

岸についてラプラスから降りると、ハウが質問してくる。

「分からないな。巨大な影が見えた気がしたんだが、直ぐに見えなくなった」

「巨大な影・・・もしかして噂に聞くカイオーガ!？」

スイレンの言葉に僕はびっくりする。

「カイオーガって、昔ホウエン地方に現れたっていう伝説の?」

ハウがそう言うと、スイレンがハウの方を見る。

「そうです。ここせせらぎの丘はその昔、カイオーガが休憩場所として使っていたと言われています」

「あはは、そんな伝説相手に僕のポケモン達が戦えるかな・・・」

僕は不安になりながらポケットに入れてあるボールを触る。

「だ、大丈夫だよ。じいちゃんに勝ったレーヴならカイオーガにも勝てるよ!!」

ハウが励ます様に言ってくれる。

「ありがとう、ハウ」

僕はハウに礼を言う。ポケットに入ったボールから手を離した。

「とりあえず、下に行きましよう」

スイレンはそう言うなり、一旦ラプラスをボールに戻した。その後、スイレンの後に続いて坂を下って行った。

「ほら、あの水しぶきです」

下った先にある湖に先ほどと同じように一本の水しぶきが上がっている。スイレンは再びラプラスを出し、僕が背中に乗った。

「もう一度お願い、ラプラス」

ラプラスは水しぶきに近づいていく。しかし、今度は近くに行っただけでその巨大な影は再び移動した。みるみる水しぶきは治まり、辺りが静かになる。しかし、空は黒く厚い雲に覆われた。

「レーヴさん、こっちです!!」

いつの間にかハウとスイレンが移動していた。

「こっちから大きな水しぶきが上がる音がします」

僕が近くの岸に上がり、一緒に水しぶきが上がる湖に移動する。

「レーヴさん……」

立ち止まったスイレンは低い声で言う。

「そこに、キー。アローラではティキと言うらしいですが、木彫りの像がありますよね」
僕が振り返ると、確かに木彫りの像が二つ並んでいる。

「あるけど、それが・・・」

スイレンがこちらを笑顔で見ながら

「その像を越えたという事は、今から試練開始です」

言った。

「今後もその像はキャプテンゲートと覚えておいてくださいね。その像を越えた所から
試練開始です」

スイレンがそう言った直後、いきなり雷雨が襲う。

「もしかして、その試練つてのがカイオーガと戦う事?」

僕が恐る恐るスイレンに聞くと、

「さあ?どうでしょうかね?」

笑顔で答えた。

「ほんと、泣いたり笑ったり底が知れないよ」

表情がコロコロと変わるスイレンに少し翻弄され気味だが、試練である以上挑まないわけにもいかない。スイレンに再びラプラスを出してもらい、それに乗って水しぶきに

近づく。

「頼む、カイオーガでない事を願う」

雷が鳴り、痛いほど激しい雨が降り注ぐ中水しぶきの所に到着した僕は湖面を再び観察する。

「なにか、今度は数匹の魚影が盛んに移動している」

そう言った瞬間、巨大な水しぶきが目の前で上がる。そして、湖面と水しぶきをかき分けて巨大なポケモンが現れた。

「カイオーガじゃないけど、デカすぎだろ」

現れたポケモンはホエルオーには劣るもカイオーガには負けない巨大な姿をした魚状のポケモンだった。

『レーヴ、レーヴ』

ロトム図鑑が金具を外して僕の横に来る。レーヴはロトム図鑑の方を見ると

『あれはヨワシというポケモンロト。それがむれたすがたをしているロト。でも、通常
のヨワシよりもはるかに巨大ロト』

「あれは、群れで形成されているのか」

よく見ると輪郭が動いている。生物ではなく、その姿が集合体を示しているのだ。

『ヨワシ、こぎかなポケモン。単独ではとても弱い、集団となるととても強く、ギャラ

ドスでも退けてしまおう』

ロトム凶鑑が説明をしてくれる。

「ギャラドスどころか、カイオーガも退けそうだ」

ロトム凶鑑の説明を聞いて僕はロトムに言う。

「でも、戦わないとね」

「ギョエエエエ!!」

巨大なむれた姿のヨワシが吠えるが、僕は怯まずにポケットからボールを取り出し、投げた。

「せせらぎの丘の上空に黒く厚い雲。レーヴ君はスイレンの試練に挑んでいるみたいね」

食堂の外に出たライチはマオと共にせせらぎの丘上空に現れた雲を見て言う。

「スイレンの口車に乗せられて、いきなり試練に挑まされてなきやいいけど。あれ、結構挑戦者から苦情来るのよね。『騙された——』や『前触れ無く試練始まって主にボコボコにされた!!』とか」

「スイレンの試練で脱落する挑戦者は多いですからね」

ライチの言葉にマオが苦笑いを浮かべて言う。

「まあでも、単純に主の実力だけで測ったらスイレンのはアーカラで一番だけどね」

「そうですね。スイレンが丹精込めて育て上げた一匹ですし」

「でも、アーカラ島の主で一番えげつないのはアンタの育てた主だけどね」

「アハハ、それ言っちゃいます?」

その時、食堂奥の暗がりから大きな影がマオの後ろに歩み寄る。

「この子はあたしが丹精込めて育て上げたポケモンですもの。挑戦者の実力を確りと見極めて、達していないなら容赦なく脱落させる実力を持つてますもの」

そのポケモンの陰に一瞬光が当たり、黄緑色の鎌が見えた。

第18話 ミズの試練突破!!

「ラ〜」

僕の投げたルアーボールから現れたランターンが水中に一旦潜ったのち、湖面に顔を出す。

「頼むぞ、ランターン」

ランターンが提灯を発光させて答える。ヨワシは早速その大口を開け始める。

「気を付けろ、ランターン」

その動作を見て僕は注意を促す。ランターンも一旦水中に潜り、様子見の体勢に入った。潜ったとほぼ同時にヨワシの口から勢いよく水流が、まるでビームの如く一直線に放たれた。

「ラ〜!!」

その水流は湖面を叩き割るように撃ち抜き、水中に潜っていたランターンに命中した。そして、その水流は向きを変えて僕の方も襲う。

「うわっ!?!」

僕もその水流に襲われてラプラスから転落する。ラプラスが僕の服を啜って背中に

戻してくれたが、僕の持っていた幾つかの道具が湖面に浮かんでいる。

「あれは、ハイドロポンプかな?。凄い威力だったけど」

『違うロト。あれは只のみずでっぼうロト』

「みずでっぼう!?!。あの威力で・・・」

僕は空を見上げる。あの主が現れる少し前から、激しい雷雨に天候が変わっている。

「なるほど、この雨が」

雨で無限に水を供給する関係で、雨が降っている時は水タイプの技の威力が上がる。

反面、炎タイプの技の威力が下がる。

「天候が味方する状況、よく練られたフィールドだ」

帽子に溜まった雨水を落とし、深くかぶり直す。

「でも、それはこちらも同じ」

僕が言ったと同時にランターンが再び湖面から顔を出す。

「なみのり!!」

ランターンの背後から波が起こり、その波がヨワシを襲った。流されたヨワシは飛び出た岩に体をぶつけるが、直ぐに戻ってくる。

「多少は追加ダメージを与えられたと思うが・・・」

ヨワシは咆哮を挙げたかと思うと、近くに別のポケモンが顔を出す。

「ロトム、あのポケモンは？」

僕がロトム図鑑に尋ねると、ロトム図鑑が横に来て画面にそのポケモンの姿を映し出す。

『ママンボウ、かいほうポケモン。大海原に暮らし、傷ついたポケモンを見つけるとその特殊な粘液を使って回復させる』

「それは・・・良い能力だがこの場合は厄介だな」

そう言った矢先、ママンボウは口から水を吐き、空中でそれをリング状に形成してヨワシの周りを包み込んだ。

『アクアリングロト。あれで体力を回復したロト』

「さすが、快方ポケモン」

激しい雨が降り続ける中、ランターンとヨワシが正対する。ヨワシの少し後ろにはママンボウが控える体制となった。僕はヨワシから視線を外し、チラリと左を見る。

(なんとか、間に合ってくれよ)

再びヨワシに視線を戻すと、再びヨワシがその大きな口から水流を発射しようとしている。

「ランターン、さつきより深く潜れ」

僕の指示にランターンが水中に潜る。それと同時にヨワシがみずでっぼうを発射し

てランターンが潜った手前から撃ち抜いて来たが、ランターンがより深く潜ったために外れる。ヨワシはそれを見て水中に潜ってランターンを追いかけ始める。

「あやしいひかり」

水中では多くの技の威力が減衰するが、光なら通る。ランターンが提灯部分から青紫の光を放った。

「よし、混乱した」

真つ直ぐにランターンを追っていたヨワシから進路が左右にブレ始める。

「ママンボウを狙え。れいとうビーム」

ヨワシが混乱している隙にランターンが浮上し、今だ湖面にいるママンボウにれいとうビームを放った。

「よし、凍った」

ママンボウは周囲の水諸共に凍り付き、行動不能となる。同じく浮上してきたヨワシが湖面に顔を出したと同時に

「なみのりー」

波を起こして凍り付いたママンボウ諸共ヨワシを流した。

「よし、ママンボウは仕留めたぞ」

ママンボウは岸に打ち上げられ、目を回している。

「雨が降っているから大丈夫そうだが、後でちゃんと湖に戻してあげるからな」

水ポケモンで陸上に適応していないポケモンは長時間陸上に放置するわけにはいかない。

「ランターン、もう一度潜れ」

ランターンが水中に潜ると、ヨワシが混乱する中口を大きく開けて水流を発射する体勢になる。

「来るぞ、気を付けろ」

発射されたみずでっぼうは水中にいるランターンに直撃した。しかも、最初に喰らったみずでっぼうよりも威力が上がっていた。

「たった二発喰らっただけで、ここまで消耗するのか」

ランターンは湖面に顔を出す、その表情は明らかに体力の限界を示している。

『レーヴ、ママンボウが戦闘不能直前にてだすけをしていたロト。それで技の威力が上がっていたんだロト』

ロトム図鑑が解説してくれる。僕はランターンの方を見て

「ランターン、もう少し頑張ってくれ」

と言う。僕の言葉にランターンが提灯部分を発光させて答え、僕はヨワシから視線を外して左を見た。

(よし、間に合った)

僕はそう思い、ヨワシに視線を戻す。

「ランターン、もう一度潜れ」

ランターンが潜ると、ヨワシも追うように潜ってランターンを追いかける。

「あやしいひかり」

再び青紫の光を放ち、それを見たヨワシは混乱する。

「そのまま浮上」

ランターンは向きを変えて浮上し始める。ヨワシも混乱しているのを物ともせず追いかける。

「主として、同じ水ポケモンには負けないという矜持か・・・」

徐々にランターンに追いつくヨワシを見て、僕は言う。

「ランターン、方向転換」

真つ直ぐ湖目指して浮上していたランターンはヨワシに追いつかれる寸前に方向転換して避ける。ヨワシはそのままの勢いで水上へとジャンプしてしまった。

「ハイドロポンプ」

そこへ左からのハイドロポンプが命中した。ヨワシは何が起こったのか理解できないのか、一旦水中に逃げた。

「よくやった、ラグラージ」

僕が左側を見ると岸に岩で囲われた場所があり、その岩の上からラグラージが顔を出した。

「はえ、レーヴはいつの間にラグラージを？」

見物していたハウはレーヴを見ながら言う。片手にはスイレンが渡したと思しき和傘をさしている

「最初にヨワシがみずでつぼうを放った際、レーヴさんが道具を落としたのに気付きましたか？」

スイレンがハウの疑問に答える。

「その時レーヴさんボールは直ぐに回収したんですが、一つだけボールを開けていたんです。それが、あのラグラージが入っているボールでした」

スイレンは岩で囲われた場所を指差し

「その後でラグラージはこつそりとあの場所に移動。もともとあつた岩を積み上げ、足りない分は水中や別の場所からかき集めてあの要塞を築きました」

「スイレンさん、よく見えてたね。俺なんか全然見えなかつたよ」

ハウが感心する様にスイレンを見て言う。

「ハイ、私は家の手伝いで海に出ますので。頻繁に遠くを眺めたりする関係で目は良いんです」

ヨワシは状況を理解したのか、湖面に現れてラグラージが潜む岩の要塞に向かってみずでつぼうを放った。しかし、岩を貫けずに阻まれてしまう。

「ハイドロポンプ」

岩に囲われていてラグラージの姿は見えないが、ヒレのお陰でヨワシがどこに居るの
か正確にラグラージは把握している。岩の隙間からピンポイントに放たれたハイドロ
ポンプはヨワシに命中し、空中に飛ばされる。

「ランターン、止めを刺すぞ」

ランターンは湖面に顔を出した。

「この天候のお陰で必中技だ。かみなり!!」

ランターンの提灯部分から帯電している光の玉を空中に発射する。光の玉は雲に到
達したかと思うと、ヨワシ目掛けて雷が落ちた。ヨワシはそのままマンボウの近くの
岸と同じく倒れた。

「うわー、これがヨワシの本体か」

潤んだような体長に比して大きな目を持った白と青い体を持ったポケモンがピチピチと地面の上をはねている。

「戦闘不能にしても、元気に跳ねるんだね」

僕の手の上に載ったヨワシもまだ跳ねている。ラグラージがママンボウを抱えて湖に戻すと、ママンボウはランターンと共に泳ぎ始めた。

「ランターン、ママンボウに付いてそのまま海には出ないでくれよ」

ランターンが答える様に提灯を発光させてママンボウと共に潜った。僕は跳ねるヨワシを湖に帰しているとスイレンとハウがやってくる。

「レーヴさん、おめでとうございます。私が丹念に育てて鍛え上げたヨワシを倒されるなんて」

「丹念に育てて……鍛え上げた？」

僕はスイレンの言葉に一瞬理解が追いつかなかった。

「え？だって……釣り人から苦情とか……え？」

「ああ、その話ですか」

スイレンはそう言うと、舌を出して

「嘘です」

と言った。

「では、試練達成の証です。これを受け取ってください」

スイレンは僕に青く透き通ったひし形のクリスタルを渡す。

「それはミズのZクリスタルです。私、スイレンの水の試練を突破した証でもあります」

そう言つてスイレンは数歩後ろに下がり

「そして、Z技を発動させるためのポーズはこれです」

そう言つてスイレンは顔の前で腕をクロスさせ、大きく回したのち再び腕をクロスさせたまま前に突き出すように止め、体の左側で波を意識する様に腕をユラユラと揺らして体の右側に腕を持って来て止めた。

「これが、ポーズです。覚えて下さい」

そう言つたと同時に、雨が止んで太陽が出る。

「さて、雨が上がったみたいですし五番道路のポケモンセンターまで戻りましょう」

スイレンがそう言うなり、振り返つて歩き始める。僕とハウもそれに付いて行つた。帰り道に赤いギャラドスを釣った話やマナフィーに会ったことがある話をされたが、僕やハウが驚いて聞き返したりすると『嘘です』や返答を濁されたりした。

「次の試練場所はヴェラ火山の公園ですね。元来た道をオハナ牧場まで戻つて南下すればたどり着けますよ」

五番道路のポケモンセンター前まで戻って来るなり、スイレンは振り返って言う。

「あく、そっちはウソツキーが封鎖してて通れないんだ。レーヴ、別の道から行こう」

ハウが僕の方を向いて言ってくる。するとスイレンが口に手を当てて

「またあのウソツキー達は悪さをしてるんですね。……大丈夫ですよ。先ほど渡したミズZのZ技を繰り返せば逃げていきます」

「そうなの？」

ハウが聞き返すと、スイレンは笑顔になり

「はい。あの子たち、前にも同じ悪さをしたのでお仕置にミズZを放って追い払いましたから。多分、ミズZの恐ろしさは覚えていると思いますよ」

「ウソツキーにみずタイプのは技は効果抜群なのに……更に威力の高いZ技を使うなんて……」

僕はスイレンの方を見て小声で言う。

「それじゃあレーヴさん、ハウさん。私はこれで失礼します。釣りの話をしていたらしたくなりましたので。あ、今度せせらぎの丘に訪れたら良い釣りスポット紹介しますね」

そう言ってスイレンはせせらぎの丘の方に戻っていく。僕とハウはそれを見送り

「スイレン、底の知らないキャプテンだ」

「嘘なのか本当なのか、分からなかったね〜」

そう言い合った。

「フフフ、あのレーヴさんのポケモン。強かったな〜」

せせらぎの丘の浮き橋を渡りながらスイレンはそんな独り言を言う。

「それに、水ポケモン。ランターンとラグラージ、可愛かった」

その時、湖面に巨大な影が現れて浮き橋を渡るスイレンに近づく。そして、渡り終えたスイレンの近くの岸で影が姿を消す。

「でも、やっぱり一番かわい水ポケモンは」

その瞬間、巨大な水しぶきを上げて水しぶきに劣らない位巨大なポケモンが岸に上ってくる。蜘蛛のような出で立ちで頭の周りと脚の関節部に水泡を有する体長三メートルは有ろうかと思えるポケモンだった。

「オニシズクモですね。あま〜い、〜苦労様」

「あわあわあ!!」

水泡から泡を発生させてスイレンの言葉に答えたオニシズクモと呼ばれたポケモンはスイレンの後に付いてせせらぎの丘奥地へと入って行った。

「雨が止んだようだな」

アーカラ島、ヴェラ火山と呼ばれた火山の火口付近に設けられた木組みのフィールドの上に赤と黒のメッシュの髪、上半身半裸のズボン一丁の出で立ちでせせらぎの丘方面を眺める少年が居た。

「スイレンの試練を突破したという事は、次に俺の元に来るのか」

その少年の後ろには三匹の青緑色の炎を纏った骨を持つポケモンが骨を回転させながらダンスをしていた。

「よし、来た時に備えてもつとダンスのキレを磨いておくぞ」

そう言って少年は三匹のポケモンと同じような骨を持ち、共にファイアーダンスを始めた。

第19話 ロイヤルマスク!?

五番道路を抜けてオハナ牧場に戻った僕とハウは目の前に立ち塞がるウソツキーの目の前に立つ。

「そうそう、ウソツキーがこんな風に立ち塞がってて、先にあるロイヤルアベニューに行けなかったんだよね」

ハウが腕を頭の後ろに組んで言う。

「僕は君を追いかけてたけど、ちよつとここら辺はトラブルがあつてそれどころじゃなかった」

僕は周囲を警戒して言う。またツツケラ・・・カヒリ曰くドデカバシ一家に見つからないかを。

「ごめんごめん。俺、マラサダの事になると、それで頭一杯になるからさあ」

「知ってるよ、ハウ。ここに来るまでに他の人からも君は『マラサダと叫ぶ少年』って事で凄く印象残ってたみたいだから」

「ウゲエー!。それはそれでやだなあ」

僕はネットボールを取り出し、ラグラージを出す。ラグラージはボールから出るなり

僕の所に来て頼ずりする。

「よしよし、先の主戦でランターンを上手く援護してくれてご苦労様」

僕は頭を撫ぜつつ、もう片方の手でバッグに入っているスイレンから貫つたミズ乙を取り出す。

「レーヴ、なんかウソツキー達が震えだしたんだが」

ハウの言葉に僕がウソツキー達を見ると、確かに怯える様に震えている。

「ラグラージ、脅かすだけで大丈夫だからね」

そう僕が小声で言うと、ラグラージは頷く仕草をする。僕はラグラージから離れて乙クリスタルをリングに填めた。

「まさか、初めての乙技の使用がバトルじゃなくこんな事とはね」

腕を顔の前でクロスさせる。すると、乙クリスタルが青色に輝きを放つて全身に力が漲る感じがする。

「これが、乙パワーか」

ラグラージも同様のポーズをし、僕の動作に合わせて動く。青色のオーラを纏つたようにラグラージ自身も力を感じてるようだった。

「ラグラージ、行くぞー！」

僕がポーズの最後を決める直前、頭の中に言葉が浮かんだ。最後に腕を右側に持つて

きたときに

「スーパードアクトルネード!!」

頭に浮かんだ言葉を言った。ラグラーズがそれに反応して口から水を出しながら回転して突進する。そしてウソツキーの手前で停止して見せた。

「ウソツキーー!!」

驚いたウソツキー達は全員一目散に振り返って逃げていく。

「スイレンからお仕置されてトラウマだったのかな?」

ハウが僕の所に来て言う。

「そうだと思うよ。ウソツキーは見た目からくさタイプと勘違いされやすいけど、実際はいわタイプだからね。みずタイプの技は苦手だから、そこに強力な技をされたらトラウマになるよ」

僕はそう言って逃げ出しているウソツキーを見送る。

「さて、行こうか。ロイヤルアベニューに」

六番道路の途中の道を曲がった先にある町、ロイヤルアベニュー。花壇を囲むようにロータリー式の歩道が設置された公園が目の前にある。

「ここが、ロイヤルアベニューか」

僕とハウはその公園に足を踏み入れた。

「ん？このニオイは・・・」

すると、ハウが何やらニオイを嗅ぐ仕草をし、ニオイがしているであろう方向を見ると

「マラサダシヨップだ!!」

そう言うなり全速力でダッシュしていく。僕は目が点になりながらも後をゆつくりと付いて行く。

「マラサダ♡」

ハウはそう言って公園のベンチに腰掛けてマラサダを頬張っている。脇にはマラサダがどっさりが入った大きな袋が置いてある。

「やつと買ったよ。長かったよ。遠回りもしたけど、ようやく食べられる」

僕の横に腰掛けるハウが幸せそうな顔で食べていると、見たこともない鳥ポケモンが寄ってくる。

「鳥ポケモン!?!」

あのツツケラやケララツパが少しトラウマになっている僕は驚いて椅子から落ちそうになった。

「アハハ、大丈夫だよレーヴ」

ピンク色をしたフラダンサーを思わせる鳥ポケモンはハウの近くに寄ると、マラサダの入った袋の淵に掴まろうとジャンプしたが、袋自体に強度が無いので掴んでもそのまま倒れた。

「マラサダが食べたいの?。ならあげるよ」

そう言つてハウはその鳥ポケモンに袋から一つマラサダを取り出して目の前においてあげる。それを見て立ち上がった鳥ポケモンはマラサダに寄つていき、啄んだ。

「ハウ、そのポケモンは?」

僕は恐る恐る近づいてその鳥ポケモンを観察しつつ、ハウに尋ねる。

「ああ、このポケモンは『ちよつと待つロトム!!』」

ハウが言おうとした矢先、ロトム図鑑が割つて入る。金具を広げて出てきたロトム図鑑がその鳥ポケモンをスキヤンして画面に表示させる。

『オドリドリ、ダンスポケモン。これはふらふらスタイルだロト。揺ら揺らと揺れたダンスを披露し、敵の身も心も穏やかにする』

ロトム図鑑が説明を終えると別の画面に切り替わり、目の前のオドリドリ以外の三種類が映し出される。

『オドリドリはこの姿以外にも三種類確認されていてそれぞれにめらめらスタイル、ま

「いまいスタイル、ぱちぱちスタイルと言うロト」

「へえ、四種類の姿があるんだ」

オドリドリは満足したのか飛び立ち、中央の花壇の所まで飛ぶとダンスをし始める。

「これがロトムの言うダンスかあ。敵対心は無いけど、穏やかになるよ」

そう言っつて僕はバッグからカメラを取り出し、オドリドリの正面に移動してシャツターを切った。

「あれ？ハウ、そういえばあの建物は？」

背後にある巨大なドーム状の建物を指差してハウに聞くと

「忘れてた!!ククイ博士にマラサダシヨップの場所を聞きに行ったとき、シヨップのある町に行ったらロイヤルドームに行くよう言われてたんだ!!」

ハウが立ち上がるとこちらに駆けてくる。

「あれが多分ロイヤルドームだね。すぐに行こう」

ハウは僕の腕を引いてそのままロイヤルドームへと駆けて行く。

中に入るとそこには

「レーヴか」

グラジオがいた。

「グラジオ・・・どうしてここに？」

僕がグラジオに相對する。グラジオは僕の方を見て中二病のようなポーズを決め「フツ、強くなるためにここにはよく訪れている。孤独を埋めるには最適だからな」

「アハハ、グラジオは相変わらずだね」

ハウは手を後ろに組みながら言う。

「お前たちは何をここにへ？」

グラジオが僕とハウを交互に見て言う。

「いや、博士がここに行くようになって・・・」

「よくぞ来た、君たち!!」

いきなり二階から大声で言ってくる人物がいた。僕達だけでなく、ドーム内にいる人間全員がその人物に注目する。

「我こそはポケモンバトル。そして、ここロイヤルドームで行われるバトルロイヤルの伝道師!!。人は私を、ロイヤルマスクと呼ぶ」

階段を下りてくるなり、僕たちの方に向くロイヤルマスクと名乗った男性。周囲の間は知っているのか、声援を挙げています。覆面をしていて素顔は分からないが、鍛え上げられた腹筋を露出させる上半身裸に下半身をロングタイツの出で立ち。

「まさか、ポケモンと一緒に自分も戦わないですよね？」

僕はその恰好を見て真つ先に思い浮かんだ疑問をぶつける。

「戦わん!!」

つと、きっぱり否定してくるロイヤルマスク。

「アローラに古くから伝わるポケモンバトルの形式を教えるぞ。バトルロイヤルとは!。四人の!!。ポケモントレーナーがそれぞれ三匹ずつ持ち!!。誰かのトレーナーの手持ちが全滅したときに一番多くのポケモンを戦闘不能にしていたトレーナーが勝利となる!!」

場が静まり返った雰囲気となる。

「まずはお試しだ。丁度三人居るし、私も入れて一匹ずつで試合をしよう」

そう言ってロイヤルマスクは奥へと入っていく。

「俺は強くなるために来たんだ。戦えるなら、誰でも構わない」

グラジオも奥に入ってしまった。

「レーヴ、どうする?俺は、ちよつと戦ってみたい」

「なら、行こうかハウ。強そうなトレーナーだったし、腕試しさせてもらおう」

僕とハウも先に入ってしまった二人を追うように入っていく。

『ここはロイヤルドーム、バトルロイヤル会場です』

奥の闘技場には既に観戦する人たちが一杯に入っており、熱気に溢れていた。そんな中、アナウンスが続く。

『今日はお試しの試合ということで使用ポケモンは各一体。では、選手の入場です』

僕のいる入り口の扉の上にある合図の光が赤から青に変わる。それを確認して会場へと出ていく。

『まずは緑コーナー!。各地方を旅してきたトレーナー、レーヴ!!。アローラでは現在、島巡りに挑戦中とのこと。多くの経験を積んできた実力は如何に!?!』

歓声が挙がる中、僕はトレーナーが立つ円の中心へと移動する。続いて、黄色コーナーからハウが出てきた。

『黄色コーナー!!。メレメレ島の島キングを祖父に持つトレーナー、ハウ!!。島巡りに挑戦するための実力を身に付けるべく、現在は修行中とのこと。果たして、祖父譲りの実力を兼ね備えているか如何に!?!』

ハウは笑顔で手を振りながら円の中心まで移動する。青コーナーからグラジオが現れた。

『青コーナー!!。経歴不明なれど、実力は確か。当施設で複数回の出場経験があり、いずれも好成績を収めているトレーナー、グラジオ!!。今回もその実力を発揮できるか如何に!?!』

グラジオが静かに移動し、位置に付く。最後に赤コーナーからロイヤルマスクが出てくると、会場がより一層歓声が挙がる

『最後に赤コーナー!!。バトルロイヤルの伝道師であり、当施設無敗のチャンピオン、ロイヤルマスク!!。当施設設立時より無敗の記録を更新し続けており、今日も熱いバトルを見せてくれるか!!』

ロイヤルマスクが歓声に答えるように片手をあげながら歩く。会場の熱気は最高潮に達したように歓声も凄まじいものがある。

『では、各自ボールを用意して』

アナウンスの言葉に僕はボールを出す。他のメンバーも同じくボールを出した。

『それでは、レディ・ファイ!!』

アナウンスの開始の合図と同時にコングが鳴り、全員が同時にボールを投げた。

「どうしたのスイレン?。・・・そう。・・・うん、分かった。もう一本電話が入ったら、そっちにも連絡する。その時はいつものやつを準備してシールドジャングルに向かって」

電話の相手とそんな会話をするマオはお客の居ない食堂にあるテーブルを一つ一つ丁寧に拭いていく。

「私もビックリだよ。実力は港で会って大体は把握したけど、特別有利と言う訳でもないタイプでスイレンの試練を突破するなんて。・・・そう。みずポケモン好きのスイレンには良かったじゃないの。それじゃあ、またあとでね」

電話を切ったマオは厨房に戻る。

「スイレンの試練、無事に突破したんだって」

厨房奥の暗がりには居る影に向かって話しかける。その影はゆっくりと立ち上がった。

「もう一つの試練を突破したら、貴方との試練ね。久しぶりの強敵に、貴方も待ち切れな
いんじゃないか?」

その影は両手を広げるようなポーズを取って咆哮する。

「それじゃあ準備もあるし、移動しようか。・・・大丈夫よ。レーヴ君の実力なら無駄足に終わらないと思うから」

そう言ってマオは大きな鍋と数個のコンクリートブロックを台車に乗せ、厨房から出て行く。その影もマオの後ろを付いて行った。

第20話 バトルロイヤル

それぞれの投げたボールがリングに落ち、中のポケモンが出現する。

「ガアアアア!!」

僕の投げたダークボールから出たガブリアスが咆哮して構えを取る。ハウはピカチュウ、グラジオはヌルを繰り出した。そして、ロイヤルマスクの出したポケモンは

「ジャラアア!!」

体中が鱗に覆われた二足歩行のポケモン。僕がそのポケモンを見ると一部の鱗は金色をしており、見た目が美しく感じる。

「見たことがないな」

僕はロトム図鑑を呼ぼうとするがその前に

『さあ、全員のポケモンが出揃いました。特にロイヤルマスクのポケモンは数々の伝説を作り上げ、当人の無敗記録更新を常に支え続けるエース、ジャラランガだ!!!』

解説者は興奮しているのか、言葉に力が籠って紹介してくれた。会場はより一層の歓声と興奮に包まれる。ポケモン達もそれに答えるように咆哮する。

「ガブリアス、君はこういうバトルは好きだろ。思う存分、力の限りを尽くして戦って大

丈夫だ」

僕の言葉にガブリアスは爪を正面に向けてジャラランガを威嚇するように構える。ジャラランガもそれを見て腕をガブリアスの方へ向けて構える。

「その固そうな鱗……見た目はがねタイプかな」

僕は初めて見るジャラランガを観察する。その全身を覆う固そうな鱗からはがねタイプと予想した。

（ハウのピカチュウはでんきタイプ……、でんき技はガブリアスには効かない。ヌルはタイプが分からないが、使ってきた技や見た目からノーマルタイプだろう）

僕はハウやグラジオが出したポケモンを見てそう判断する。ハウもグラジオもロイヤルマスクとジャラランガを見ている。

「ピカチュウ、10まんボルト」

ハウが早速ピカチュウに指示を出す。ピカチュウが頬つぺたにある赤い斑点からバチバチと電気を出すとジャラランガに向かって放った。ジャラランガはそれを受けるが、全くビクともせずそれを払いのける。

「ヌル、ブレイククロー」

今度はグラジオがヌルに指示を出す。ヌルは僕のガブリアスに向かって走ってくる。と鋭い爪で切り裂きにかかる。

「ドラゴンクローで受け止めろ」

ガブリアスが姿勢を低くして両腕の被膜を伸ばし、ヌルの爪を受け止める。

「おいおい、組み付いてて大丈夫なのか!?!。スケイルノイズ」

ロイヤルマスクがそう言うと、ジャラランガの鱗の一部が振動を始める。その音を衝撃波の様に拡散させ、ピカチュウと組み付いているヌルとガブリアスがその衝撃波に捕まって吹き飛ばされる。

「大丈夫か、ガブリアス?」

ネットに体を押し付けて倒れたガブリアスは立ち上がり、頭を振った後に今度はジャラランガの方を向いて威嚇する。

「邪魔されて気が立つのはわかるが、これはそういう勝負だ」

僕が宥めるようにガブリアスに言うと、ガブリアスは理解したのか通常の構えに戻る。

「ガブリアス、アイアンテール」

ガブリアスの尻尾が鋼鉄の様に硬質化し、それを思いつきり振ってジャラランガに当てようとする。

「まもる」

ロイヤルマスクが透かさず指示をしてアイアンテールを防いだかと思うと、ジャララ

ンガは姿勢を低くする。

「そのままスカイアッパー」

ロイヤルマスクが拳を振り上げる動作をして指示を出す。ジャラランガも姿勢を低くしたまま拳を振り上げてガブリアスの顎に一撃を入れ、そのままジャンプして空中に打ち上げた。

「ヌル、トライアタック」

ヌルのトサカから三色の光が放たれ、落下してきたガブリアスを貫いた。

「卑怯何て言うなよ。チャンスを生かして追加ダメージを与える。これはそう言うバトルだ」

グラジオが僕の方を向いて言う。僕は帽子を被り直し

「言わないよ。これはバトルロイヤル、味方なんていない。共闘することはあってもね」

僕が言ったと同時にピカチュウのでんこうせっかがヌルを襲った。

「何?！」

「決まった!!」

グラジオが驚いた表情を浮かべ、ハウの明るい声が聞こえる。

「助かったよ、ハウ」

「へーきへーき。俺もちよつとは見せ場を作らないと」

ヌルとピカチュウはフィールド全体を使ったバトルを繰り広げている。だが、どちらも決定打を作れていない状態だった。

「アイアンテール」

「シザークロス」

片方が攻撃すれば防御をする。そんなバトルが繰り返される傍で、ガブリアスとジャラランガは睨み合う。

「向こうは向こうでやりあつてるな。レーヴ君、こっちはこっちでやろうか」

ロイヤルマスクが笑みを浮かべて言う。

「必然的にそうなりますね」

ガブリアスもジャラランガも一歩も引かずに攻めの姿勢を取る。

（しかし分からない。見た目からドラゴンとはがねタイプかと思つたが、使ってきたのは見た事もないスケイルノイズは別としてまもるはノーマル、スカイアツパーはかくとうの技）

僕は今までジャラランガが使用した技を思い出す。

（今まで、ドラゴンとかくとうを併せ持つポケモンは居なかつたが、ここアローラにはいるということか）

初の組み合わせを持っている可能性がある目の前のポケモンを見て僕はどう攻略し

ようか迷う。

「ガブリアス、まだ持ちそうか?」

僕の言葉にガブリアスは両腕を上げて答える。

「流石、レーヴ君のエースポケモンだ」

「……ん? 何故ガブリアスがエースポケモンだと御存知で?」

ロイヤルマスクの発言に違和感を覚えた僕が質問すると、ロイヤルマスクは慌てた様子で

「いや、その。なーに、こういうバトルに出すのは大抵一番強いポケモンだと相場は決まっているからね」

答えた。

「まあ、間違っていないですけど。ガブリアス、組み付け!!」

ガブリアスがジャラランガに突進する。

「受け止める、ジャラランガ」

ガブリアスの両腕をジャラランガの手が捉え、お互い組み付く。

「力で負けるなよ、ガブリアス」

ガブリアスが僕の言葉に答える様に、一步一步ジャラランガを押ししていく。ジャラランガが足を擦りながら後退する。

「ジャラランガ、後転して組み伏せろ」

ジャラランガがガブリアスの押す力を利用して共に後ろに転がり、ガブリアスの背中を地面に押し付けて停止する。ガブリアスが抵抗するが、両腕をがっしりと固定されていて動けない。

「ラストーカノン、発射準備」

ジャラランガが口を開け、そこに光が集まり始める。ガブリアスがより一層抵抗を強めるが、一向に逃れられない。

「ガブリアス、アイアンテールだ」

僕の指示にガブリアスは透かさず硬質化させた尻尾をジャラランガの背中に当てる。ジャラランガが前のめりに倒れたお陰で間一髪ラストーカノンを回避でき、固定からも脱出できた。

「ガブリアス、まだいけるか？」

ガブリアスは咆哮で答えるが、疲労も見える。

（流石に限界か）

疲労を見せるガブリアスに対し、ジャラランガはまだ余裕そうだった。ゆつくりと間合いを図るように移動している。

「ガブリアス、これできめるぞ。りゅうせいぐん」

ガブリアスはオレンジ色の光球を上に向かって放つと、光球が別れてジャラランガに向かって降り注ぐ。

「ほう、ドラゴン技最強を誇るりゆうせいぐんか。受けて立とうじゃないか」

ロイヤルマスクはそう言うのと拳を握って低い姿勢になる。その動きをジャラランガも同様に行う。

「スカイアツパー!!」

ロイヤルマスクが拳を振り上げて叫ぶと同時に、ジャラランガはその場でジャンプして拳を振り上げて降り注ぐりゆうせいぐんにむかつていく。

「冗談……でしょ?」

ジャラランガの拳に当たったりゆうせいぐんは次々と砕け散ってしまう。着地したジャラランガにダメージを与えられた様子はない。会場は盛り上がりを見せる様に声援をあげる。

「これは驚いた」

僕も、そしてガブリアスも驚いた表情でジャラランガを見る。

「スケイルノイズ」

鱗の振動によって発生する衝撃波がガブリアスを、そしてピカチュウとヌルを巻き込んだ。

『勝負あり!!ジャラランガのスケイルノイズに他のポケモンはノックダウン!!。試合を制したのは、無敗を誇るロイヤルマスクとジャラランガだ!!』

会場は一際大きな歓声が渦巻く。僕は倒れているガブリアスをボールに戻すと、拍手を送る。

『お試しの試合とはいえ、勝者はやっぱりこの人。ロイヤルマスクだ!!』

「以上がここ、ロイヤルドームで行われるバトルロイヤルの試合形式だ。実際のバトルロイヤルは三匹を持ち寄ってバトルになるんだが」

僕とハウはぐったりしてロイヤルマスクの話を聞いている。グラジオは何度か出場経験があるようで慣れてきているみたいだった。

「強いトレーナーが大勢参加しているので、今後もぜひ挑戦してみてください」

ロイヤルマスクがそう言うのと、グラジオはさっさとドームを後にするように立ち去っていく。

「そうそう、レーヴ君。君は島巡りに挑戦しているそうだね。なら、ヴェラ火山公園にいるキャプテンの元に向かうと良い。きっと、ここに負けない熱い試合ができるぞ」

そう言ってロイヤルマスクもドームから去って行く。僕とハウは背中合わせにその

場に座り込んだ。

「俺、グラジオを抑えるだけで手一杯だった」

「けど、グラジオを引き付けてくれてありがとう。お陰でロイヤルマスクと正面から戦えたからね。結果的に負けてしまったが、良いバトルだった」

「そう言えば、何か忘れてるような」

ドームを出た僕とハウ。ドーム出口で僕は腕を組んで考え込んだ。

『酷いロト。マラサダを ご馳走してくれるって言ったのに、起こしもしないで食べて、オマケにバトルをしたロト!!』

ロトム凶鑑が金具を外して僕の目の前に来て言う。

「そういえば、やけに静かだと思ったら休眠モードだったの?」

『そうロト。いざって時に動けないと困るロト。・・・それはそうと、マラサダを ご馳走するロト』

ロトム凶鑑に連れられて再びマラサダショップに行き、マラサダを買わされる。ハウの方は・・・店員がドン引きする位大量に買っていた。

第21話 カキの試練

マラサダシヨップを出て、ロイヤルドームの前の道を右に向かって巨大なスーパーマーケットが見えた。

「うわー、スーパー・メガやすがあるよ。レーヴ、寄ってこうよ」

ハウがはしやぎながら僕の腕を引つ張る。

「待って、ハウ。スーパー・メガやすって何？」

僕が引つ張るハウを止めると、ハウはそのスーパー・メガやすと呼ばれる建物を指さす。

「じいちゃんが、言ってたんだ。スーパー・メガやすは安くトレーナーに必要な物を買って揃える事ができるって。まあ、安く大量に売る手法でアローラ各地に出店しようとしてある事件を起こしちゃったみたいだけどね」

「まあ、今はそれはいいから。俺、一度スーパー・メガやすに行ってみたかったんだよ」「メレメレ島にはないの？」

「出店計画はあったみたいだけど、その事件以降は規模を縮小して営業しているみたい」
そう言ってハウは店内に入ろうとするので、僕も後について店内に入った。

自動ドアを潜ると、中は広いが所狭しと棚が置かれていて広さをあまり感じられない。棚には多くの旅に必要な品が並べられている。

「どれも定価の半額で売られているね。確かに初心者トレーナーでも安く旅に必要な物をそろえられると思うよ」

モンスターボールも定価二百円が百円で売られているように、全ての商品が定価を二重線で消されて半額の値段で陳列されている。

「だから一杯買えちゃうんだ。これも、これも。あ、これも欲しいね」

ハウは次々と手に取ってカゴに入れていく。

（なるほど、半額を謡ってトレーナーの購買意欲を刺激して沢山買わせる手法か。これなら一つの利益が低くても個数でカバーできる）

僕は感心しながら棚を見ていくと

「ハウ、いいキズぐすりとかが無いけど」

店内のどこを探してもキズぐすりはあれど上位のいいキズぐすりやすごいキズぐすりなどが売られていない。

「申し訳ございません、お客様。当店ではいいキズぐすりの取扱がございません」
すると聞こえていたのか、店員さんが言ってくる。

「そうですか、分かりました」

僕は諦めて他の物を探す。幸い、各種状態異常なおしが売っていたのでそれらと『ポケモンとたべるケーキ』を購入した。

僕は購入したポケモンとたべるケーキを切り分けていく。隣ではハウも同様に切り分けている。

「レーヴのポケモンって色んな地方のポケモンを連れているけど、どうやって友達になったの？」

「うーん、皆いろんな出会いをしたポケモン達だからね。特にガブリアスとはね」

僕はダークボールからガブリアスを出す。

「当時はフカマルだったけど、この子は洞窟で他のポケモン達に襲われているのを雌のガブリアスが守っていたんだよ。流石に、シンオウで一番強いポケモンとはいつでも大勢に襲われたらどうしようもないからね」

ガブリアスはこちらに近づいてきて僕の横に座り、切り分けているケーキを眺める。

「助けたはいいが、ガブリアスは手遅れだったよ。この子も傷ついていたから急いでポケモンセンターに連れて行った。幸いこの子はそこまで重症じゃなかったから回復したけど、急いで戻ったらもうガブリアスの姿は無かった」

「ポケモンは死期を悟ると、姿を消すってやつ？」

ハウがガブリアスを見ながら言う。

「多分。僕が戻ってくると分かかって、姿を消したんだと思う。回復後にフカマルを連れて行ったら、泣き出してしまっただ変だったよ」

ガブリアスは頬を掻く仕草をする。あの時の事を覚えているようだった。

「その後は僕とシンオウ地方を旅したんだよ。この子、寒いのが苦手で、キツサキシテイっていう雪の降り積もる奥地にある街に連れて行くのは苦労したな」

ガブリアスが腕を組んで凍える仕草をする。

「……まあ、他にも色々過去を抱えたポケモンも居るけど、今は皆仲良く旅してきたメンバーだよ」

僕は一瞬間を開けて言い、残りのポケモン達を出す。クロバットにラランテス、ラグラージとクレベースにランターン。紙皿に切り分けたケーキをのせてそれぞれの前に置く。ポケモン達は喜んで切り分けられたケーキを食べる。

「他の出会いも、今度聞かせてよ」

ハウがそう言うので、僕はハウの方を向いて

「いつか……ね」

そう答えた。ハウも自分の手持ちを出して一緒にケーキを食べる。

(そういえば、このケーキはポケモンと一緒に食べるケーキだった。自分の分を切り分けていなかった)

僕はうっかりして自分の分のケーキを切り分けるのを忘れていた。見かねたポケモン達が自分の残りを分けようとしてくれる・・・君たち、最高ですよ。

「流石に山頂の火口に近づいてくると暑いな」

僕とハウは噴出す汗を拭きながらヴェラ火山の山道を登って行く。照り付ける太陽とマグマの熱さが相まって灼熱とっていい状態だった。

「レーヴ、流石に限界だよ」

ハウがフラフラと倒れそうに歩く。

「とりあえず、そのトンネルに入ろう」

僕は見えているトンネルを指差して言う。トンネル内なら少なくとも日光は遮られて多少はマシな筈だ。

「さんせーい」

僕とハウはトンネルに入った。

「溶岩洞だね。足元とか崩れやすいから気を付けて。あと、天井とかも注意してね。溶岩が噴出してくるかもしれないから」

「レーヴは物知りだね」

ハウは感心する様に言う。事実、溶岩洞は脆い。下に空洞があれば人が乗っただけで一瞬で崩れる。しかも、質の悪いことにまだ周辺を溶岩が胎動していることもある。

「それでもないよ。さあ、気を付けて進もう」

注意をしつつトンネルを抜けると、右手にはスイレンの試練の際にみた木彫りの像が置かれている。

「ここが、試練の場。もう暑くてヘトヘトだよ、レーヴ」

火口に近づいたのでより暑さが増した。ハウは座り込んでしまう。

「日陰の岩に手を触れて、触れる位の熱さならそこに背中を預けて休んでて」

僕はそう言うと、試練の門をくぐって奥に進む。

試練の門を潜り、奥に歩いていく僕は祭壇のように岩を丸く切り出して一段高くした場所に到着する。その祭壇の上には、一人の少年が佇んでいた。

「俺の名前はカキです。このアローラ地方に古くから伝わるファイアーダンスをガラガラと共に学んでいます」

まるで燃えているような髪型をした上半身裸の短パン、サンダルの出で立ちであるその少年はカキと名乗り、背後から骨を取り出した。

「マオから連絡を受けています。貴方がレーヴさんですね」
「そうです」

知っているなら話は早い。カキは取り出した骨を回し始めると、いつの間にか骨の両端が青緑色の炎が灯っているようで、ゆらゆらとした輪郭を描く青緑色のリングが出来ている。

「俺の試練は観察力と記憶力を試します。一度目と二度目の踊りの違いを指摘してもらいます」

そう言うと、何処からともなく三匹のガラガラが現れる。だが、そのガラガラは僕を知るガラガラとは違っていた。

「そのガラガラ、もしかくしてリージョンフォーム？」

カキは一瞬驚いた表情になるが、思い出したように直ぐに冷静な顔になる。

「そういえば、マオから今回の挑戦者は地方外の人間と聞いてました。俺にとつてのガラガラはこの姿ですが、別の地方には違うガラガラが居るとい話を聞いたことがあります」

通常のガラガラと違って体は黒っぽく、？せた印象を受ける体躯だった。

「へへ、こっちのガラガラは骨に火を付けられるんだ」

三匹とも頭に被る骨に手に持った骨を擦り付けると、青緑色の炎をあげ始める。そし

て、三匹とも両端を着火させた骨を持つて横一列に整列する。

「では、気を取り直して。．．．始め!!」

カキがそう合図をすると、三匹のガラガラが骨をクルクルと回しながら思い思いに歩き始める。暫く僕が見ていると、最後に三匹がポーズを決めてフィニッシュする。僕はそれに拍手を送ると

「拍手はありがたいが、今は覚えることに集中しなくて良いんですか?」

「こんな素晴らしいダンス、タダで見して貰うならせめて拍手はしないとね。記憶してますから大丈夫ですよ」

僕がそう言うのと再びガラガラは横一列に整列する。

「では、先ほどと何が違うのかよく見て下さい。．．．始め!!」

カキの合図に、再びガラガラが骨を回しながら先程と同じルートを歩く。今の所、全く同じである。

「まさか、骨の回すタイミングが違うとかではないですよね?」

僕はガラガラ達のファイアーダンスを見ながらカキに質問する。

「そんな細かい所を指摘するようになったら有りすぎて困ります」

そうカキが答えた。ダンスも終盤に差し掛かった頃、カキが徐おもむろにカメラを取り出すと、一枚撮影する。

「これと先程のダンスとを比べてください」

インスタントカメラだったのか直ぐに現像された写真を渡される。それを見て、僕はひっくり返りそうになる。

「さつき居なかった人がダンスに参加しているんだけど、僕の目にはこんな人居なかった気がするんですが……」

写真の隅にニット帽と大きなバッグを背負った男性が映し出されている。

「この山男のダイチさんは『こうそくいどう』が使えますので、こうやって写真を撮らなると挑戦者が見逃してしまうんです」

「こうそくいどうって……マジ？」

ポケモンの技を人間が使えるなんて……

「正解なので次を……」

「待って。こんな調子のが続くの!？」

こんな調子の問題が続いたら僕は耐えれず笑ってしまう。

「二問なので、次で終わりですよ」

「助かった」

「?……では、次のダンスをしますね」

ガラガラ達が横一列に整列し、骨を回し始める。今度は先程の単純な動きではなく動

きが交差したりする。そして、最後にお約束のポーズを決めた。そのポーズが、一匹がカメラを構えているようなポーズで、他の二匹はハイテンションな観光客みたいに万歳のポーズをしている。・・・なにより

「なんで山男がいるんだよ!？」

一番気になったのはガラガラではなく先程の写真に写りこんでいた山男が今度はポーズを決めていた。

「もう無理、腹が振れそう」

「救急車呼びますか？」

「誰のせいだ、誰の!!」

僕が必死に笑いを堪えているとカキがもうワザと言つてるとしか思えない言葉をかけてくる。

「すみません。前の挑戦者もこの暑さにやられたのか、最後のダンスで蹲つてしまって結局リタイアしてしまいました」

「それは絶対に暑さのせいではないと思う。賭けてもいい」

そんなやり取りをしているとガラガラが再び横一列に並ぶ。

「では、先程と何が違うのか見比べていただきます」

そうカキが言うと、ガラガラは骨を回し始めて再びポーズを決める。先程と全く同じ

ポーズだ。乱入した山男を含めて。しかし、

「なんか大きいポケモンがいる!!」

山男の後ろに立ち上がるようにして乱入した黒いポケモンがいた。

「正解です。では、おいでませ〜ぬしポケモン!!」

「どくどく〜!!」

そのポケモンはヤトウモリが大きくなった見た目だが、後ろ足で立てるくらいの筋力があるのか、後ろ足の付け根部分が太くなっている。腹部には赤い模様も確認できる

「ヤトウモリの進化系かな。なら、どく・ほのおの複合タイプ」

僕が手持ちポケモンのボールを投げた。

「よいしょっと」

マオは深い森の中に転がしてきた台車から鍋を降ろして設置する。

「ふー。ここまでの労力を使わせたんだからレーヴがりタイアしたら許さないから」

マオはそう言っつて薪を集め始める。付いてきた黒い影は周囲を見渡すように視線を動かす。

「貴方も、皆に会って来たら。ここのを皆を守ってきたんだから、皆帰りを待ちわびている

わよ」

マオが黒い影の方に向かって言う。黒い影は暫し思案するように立ち止まったが、頷いて茂みの奥に入っていく。

「あの子も素直じゃないんだから」

マオは薪拾いを再開しつつ言った。